

鳥取県八頭郡郡家町

通常砂防事業下坂川荒廃砂防工事に伴う
遺跡の発掘調査報告書

下坂窯跡群

1988

郡家町教育委員会

序 文

郡家町の北側には、扇ノ山に源を発した私都川が東西に流れています。この私都川の中流域から下流域にかけて、古墳時代から中世に至る長い間土器を生産した窯跡群があります。この窯跡群は私都古窯跡群と呼ばれ、鳥取県内では最大規模のものです。

この窯跡群は、中でも奥谷、下坂、山田、花原、山路地区を中心とした地域にもっとも多く集中して立地しています。

今回、発掘調査を行いました下坂窯跡群は、今から約1300年ほど前から1200年ほど前に操業されていた窯跡群です。この地で生産された須恵器・瓦などの製品は、郡家町万代寺所在の八上郡衙や、郡家町の北方約10kmに所在する因幡国府や国分寺、国分尼寺などに供給されたと考えられます。

今回の発掘調査は、下坂川流域に「通常砂防工事下坂川荒廃砂防工事」が計画されたのに際し、昭和62年、県の委託を受け郡家町教育委員会が実施したものです。調査は、6月に奈良国立文化財研究所の協力を得てプロトン磁力探査を行い、その結果をまわって7月には発掘作業に着手し、12月に現場作業を終ることができました。

調査の結果、4基の窯跡をはじめ2基の窯状遺構や、窯の付属施設と思われる土坑・作業場・掘立柱建物跡などを確認しました。4基の窯跡のうち1基は、床面の一部がわずかに遺存していたのみでした。他の3基は、調査区域の関係で焚口部から燃焼部にかけての一部分の調査でしたが、良好な状態で遺存していました。しかもこの3基の窯跡は、同一地点で上下に重複して築かれており、窯の構築法を知るうえでも貴重な資料といえます。

出土遺物は、窯内のものは少量でしたが、灰原や窯構築に際しての盛土中より多量の須恵器が出土しています。器種として、壺・甕・杯蓋・皿などの日常雑器をはじめ、円面硯・三足壺や壺・盤・火舎などに用いたと思われる獸脚などの特殊な遺物が出土しています。また、瓦片もみられましたが、これは今回調査した窯の製品ではなく、窯内で製品を安定させるための窯道具として利用されていたようです。この他に、窯を構築する際に行った盛土の中から完形の小壺などと一緒に土馬が出土しており、下坂窯跡群の性格を窺い知ることができると考えられます。

最後になりましたが、この調査にあたり全面的に御協力いただいた工事関係者や地元の皆さんをはじめ、関係各位に対し心から感謝し、厚く御礼を申し上げる次第です。

昭和63年3月

郡家町教育委員会

教育長 北 村 一 利

例 言

1. 本書は、郡家町教育委員会が実施した下坂窯跡群の発掘調査報告書である。
2. 遺跡地は、鳥取県八頭郡郡家町大字下坂字大地谷、字与三兵衛平に所在し、調査は昭和62年6月13日より昭和63年3月20日までの9か月間を要した。
3. 出土遺物の整理・実測及び図面の浄書は、中野の指導で山崎保子、桑崎千早子、福田和美、松岡朋子、神矢紀子、中本和子、松本美佐保、伊藤恵美子、山田裕二の協力を得た。
4. 遺構の実測は、中野の指導で山田裕二が行い、郡家町教育委員会職員有志の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は中野が行った。
6. 下坂窯跡群では自然科学的調査を行い、磁気探査については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター西村康氏の協力を得、考古地磁気測定については、島根大学理学部伊藤晴明氏、時枝克安氏の協力を得た。また、夫々の測定結果についての玉稿も頂いた。深く感謝の意を表します。
7. 図中の方位は全て磁北をさすが、第2図は国土座標（第V座標系）にもとづき、磁北は天地軸に対し西に6度60分偏している。
8. 現地調査、整理作業中、下記の方々に御指導、御助言および御協力を得た。
田中精男、中原斉、絹見安明、亀井照人、真田廣幸、柳浦俊一、西村康、伊藤晴明、時枝克安、久保稔二郎、飯野学、加藤隆昭、平川誠、(順不同、敬称略)
9. 出土遺物、図面等は鳥取県埋蔵文化財センターで一時保管しているが将来的には郡家町教育委員会で保守管理をする予定である。
10. 発掘調査、整理作業にあたって便宜をはかっていただいた鳥取県郡家土木事務所ならびに鳥取県埋蔵文化財センターに対し、深く感謝の意を表します。

本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
はじめに	(1)
第1章 下坂窯跡群の位置と環境	(2)
第1節 立地と歴史的環境	(2)
第2節 下坂窯跡群の概要	(4)
第2章 調査の経過	(6)

第1節 調査区の設定	(6)
第2節 調査の経過	(6)
第3章 下坂窯跡の磁気探査	(9)
第4章 調査の記録	(17)
第1節 窯跡の立地と地形	(17)
第2節 試掘調査	(17)
第3節 下坂1号窯	(21)
第4節 下坂2号窯	(24)
第5節 下坂3号窯	(28)
第6節 下坂4号窯	(34)
第7節 掘立柱建物跡	(37)
第8節 出土遺物	(39)
第5章 まとめにかえて	(57)
第1節 下坂窯跡群出土遺物について	(57)
第2節 下坂窯跡群の窯体構造について	(63)
第6章 下坂窯跡群の熱残留磁気による年代決定	(67)
あとがき	(72)

挿 図 目 次

第1図 郡家町遺跡分布図	(3)
第2図 下坂窯跡群立地図	(5)
第3図 下坂窯跡群調査区配置図	(7)
第4図 下坂東地区磁気探査測定図	(13・14)
第5図 下坂西地区磁気探査測定図	(15・16)
第6図 D地区窯状遺構断面図	(19)
第7図 F地区第8トレンチ西壁断面図	(19)
第8図 下坂窯跡群遺構配置図	(20)
第9図 下坂1号窯遺構図	(22)
第10図 下坂1号窯窯体図	(23)
第11図 下坂1号窯土層断面図	(25)
第12図 下坂2号窯遺構図	(26)
第13図 下坂2号窯窯体図	(27)

第14図	下坂3号窯遺構図	(29)
第15図	下坂3号窯窯体図	(30)
第16図	第13トレンチ西壁断面・整地面覆土土層断面図	(32)
第17図	下坂2・3号窯盛土断面図	(33)
第18図	下坂2・3号窯北側盛土断面図	(33)
第19図	下坂4号窯窯体図	(35・36)
第20図	下坂4号窯遺構図	(38)
第21図	掘立柱建物跡遺構図	(39)
第22図	下坂2・3・4号窯窯体断面図・1	(64)
第23図	下坂2・3・4号窯窯体断面図・2	(66)
第24図	下坂窯跡群の残留磁気方向図	(69)
第25図	下坂窯跡群地磁気年変化曲線図	(71)
第26図	下坂1号窯出土遺物実測図・1	(73)
第27図	下坂1号窯出土遺物実測図・2	(74)
第28図	下坂1号窯灰原出土遺物実測図・1	(75)
第29図	下坂1号窯灰原出土遺物実測図・2	(76)
第30図	下坂1号窯灰原出土遺物実測図・3	(77)
第31図	下坂2号窯出土遺物実測図	(78)
第32図	下坂2号窯灰原出土遺物実測図・1	(79)
第33図	下坂2号窯灰原出土遺物実測図・2	(80)
第34図	整地面覆土出土遺物実測図	(81)
第35図	下坂3号窯出土遺物実測図・1	(82)
第36図	下坂3号窯出土遺物実測図・2	(83)
第37図	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・1	(84)
第38図	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・2	(85)
第39図	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・3	(86)
第40図	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・4	(87)
第41図	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・5	(88)
第42図	下坂2号窯南側盛土出土遺物実測図・1	(89)
第43図	下坂2号窯南側盛土出土遺物実測図・2	(90)
第44図	整地面・整地面盛土出土遺物実測図	(91)
第45図	下坂4号窯出土遺物実測図・1	(92)
第46図	下坂4号窯出土遺物実測図・2	(93)

第47図	下坂4号窯出土遺物実測図・3	(90)
第48図	第2土坑出土遺物実測図	(94)
第49図	第3・4土坑出土遺物実測図・1	(95)
第50図	第3・4土坑出土遺物実測図・2	(96)
第51図	掘立柱建物跡、表採、試掘トレンチ出土遺物実測図	(97)
第52図	下坂窯跡群出土、ヘラ記号・糸切り底拓影図	(98)
第53図	下坂窯跡群出土、タタキ文様拓影図	(99)
第54図	下坂窯跡群出土、獸脚・土馬実測図	(100)
第55図	下坂窯跡群出土、瓦拓影図・1	(101)
第56図	下坂窯跡群出土、瓦拓影図・2	(102)
第57図	下坂窯跡群出土、瓦拓影図・3	(103)
第58図	下坂窯跡群出土、瓦拓影図・4	(104)

表 目 次

表1	下坂窯跡群遺跡番号対照表	(X)
表2	下坂窯跡群出土、蓋・杯・碗分類表	(58)
表3	下坂窯跡群出土遺物集計表	(59)
表4	下坂窯跡群出土遺物法量比較表	(60)
表5	下坂遺跡須恵器窯の残留磁気の平均方向	(71)
表6	下坂1号窯出土遺物観察表	(105)
表7	下坂1号窯灰原出土遺物観察表	(105)
表8	下坂2号窯出土遺物観察表	(107)
表9	下坂2号窯灰原(溝状灰原)出土遺物観察表	(108)
表10	整地面覆土出土遺物観察表	(109)
表11	下坂3号窯出土遺物観察表	(110)
表12	下坂2・3号窯北側盛土出土遺物観察表	(111)
表13	下坂2・3号窯南側盛土出土遺物観察表	(113)
表14	整地面及び盛土出土遺物観察表	(114)
表15	下坂4号窯出土遺物観察表	(115)
表16	下坂第2土坑出土遺物観察表	(117)
表17	下坂第3・4土坑出土遺物観察表	(118)
表18	掘立柱建物跡、表採、試掘トレンチ出土遺物観察表	(119)

図版目次

- 図版 1 [1]下坂窯跡群遠景
[2]下坂窯跡群遠景
- 図版 2 [1]下坂窯跡群調査前全景 (東より)
[2]下坂窯跡群調査後全景 (東より)
- 図版 3 [1]下坂東地区 OR-6遠景 (西より)
[2]下坂東地区 OR-6近景 (西より)
[3]下坂東地区 OR-6トレンチ状況 (西より)
[4]下坂東地区 OR-7トレンチ設定状況 (西より)
- 図版 4 [1]下坂西地区 OR-3近景 (東より)
[2]下坂西地区 OR-3トレンチ設定状況 (東より)
[3]下坂西地区 OR-4トレンチ状況 (南より)
[4]下坂西地区 OR-5トレンチ状況 (北より)
- 図版 5 [1]OR-2、第7トレンチ設定状況 (南東より)
[2]OR-2、第8トレンチ設定状況 (北東より)
[3]OR-2、第9トレンチ設定状況 (北東より)
[4]OR-2調査風景
- 図版 6 [1]林道崖面状況 (H地区、第3土坑)
[2]林道崖面状況 (G地区南端)
[3]林道崖面状況 (G地区、4号窯灰原)
[4]林道崖面状況 (G地区)
- 図版 7 [1]林道崖面状況 (G地区、1号窯灰原)・1
[2]林道崖面状況 (G地区、1号窯灰原)・2
[3]林道崖面状況 (G地区、1号窯灰原)・3
[4]林道崖面状況 (G地区、1号窯灰原)・4
- 図版 8 [1]G地区南側表土除去状況
[2]G地区2号窯付近表土除去状況
[3]G地区1号窯付近表土除去状況
[4]F地区南側表土除去状況
- 図版 9 [1]D地区窯状遺構遠景

- [2]D地区竈状遺構露呈状況
 [3]D地区竈状遺構断面
 [4]D地区竈状遺構遺物出土状況
- 図版10 [1]下坂1号竈窯体検出状況(西より)
 [2]下坂1号竈窯体検出状況(東より)
- 図版11 [1]下坂1号竈窯壁遺存状況(北より)
 [2]下坂1号竈窯壁遺存状況(南より)
 [3]下坂1号竈窯体床面遺存状況(東より)
 [4]下坂1号竈遺物出土状況(北より)
- 図版12 [1]下坂1号竈階段状遺構検出状況(東より)
 [2]下坂1号竈階段状遺構、道状遺構検出状況(東より)
- 図版13 [1]F地区調査前全景(南東より)
 [2]F地区調査後全景(南東より)
 [3]F地区、道状遺構検出状況(東より)
 [4]F地区、道状遺構検出状況
- 図版14 [1]下坂2号竈窯体検出状況(東より)
 [2]下坂2号竈窯体検出状況(西より)
- 図版15 [1]下坂2号竈窯体床面遺存状況(東より)
 [2]下坂2号竈窯体床面遺存状況(北より)
 [3]下坂2号竈窯体断面状況(東より)
 [4]下坂2号竈窯体断面状況(南より)
- 図版16 [1]下坂2、3号竈北側盛土土層断面(北より)
 [2]下坂2号竈北側盛土土層断面(東より)
 [3]下坂2、3号竈北側盛土土層断面(G地区西側土層)
 [4]下坂2、3号竈北側盛土土層断面(G地区西側土層)
- 図版17 [1]下坂2号竈灰原検出状況(南東より)
 [2]下坂2号竈灰原遺物検出状況(東より)
 [3]下坂2号竈南側盛土中土器群(東より)
 [4]下坂2号竈北側盛土中土器群(東より)
- 図版18 [1]下坂3号竈窯体内埋土状況(東より)
 [2]下坂3号竈窯体検出状況(東より)
- 図版19 [1]下坂3号竈窯体内遺物出土状況(東より)
 [2]下坂3号竈前庭部遺物出土状況(東より)

- [3]下坂3号窯窯体内埋土断面(東より)
 [4]下坂3号窯窯体内埋土断面(南より)
- 図版20 [1]下坂3号窯窯体断面(東より)
 [2]下坂3号窯横焚口断面(東より)
 [3]下坂3号窯窯体断面(北側、東より)
 [4]下坂3号窯窯体断面(焼成部、南より)
- 図版21 [1]整地面検出状況(北側、北東より)
 [2]整地面検出状況(北側、南より)
 [3]整地面検出状況(南側、北より)
 [4]整地面検出状況(南側、東より)
- 図版22 [1]下坂4号窯検出状況(第2次操業面、東より)
 [2]下坂4号窯灰原検出状況(東より)
- 図版23 [1]下坂4号窯窯体内遺物出土状況(東より)
 [2]下坂4号窯窯体内遺物出土状況(東より)
 [3]下坂4号窯北側作業場検出状況(東より)
 [4]下坂4号窯南側作業場検出状況(東より)
- 図版24 [1]下坂4号窯窯体断面(第2次操業面、東より)
 [2]下坂4号窯窯体断面(第2次操業面、東より)
 [3]下坂4号窯窯体断面(第2次操業面、南より)
 [4]下坂4号窯窯体断面(第2次操業面、南より)
- 図版25 [1]下坂4号窯南側窯壁遺存状況・1
 [2]下坂4号窯南側窯壁遺存状況・2
 [3]下坂4号窯北側窯壁遺存状況・1
 [4]下坂4号窯北側窯壁遺存状況・2
- 図版26 [1]下坂4号窯窯体検出状況(第2次操業面、東より)
 [2]下坂2・3・4号窯窯体重複状況(東より)
- 図版27 [1]下坂1号窯灰原土層断面(1号窯下部、南より)
 [2]G地区西側土層断面(1号窯上部、東より)
 [3]下坂1号窯灰原土層断面(南側、南より)
 [4]作業風景
- 図版28 [1]第2土坑遺構面検出状況(南東より)
 [2]第2土坑検出状況(西より)
 [3]第3土坑検出状況(東より)

- [4]第3土坑検出状況(西より)
- 図版29 [1]H地区、掘立柱建物跡検出状況(東より)
[2]H地区、掘立柱建物跡検出状況(南より)
- 図版30 [1]磁気探査風景・1
[2]磁気探査風景・2
[3]熱残留磁気測定サンプリング状況
[4]調査参加者
- 図版31 下坂窯跡群出土遺物(下坂1号窯、1号窯灰原)
- 図版32 下坂窯跡群出土遺物(下坂1号窯灰原)
- 図版33 下坂窯跡群出土遺物(下坂1号窯灰原、下坂2号窯)
- 図版34 下坂窯跡群出土遺物(下坂2号窯、2号窯灰原)
- 図版35 下坂窯跡群出土遺物(下坂2号窯灰原、整地面覆土、下坂3号窯)
- 図版36 下坂窯跡群出土遺物(下坂3号窯、下坂2・3号窯北側盛土)
- 図版37 下坂窯跡群出土遺物(下坂2・3号窯北側盛土)
- 図版38 下坂窯跡群出土遺物(下坂2・3号窯北・南側盛土)
- 図版39 下坂窯跡群出土遺物(下坂2号窯南側盛土、整地面)
- 図版40 下坂窯跡群出土遺物(下坂4号窯)
- 図版41 下坂窯跡群出土遺物(第2・3土坑)
- 図版42 下坂窯跡群出土遺物(第3・4土坑)
- 図版43 下坂窯跡群出土遺物(掘立柱建物跡、表探、試掘トレンチ他)
- 図版44 下坂窯跡群出土遺物(獣脚・土馬)
- 図版45 下坂窯跡群出土遺物(瓦)
- 図版46 下坂窯跡群出土遺物(瓦)

調査関係者一覧

調査委託者	鳥取県郡家土木事務所
調査主体	郡家町教育委員会
	教育長 北村 一利
	社会教育次長 岡嶋 英二
	社会教育係長 丸山 勉
調査指導	鳥取県埋蔵文化財センター
調査主任	郡家町委嘱調査員 中野 知照

作業協力者

清水好夫、松本英俊、山本義一、山本展弘、田中兼治、木村絹子、清水なみ子、松本美佐保、岸本エミ子、西本美津枝、岡本清子、山田裕二、福永博文、山崎保子、桑崎千早子、福田和美、松岡朋子、神矢紀子、中本和子、伊藤恵美子

表1 下坂窯跡群遺跡番号対照表

本 報 告	鳥取県遺跡地図	同左番号
下坂1号窯	下坂3号窯	2683
下坂2号窯	下坂4号窯	2684
下坂3号窯		
下坂4号窯		
下坂5号窯	下坂2号窯	2682
下坂6号窯	下坂6号窯	2686
下坂7号窯	下坂1号窯	2681
下坂8号窯	下坂5号窯	2685
下坂9号窯	— —	—

はじめに

郡家町の北側を東西に流れる私都古川流域の丘陵地には、古くから須恵器および瓦を焼成した窯跡の存在が周知されている。この窯跡は数基から数十基の群をなしており、流域の窯跡群を総称して私都古窯跡群として認知されている。同窯跡群では、一昨年、山田地内において発掘調査が行われ中世初頭に比定しうる操業時期が明らかになった。

郡家町下坂地内における窯跡は、昭和42年、帝塚山大学教授堅田直によって行われた磁力探査によって大地谷地区に6基の窯の存在が指摘されていた。^{註1}

昭和61年、下坂地内大地谷地に砂防事業砂防ダムの建設が計画され、この建設計画に伴い昭和62年、工事予定地内の発掘調査を行うこととなった。

郡家町教育委員会では、奈良国立文化財研究所に対し磁力探査を依頼し、昭和62年6月工事予定地内全域にわたってプロトン磁力探査を行った。この磁力探査の結果を待って、昭和62年7月より現地作業に着手した。

調査は、郡家町教育委員会が調査主体となって実施した。現地調査は、まず磁力探査によって窯の存在の可能性が強い地点にトレンチを設定し、試掘調査を行った。この結果、窯は下坂川左岸の一区所に集中して確認され、周辺を含めて全面調査を行うこととした。

郡家町教育委員会が、昭和62年度に実施した下坂窯跡群の発掘調査により確認した窯跡および各種遺構は、次の通りである。

註1 郡家町誌 1969

遺構名	所在地	概要
下坂1号窯	郡家町大字下坂字大地谷	半地下式窯
下坂2号窯	◇ 下坂字与三兵衛平	◇
下坂3号窯	◇ ◇ ◇	◇
下坂4号窯	◇ ◇ ◇	◇
第1窯状遺構	◇ 下坂字大地谷	◇
第2窯状遺構	郡家町大字下坂字与三兵衛平	◇
F地区灰原	◇ ◇ 大地谷	調査区外に窯跡
第1土坑	◇ ◇ ◇	4号窯作業場
第2土坑	◇ ◇ 与三兵衛平	◇
第3土坑	◇ ◇ ◇	◇
第4土坑	◇ ◇ ◇	◇
作業場	◇ ◇ ◇	3号窯作業場
掘立柱建物	◇ ◇ ◇	3間×1間

第1章 下坂窯跡群の位置と環境

第1節 立地と歴史的環境

地理的環境

下坂窯跡群は、郡家町役場の北東約2.5kmに位置し、鳥取県八頭郡郡家町大字下坂字大地谷・与三兵衛平に所在する。

郡家町は、鳥取県東部の最大河川の千代川に流入する支流の一つである私都川流域に立地する。北は鳥取市と国府町に接し、西は河原町、南は船岡町と八東町に接する。東は、私都川が源を発する扇ノ山を擁し、兵庫県境に接する。私都川は町内を「N」状に流れ下流域に肥沃な谷平野を形成し一旦八東川に流れ、その後千代川に合流する。

下坂窯跡群が位置するのは私都川左岸の下流域である。私都川は、郡家町中央部を北西から南西方向に流れを屈曲させる部分の南側に砂礫台地を形成している。この砂礫台地に面した丘陵斜面に山路、花原、山田、下坂、奥谷窯跡群が立地しており、総称して私都古窯跡群と呼んでいる。また、私都川の中流域から上流域にかけて、篠波、福地の各地区でも窯跡が確かめられており私都古窯跡群に含まれている。

歴史的環境

郡家町は、八頭郡内でも遺跡の密集度の高い地域である。郡家町南部の西御門、私都川の downstream 末端部の方代寺においては、縄文時代後期（3000～4000年前）の石斧や深鉢形土器の出土をみている。

弥生時代においては遺跡は少なく、万代寺遺跡で木棺墓群の調査がなされ、下坂地区の字東梶平より出土した銅鐸の存在が知られるのみである。しかし、これらの遺跡は段丘上あるいは丘陵斜面に立地しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地を生産基盤とした農耕集落の広がりが想像される。

古墳時代になると遺跡の数は増加し、私都川下流域の丘陵斜面には隙間なく古墳が造られるようになる。郡家町では前期に該当する古墳は確認されていない。中期後半以降、飛躍的に古墳の数が増加する。久能寺の北方、八頭高校の東側の丘陵に埴輪を周繞させた径約20m、高さ3.6mの御建山古墳が現われる。同墳は調査がなされているが詳細は明らかではない。出土している埴輪は、家形・人物・動物などの形象埴輪と円筒埴輪がみられる。円筒埴輪は、底部調整を施しておらず、5C末から6Cにかけての私都川流域における盟主の古墳といえる。後期になると、郡家・宮谷地内に寺山古墳（全長37.5m）、宮谷1号墳（全長32m）の二つの前方後円墳が造られている。いずれも、御建山古墳に続く時期の盟主墳と思われる。また、この時期になると、私都川下流域を見下ろす丘陵斜面には、径10m

前後の横穴式石室を主体とした群集墳と石棺を主体とした群集墳が造られている。もっとも密集した地域は、郡家町北西部の霊石山山麓と南部の久能寺地区および北東部の下坂地区を中心とした地域である。これらの地域は、寺院跡や官衙跡ならびに、これらに関連の深い窯跡群などがみられる地域である。

霊石山山麓では、白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井庵寺の存在が知られている。この土師百井庵寺で使用されていた瓦片や鴟尾片が、郡家町奥谷の奥谷瓦窯跡の出土品の中にみられる。

近年調査された万代寺遺跡では、八上郡郡衙跡と考えられる掘立柱建物群を検出してゐる。建物群は東西に分かれ、西側の建物群は性格が判然としない。東側は、約99×97.5m区画の溝と柵列に囲まれた中に3棟の建物が確認され、杯・壺や円面硯を出土している。これらの須恵器は、私都古窯跡群の一つである花原窯跡群から供給されたものと思われる。

これらの寺院・郡衙のみならず、郡家町の北方約10kmに位置する因幡国府にも供給先をもった窯跡群が、下坂窯跡群をはじめとする私都古窯跡群であるといえる。

第2節 下坂窯跡群の概要

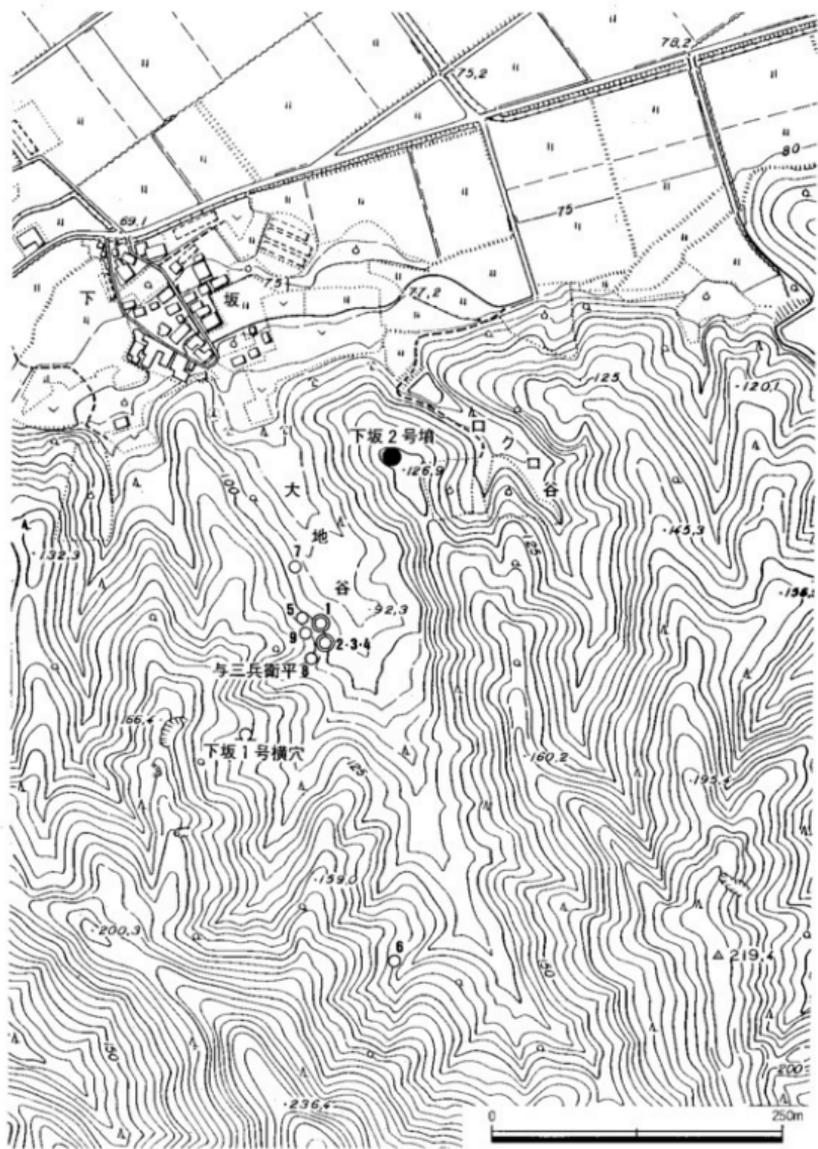
下坂窯跡群は、郡家町大字下坂地区の南方に所在し、ほぼ南北にのびる丘陵の東斜面に分布する窯跡群である。

同窯跡群の存在は、郡家町出身の画家中島菜刀^{註1}らによって知られていたが、昭和42年帝塚山大学によってプロトン磁力探査が行なわれ6基の窯跡の存在が指摘された。^{註2}昭和45年この結果が亀井照人によって紹介された。^{註3}その後、「郡家町誌」^{註4}や「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」^{註5}などでも同窯跡群の記載がなされてきたが、6基の窯跡の位置や規模については不明確であった。

今回、下坂窯跡群の発掘調査が行われるにあたり、奈良国立文化財研究所の協力を得てプロトン磁力探査を行い、その結果と更に発掘調査によって窯跡の位置や規模などについて良好な結果が得られた。

同窯跡群では、各窯の熱残留磁気測定も行い、出土した良好な一括資料の検討と磁気年代との比較ができ、因幡地方における同時期の須恵器生産を考えるうえで貴重な資料が得られた。

窯跡群は、下坂地区から南にのびる比較的広い谷平野（大地谷）に面した丘陵斜面に位置する。「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」や「鳥取県遺跡地図」^{註6}による下坂1～6号のうち6号窯を除く他の5基の窯跡については、位置が不明確であったため、今回の調査では上記報告の付番号に依らず調査順に番号を付した。検出した窯跡・遺構については、調査で確認した灰原や窯状遺構の位置を考慮し、表1に県遺跡番号との対比を表わす。



第2図 下坂窯跡群立地図

第2章 調査の経過

第1節 調査区の設定

調査区の設定は、磁力探査に先立って行われた方眼棒を利用した。方眼棒は、工事予定地内の丘陵斜面に設定したものである。下坂川左岸を西地区、右岸を東地区とし、丘陵斜面の凹凸を考慮して10m～30mの地点で斜面に直交する基準ラインを設定した。このラインは、西地区でA～Iラインを設定した。東地区ではA～Kラインを設けた。AラインとBラインの間をA地区、B～C間をB地区……とした。ラインの各番号は直線上に並ぶ。更に、磁力探査を行った際、20m～50mのブロックに分けた。西地区においては、谷の上流から行った為H～G地区を便宜上OR-1、F～E地区をOR-2、D地区をOR-3、C地区をOR-4、B地区をOR-5とした。東地区は、磁力探査を下流から行ったことでOR-6～OR-10のブロックを設定した。試掘トレンチは、西地区においては各ブロックの磁気異常の表われた箇所に設定し、調査順に第1～13トレンチを設定した。東地区でも同様に第1～4トレンチを設定した。

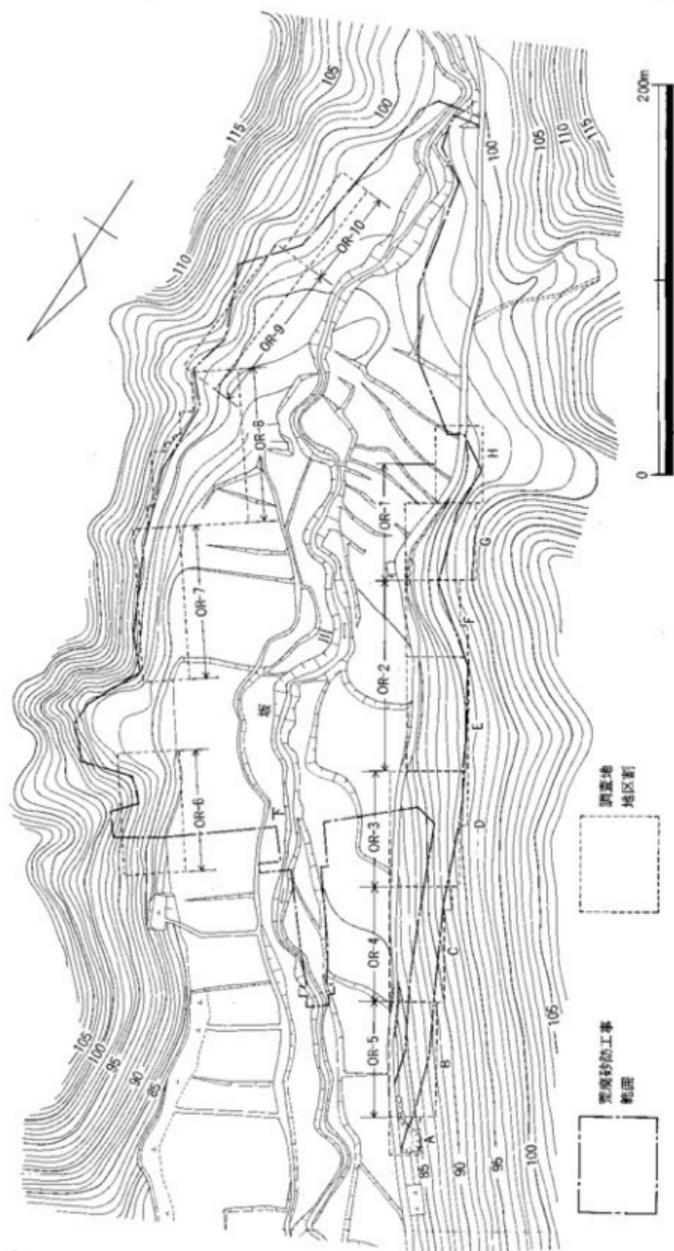
全面発掘を行った地区はOR-1からOR-2の一部であり、G・H地区とF地区の南側部分である。F～H地区では4m×4m方眼のグリッドを設け、各グリッドの北壁と西壁の土層観察を行った。

第2節 調査の経過

下坂窯跡群の発掘調査は、磁力探査によって得られた結果をもとに、磁気異常が認められた部分を中心にトレンチを設定した。この結果、下坂東地区においては何ら窯に関連する遺構は検出できず、当地区での磁気異常は森林作業に伴うワイヤーや、鉋によるものであった。西地区では、OR-1、OR-2地区内に設定したトレンチ内において窯体、あるいは窯に関連する遺構が確認できた。このためOR-1とOR-2地区の中で、特に遺構が集中していると思われるF地区の南側から、G地区、H地区の北側にかけて全面発掘を実施することとした。

調査は、調査区全体に4m×4mのグリッドを設け、順次掘り下げを行った。この結果、最終確認の遺構として窯跡4、窯状遺構1、道状遺構1、作業場2、整地面1、土坑3、掘立柱建物1を検出した。また、D地区でも窯状遺構1が確認されたが、当地区は砂防ダム（工事途中）の影響を受け良好な磁気探査結果の得られなかった地点である。

調査区は、旧林道と工事に伴って付替えられる林道予定線との間に挟まれた狭い範囲で



第3図 下坊家跡群調査区配置図

あったため、検出された4基の窯跡はいずれも焚口から燃焼部、あるいは焼成部の一部までで全容を解明することはできなかった。

4基の窯跡はいずれも丘陵斜面に構築された半地下式窯であり、現地表下約30cmで遺構面を検出した。この内、1号窯は上方に構築されたと思われる窯の操業に伴い、灰の排出路に当り、窯体のほとんどが破壊を受けている。このため窯壁の一部が遺存しているのみであった。1号窯の南約4mの地点に位置する2～4号窯は、同一地点で3基の窯が重複して構築されていた。最下層の4号窯は、地山を穿って直接窯体としているが、上面の3、2号窯はそれぞれ構築時に若干の盛土を行って窯体を築いている。

1号窯の下方では、操業時に伴うと思われる遺構を検出している。階段状を呈し、不規則であるが1号窯の下方に集中し南北にのびるが、南側は途切れている。北側は下がり気味にのび、道状を呈している。

2号窯は、調査を実施した範囲では焚口から燃焼部にかけての一部分の確認であった。

3号窯は、2号窯の直下に構築され、焼成部・煙道部は2号窯構築の際に破壊を受けている。3号窯の燃焼部上部の南側に焚口が追加されていることが確認された。またこの焚口部に通じる通路状の遺構とそれに続く版築を行った堅固な整地面が確認できている。この整地面はH地区までのびており、その南方には掘立柱建物跡も位置する。

4号窯は3号窯の直下に構築されていた。4号窯は、大きく分けて二期の操業がなされていたようである。この窯の操業時に伴うと考えられる土坑、あるいは作業場的な遺構が南北に接して検出されている。北側のそれは、作業場もしくは排水を意識したものであろう。南側には3基の土坑が確認された。これらの土坑は、窯体内から排出された窯壁・灰などの他に、多くの半製品が廃棄されていた。

註1 ……『郡家町誌』1969による。

註2 …… 同 上

註3 ……『鳥取県の古代窯業遺跡』『郷土と科学』第16巻第1号 1970

註4 ……郡家町発行 1969

註5 ……鳥取県教育委員会発行 1984

註6 ……鳥取県遺跡地図『改訂鳥取県遺跡地図』第2分冊鳥取県教育委員会 1974

第3章 下坂窯跡の磁気探査

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 発掘技術研究室長 西村 康

地下に埋没している遺構は、わずかながら地磁気に影響を及ぼして、極部的な磁気異常の個所として存在している。窯跡のように熱残留磁気を帯た遺構は、特に大きな異常を及ぼしている。土壌中の鉄化合物など強磁性物質は、ある一定の温度（キュリー温度）まで熱せられると、磁性は不安定な状態になるが、冷却する過程で再び磁気を帯る。この再帯磁する際に、磁性の方向は外部磁場、すなわち地球磁場の方向に従う性質がある。磁性の方向がそろった結果、その部分は周囲と比較すると、相対的に強い磁気を帯びた部分となる。これが熱残留磁気による磁気異常である。磁気探査は、これらのような磁気異常の個所を特定することにより、遺構を発見しようとする方法である。

磁気異常の個所を限定するには、対象地域全体の地磁気を測定する。測定に使用するのは通常、携帯用の2台の磁力計である。2台使用するのには、磁気測定の障害となる、ノイズに影響されないためである。すなわち、探査地域の周辺にノイズ源となるもの、たとえば、鉄道・自動車・人家などがあると、地磁気は不規則に変動している。不規則な磁気変動があると、測定の結果もし地磁気に異常が認められても、それが遺構に起因するものかどうか、判定できない。そこで、2台の磁力計のうち1台を定点として固定しておき、もう1台が測定区内を移動する、という方法をとるのである。不規則な磁気変動は、この2台の磁力計ともに影響するので、もし遺構がない場合には、両者の差は一定のはずである。

地磁気の測定には、あらかじめ対象地域内にグリッドを設定しておき、移動する磁力計はこれに従って観測する。移動する間隔は、探査する対象によって異なる。須恵器の窯跡で長さが6-8mあり、幅も2m前後あるとみられるような場合には、測定間隔も2mで十分発見が可能であるが、長さが2mもなく幅も2mに満たないようなときは、間隔をせばめる必要がある。しかし、測定の間隔を密にすればする程、測定に要する時間と労力が増加する。探査対象の規模を推定する情報が、あらかじめ判明しているのが望ましいのである。

本窯跡群における測定は、10の測定区に分割して実施した。測定間隔は丘陵斜面の等高線と並行な方向、すなわち窯体を横切ると想定される方向は1m、これと直交する方向は2mとした。測定区毎の測定した数値レベルは、統一していない。使用した磁力計は、カナダGEM社製GSM-8型2台で、測定精度は±1ガンマである。観測して得たデータは、定点・移動点とも自動的に計算機によって収録した。測定結果は、定点と移動点の観測値の差を、コンター図で表わしたが、いずれもデータの平均計算など、測定値の処理はおこなっていない。結果図の輪郭線上の目盛間隔は1mである。また、図中のコンターは、実線が相対的に磁気の強い部分、点線は弱いものを表わし、原則として10ガンマ単位の間隔と

している。しかし、磁気の強弱の差が少ない場合には、適宜5ガンマの単位を追加している。

以下に測定区毎に、結果を報告する。測定区は谷の東と西の斜面に二分して、それらをさらに10分割している。東と西のなかでは、細分した測定区それぞれは、原則として接続する。また、一部では重複している。

下坂1 (OR-1) 地区 南北にのびる谷の西斜面に設定した測定区で、西では最も南奥にある。北は下坂2地区に接続する。範囲は南北30m、東西18mの広さで、南は小さい沢の北斜面にも及んでいる。しかし、林道より東すなわち谷底に近い部分は、測定していない。この測定区の東北方約10mには、貯水用のタンクがある。タンクは内部に鉄の構造材をもつと思われるところから、これが測定に影響するのではないかと予想された。測定の結果は、第5図に示すもので、測定区中央よりやや北に、周囲より約80ガンマ程強い磁気異常がある(第5図A)。これは窯体の可能性が大きいと考えた。北には弱い磁気の部分があり、遺構が存在する場合の典型的な、双極子磁場を形成している。しかし、磁気の弱い部分は、ここにコンクリート杭があるため、その分布の形態は変形を受けている。Aの箇所は西北方にある、小範囲で大きい磁気異常が、コンクリート杭にあたっている。窯体はほぼ東西の方向で、長さ約5-6m、最大幅2mほどと推定した。この位置の下方にある道路と斜面との境界をつくる崖面には、灰層が露出しており、ここが窯体である可能性は大きいと考えられたのである。

この測定区には、窯体と推定した位置以外にも、コンクリート杭または何らかの鉄製品による磁気異常がある。測定区西南隅の異常がそれである。また、東北隅のマイナスの異常の大きい部分も、遺構とは関係のない貯水槽の影響である。発掘の結果、ここでは窯体と推定した位置以外にも、窯体が存在することが明らかになっているが、その地点はちょうど貯水槽の西にあたっている。これが影響したために、探査では遺構を推定できなかったものと思われるが、窯体の残存状況の悪いことも、原因となっている。

下坂2 (OR-2) 地区 下坂1地区の北に接続する地区で、南北49m、東西12mの斜面等高線と並行に設定した細長い範囲である。この測定区には、窯体に起因するとみられる磁気異常はない(第5図)。しかし、測定区の中央よりやや北東に、三部分に分散しているが、ほぼ東西に一直線に連なる磁気の強い箇所があるので、ここは何らかの方法によって、遺構の有無を確認しておいた方がよいと考えた(第5図a)。この連続する磁気の強い部分は、等高線と直角の方向にあるところから、窯体の中央部分が破損して残存状況が悪く、かつ深い位置にあるときには、このような探査結果になる可能性があると考えたのである。

もし今述べたaの地点が、何らかの手段によって窯体と確認されるような場合には、ここにはaとほぼ同様の磁気異常の部分のあることに、注目しておく必要がある。bとした

地点がそれで(第5図)、等高線に斜行するかたちで北西から南東の方向に、小規模な磁気の強い個所が散布しているのである。a、bともに北側に磁気の弱い部分を伴わないことから、窠体である可能性は少ない。しかし、遺構ではないということを確認しておく必要のある地点とした。

なお、発掘調査の結果この測定区の南半部には、灰層の存在することが判明しているが、これに関わる窠体は測定区外に存在するものと推定できる。また測定区東辺、すなわち林道に沿う部分の小規模な磁気異常は、何らかの鉄製品に起因するものと考えられる。南東隅の磁気異常も、貯水槽によるものである。

下坂3(OR-3)地区 下坂2地区の北に接続する南北30m、東西16mの範囲で、下坂2地区と同様に、等高線と並行するように設定した。この測定区では、東辺の林道に沿った斜面裾に、小規模な磁気異常が集中する(第5図)。いずれも近年のたき火と、そこに含まれている鉄製品が原因になったもので、遺構に起因するものでは無いと思われた。しかし、これらの異常が障害となって、遺構による磁気異常が探査できていない可能性もあり、丘陵裾部と山道との間の崖面を、観察することが重要と考えた。これ以外には、遺構に関連すると思われる磁気異常は、認められなかった。

下坂4(OR-4)地区 下坂3地区の北に接続する。南北30m、東西12mの範囲である。ここでは、測定区のほぼ中央に小規模ではあるが、完結した磁気異常がある(第5図a)。異常の範囲が狭く、かつ異常の程度も小さい。他の測定区の例と比較すると、コンクリート杭の磁気反応に類似している点から、窠体の存在は考えにくい。しかし、何らかの手段によって、遺構の有無を確認する必要がある地点と考えた。なお、この測定区には東北部分と南東隅に、建築資材置き場と谷中央部にある堰堤の影響がある。

下坂5(OR-5)地区 下坂4地区の北に接続していて、西の測定区では最も北にある、南北30m、東西8mの細長い測定区である(第5図)。ここには、遺構に起因すると思われる磁気異常はない。しかしながら、測定区中央よりやや北に、わずかながら小範囲の磁気異常があり(第5図a)、それが測定範囲外へ広がっていて、全体が不明なところから、やはり何らかの手段によって、遺構の有無を確認しておいたほうがよい地点と考えた。北端にある異常は、測定区外にある耕運機による影響である。また、東辺にみられる小規模な異常も、鉄製品によるものと考えられる。

下坂6(OR-6)地区 谷の東では最も北の測定区である。測定範囲は丘陵の西斜面と、東に入り込んだ小さな沢の北斜面を含んだ、南北32m、東西16mの広さで、他の測定区とは接続していない。ここには測定区中央のやや北寄りに、大きな磁気異常がある。これは多分、鉄製品かコンクリート杭によるものと判断された。しかし、異常の範囲が測定区外へ及んでいて、全体の形態が不明なことと、この程度の異常ならば、窠体である可能性も

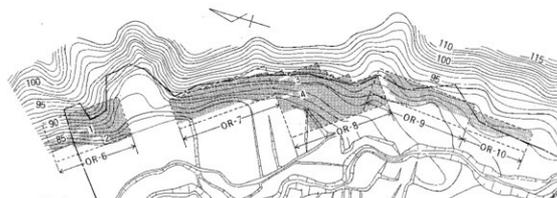
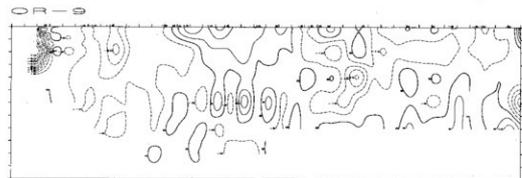
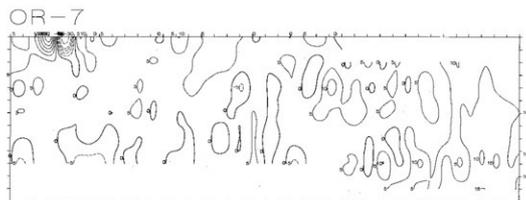
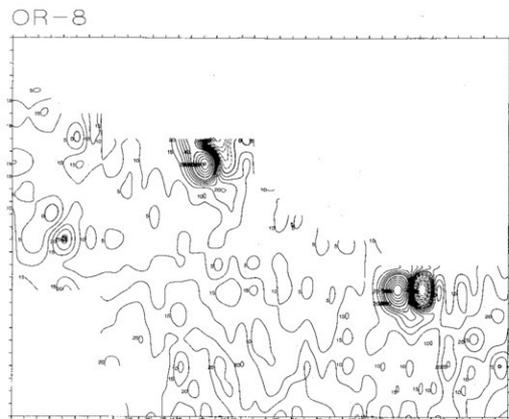
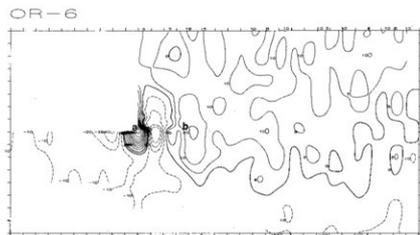
捨てきれないところから、確認をする必要がある地点と考えた（第4図a）。この地点の南にある弱い磁気異常は（第4図b）、北にあるaの影響のため、異常の形態は変形をうけている。異常の程度は小さいところから、窯体の存在する可能性はわずかと考えたが、本来の磁気異常が観測できていないということを考慮すると、やはり何らかの確認の手段をとっておくほうがよいと思われた。a、b両者ともに急斜面の等高線と直交する方向にある点も、これらを窯体と推定するためには、否定的な要素となった。

下坂7（OR-7）地区 下坂6地区とは小さな沢をはきんで、約15m南に離れた位置から南へ40m、東西幅は12mの範囲がこの測定区である。ここには、測定区東北隅のコンクリート杭による磁気異常の他には、注目される異常は無い。遺構の存在を予測させるような磁気異常は、無いのである（第4図）。

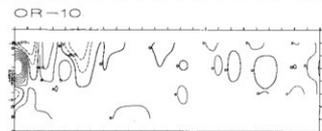
下坂8（OR-8）地区 下坂7地区の南に接続する東西30m、南北40mの範囲である。この地区には、測定区北端に弱いながらも、小規模かつ完結した磁気異常がある（第4図a）。位置が丘陵裾部で、平坦面へ移行する変換点にある点から、窯体の存在を推定するのはためらわれた。しかし、何らかの手段で遺構の有無を、確認する必要がある地点と考えた。この地点以外に、やや強い磁気異常の個所が散布しているが、いずれも谷部の平坦面にあたっており、遺構に起因するものでは無いと判断された。測定区の東辺と南端に近い部分にある、2個所の完結した磁気異常は、いずれもコンクリート杭によるものである。

下坂9（OR-9）地区 下坂8地区の南に接続する地区である。南北40m、東西12mの測定区の南半部には、東から西の方向に開けた小さな沢の入り口部分を含んでいる。ここでは、測定区北東隅と南辺のコンクリート杭による磁気異常の他には、遺構の存在を推定させるような異常はないと判断した（第4図）。

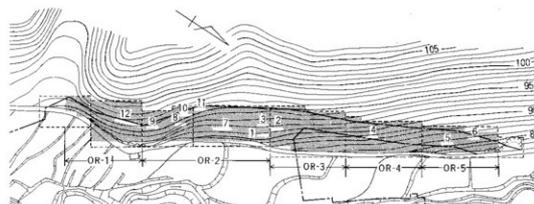
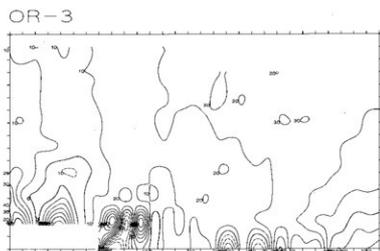
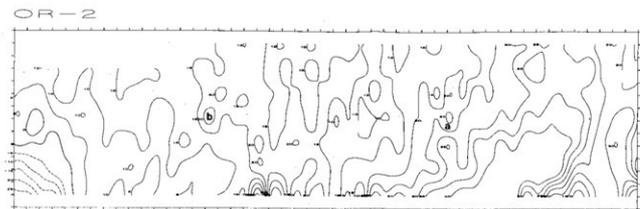
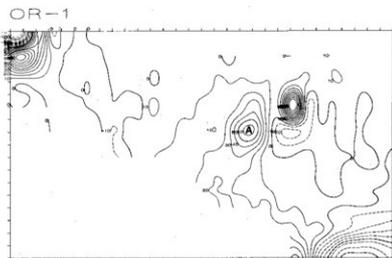
下坂10（OR-10）地区 下坂9地区の南に接続する東では最も南の測定区で、南北25m、東西6mの細長い範囲である。この測定区北端にみられる磁気異常は、鉄製品に起因するもので、遺構とは関係の無いものと考えた（第4図）。これらは小さな沢の入り口の、中央部にあつてるところからみても、遺構である可能性は少ないと判断されたのである。これ以外には顕著な磁気異状はない。したがって、遺構の存在を予測させるような個所も指摘出来ないのである。



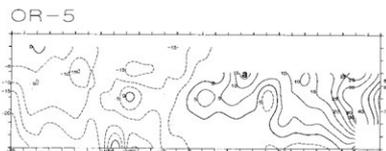
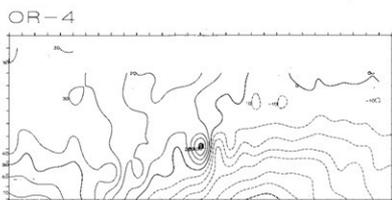
下坂東地区探査結果表示輪圖(白抜き部分は試掘トレンチ)



第4図 下坂東地区磁気探査測定図



下坂西地区探査結果表示範囲(白抜き部分が試験トレンチ)



第5図 下坂西地区磁気探査測定図

第4章 調査の記録

第1節 窯跡の立地と地形

下坂窯跡群は、郡家町下坂字大地谷および与三兵衛平に所在し、標高約150mの丘陵にはさまれた比較的広い谷に面した斜面に立地している。

下坂地区の南方約1.3kmに位置する山頂から北にのびる丘陵があり、その丘陵から下坂地区の南辺に向う尾根が派生する。この尾根から、窯跡群の立地する谷に向けて小尾根があり、尾根から谷平野へと続く傾斜変換点を少し上った地点に窯跡が構築されていた。

窯はいずれも、標高96m～100mに築かれ、丘陵傾斜角20°～30°の斜面に立地し、未調査の焼成部、煙道部にあたる部分は25°～37°の急傾斜を呈している。灰原は、各窯に伴ったものの他F地区でも広範囲に広がる灰原を確認しており、窯跡が集中して検出された小尾根の北側の谷地形で検出した。この灰原に伴う窯体も、今回確認した窯跡が築かれた小尾根の北側斜面に立地すると考えられる。H地区の南側で確認した掘立柱建物も谷地形の平坦部に作られており、その覆土は黒褐色を呈し、上記小尾根の南斜面に築かれたであろう窯跡に伴う灰原と考えられる。D地区で（工事中）発見された窯状遺構も、やや尾根状を呈する丘陵斜面で確認されたが現地表面の観察ではその存在を知ることはできなかった。

1～4号窯は、いずれも同じ尾根に立地しているが、窯体を構築した地盤の様相は少々異っている。小尾根あるいは基部の丘陵を形成する岩盤は、花崗岩風化土（通称真砂土）であり、4号窯はこの岩盤を掘り下げて直接窯体としている。1号窯も一部岩盤に直接窯体を構築していたようであるが、上方の窯の作業時に破壊を受けており不明である。1号窯の燃焼部から下方は、粘質土をベースにし、1号窯構築前に堆積していた灰原もしくは、旧地表土と思われる黒褐色土に窯体を構築している。2・3号窯は、4号窯廃絶後に順次同地点に盛土を行いながら窯体を構築していた。

これらの1～4号窯は、尾根の稜線に沿って立地しているために遺存状態は良好で、尾根の下方に二条の植状に窪んだ地形がみられ、周囲には多量の須恵器片や窯壁材の散布が広範囲にみられた。

第2節 試掘調査

下坂窯跡群では、プロトン磁力探査によって得られた結果をもとに、下坂東地区において4ヶ所のトレンチを設定し、また下坂西地区においては13ヶ所のトレンチを設けた。

工事施行の関係で、調査は下坂東地区から着手した。下坂西地区では、砂防ダムより下

流部分について優先的に行った。

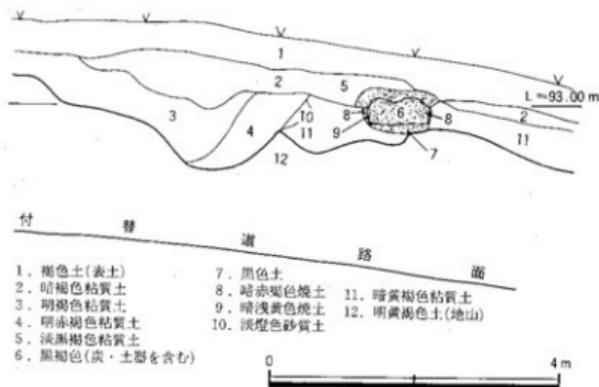
下坂東地区では、OR-6とOR-7において2ヶ所の磁気異状部分があった。このうちOR-6地区では、第1、第2トレンチを設定し、遺物の出土をみた第1トレンチの南側に隣接して拡張トレンチを設け掘り下げを行った。この結果、第1トレンチの北東隅で杯蓋の出土が確認されたが、窯跡に関連する遺構は検出しえなかった。この地区での磁気異状は、森林抜開に伴う鉄製ワイヤーが廃棄されていたことに起因するものと考えられる。第1トレンチの南側においては、細かな炭も確認し拡張区を設けたが、炭の広がりは見られなかった。杯蓋の出土は、窯に関連したものではなく、斜面上方の丘陵頂部に所在する下坂2号墳からの転落遺物とも考えられる。

OR-7地区でも、磁気異状のみられた部分において、斜面の上方と下方にトレンチを2ヶ所設定して掘り下げた。ここでも現地地表下30cm程で地山面に達し、遺物・遺構など検出しえなかった。斜面下方の第4トレンチの表土中において鉞が出土しており、磁気探査に表われた磁気異状はこれに起因するものであろう。

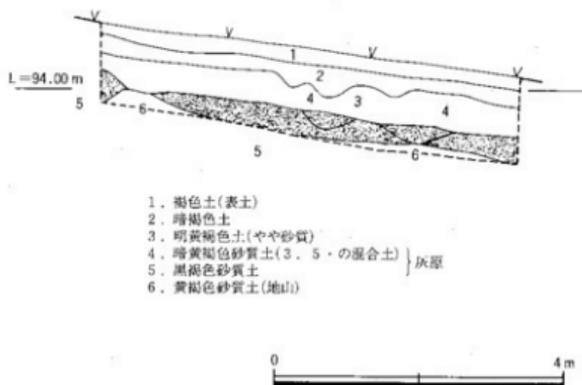
下坂西地区では、OR-2の北端部からOR-5にかけて6ヶ所のトレンチを設定した。第1～第4、第6トレンチ内において遺物の出土をみた。第6トレンチでは赤褐色焼土と炭化物がみられたが、いずれも窯に関連するものとは考えられない。しかし、第6トレンチは林道付替路の基点部分で丘陵斜面の末端部分にあたり、斜面上方に窯が存在するであろうことは十分に考えられる。

OR-2地区内では、第7～第11トレンチを設定した。ここでも、各トレンチ内において遺物の出土はみられたが、窯の存在は確認できなかった。第8トレンチ内では、地山面の上で黒褐色土の堆積がみられたことで、調査区外に存在するであろう窯の灰原であると考えられる。第9トレンチ内においては、多量の須恵器が出土しているが窯に関連する遺構は検出できなかった。しかし、遺構の検出はできなかったが、遺物の出土状況は窯内遺物の廃棄を思わせるほど多量であり、何らかの遺構が近くに存在するであろうことは十分に考えられた。

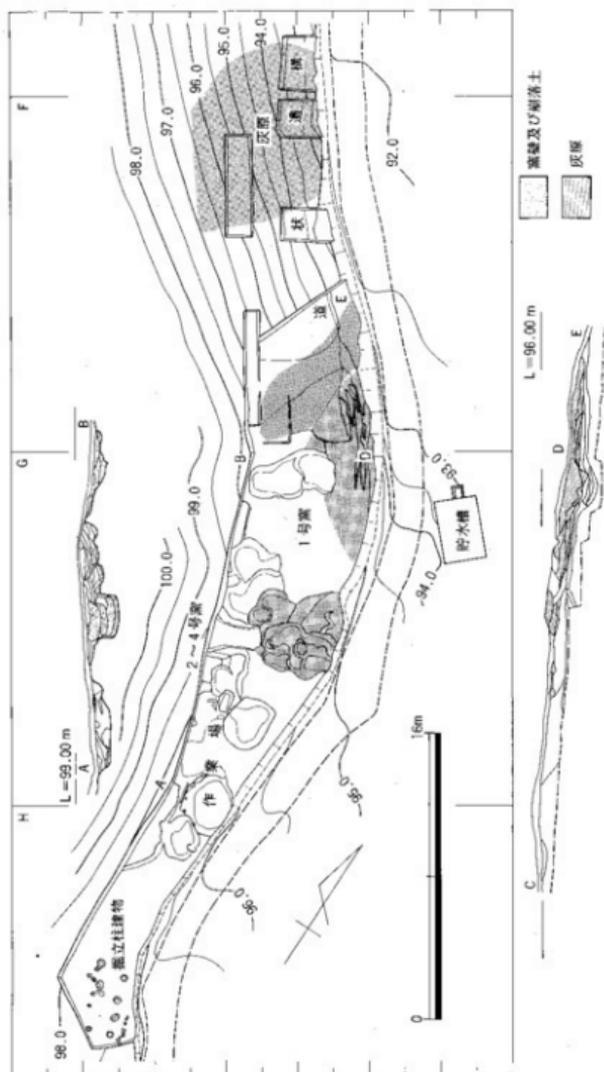
OR-1地区においては、旧林道崖面に灰原断面が露呈しているため、調査区西端に沿って第12トレンチを設定した。トレンチは、林道崖面の灰原の範囲をカバーするものとした。第12トレンチでは、北側と南側でそれぞれ窯体の一部を確認した。また、この窯体に挟まれた地点では、多量の須恵器や未焼成の須恵器を含む堆積土が認められた。



第6図 D地区窓状遺構断面図



第7図 F地区第8トレンチ西壁断面図



第8图 下坂遗址双湖村配置图

第3節 下坂1号窯

下坂1号窯は、G地区北端に位置し丘陵東側斜面（傾斜角21°）の自然地形を利用して構築された半地下式窖窯である。1号窯の南方約7mの地点に下坂2～4号窯が立地する。

1号窯は、暗褐色粘質を呈する地山面を掘り込んで窯体を構築し、窯体の下半部分では一部暗黄褐色土の盛土の上に築かれている。この盛土は、1号窯構築前に堆積していた黒褐色を呈した灰原に載った状態で整地されていた。1号窯の前庭部および、床面の一部が遺存していた焚口部などはこの盛土部分に構築されていた。窯体床面はそのほとんどの部分で流失がみられ、窯体上方部分にわずかに2ヶ所痕跡を認められたのみである。焚口部と思われる部位で、床面をなしたと考えられる焼土面を認めたが、原位置を止めていたかどうか不明である。窯体北側と南側の一部に側壁が遺存していた。南側部分の側壁は、床面からの立ち上り部分のみで、窯壁の一部に凹状の窪みがつけられているが性格については不明である。

窯体規模については不明な点が多いが、窯体の存在部分で推定すると現存長約2.95m、床面最大幅約1.5mを測り、床面下端部の標高96.45mに対し床面最上端の標高は97.03mで比高は約0.6mである。床面傾斜角は10°を測り、窯体の主軸方位はN40°Eである。これらの規模は上述の如く、床面が窯廃絶後に破壊を受けたものであり現存する部分は窯体の中でも燃焼部にあたる部分であると考えられる。

焚口部、前庭部

焚口部および前庭部にあたる部分は、1号窯の中でも比較的遺存状態の良い部分であった。

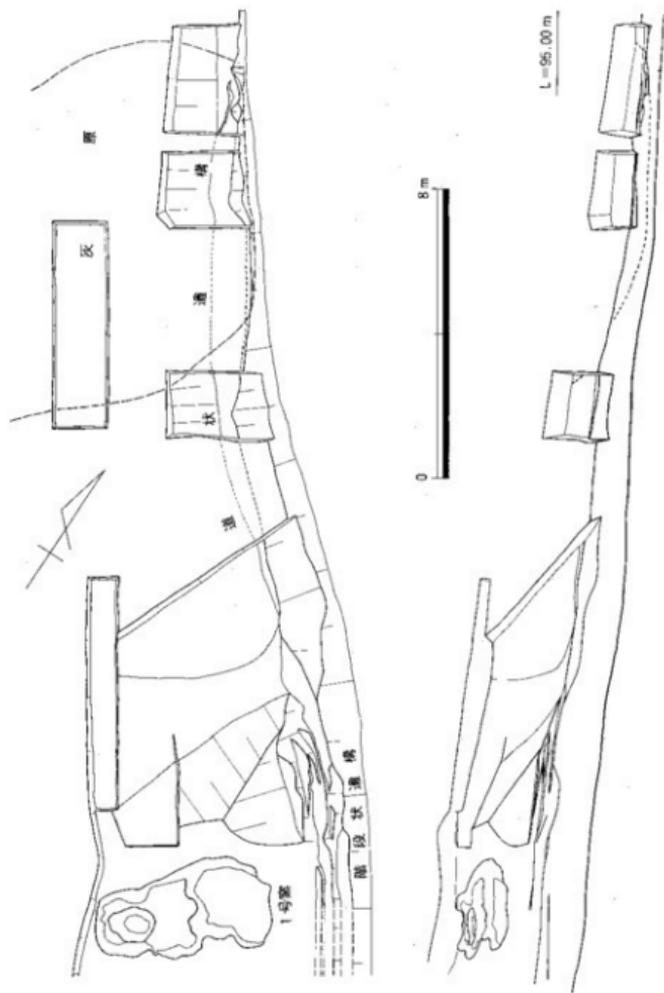
前庭部は、窯体床面下端から落ち込み凹状を呈し、炭を多く含む黒色土が堆積していた。床面はやや下方に傾斜し、下端部分は平坦面をなす。傾斜面の下部に杯・杯蓋の出土をしている。

焚口部は、床面の一部が遺存していたが、側壁は欠失している。床面は水平を保ち、浅黄色を呈した焼土層がみられ、比較的低温で焼かれていたことが知られる。また直下には赤褐色焼土層も残存していた。

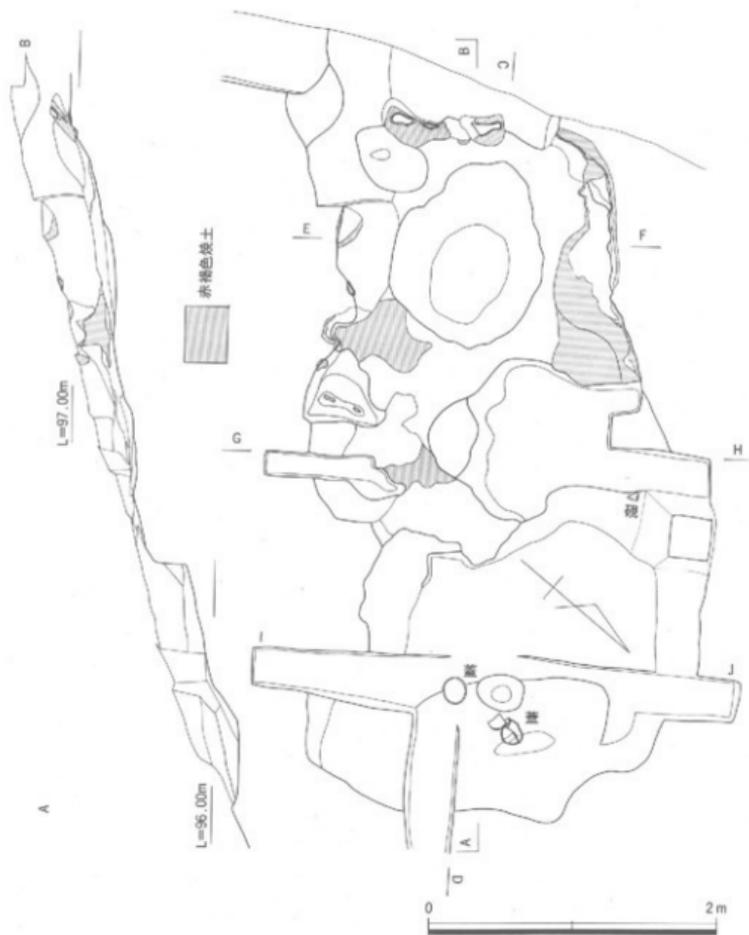
燃 焼 部

1号窯では、窯体床面の遺存状態が悪いため、明確に燃焼部を指摘しえないが、焚口部にみられた床面より上方部分を当該部分と考えたい。

燃焼部の床面は欠失しているが、側壁の一部が遺存している。側壁は浅黄色を呈した焼土層がみられ、直下には赤褐色焼土を伴う。北側の一部には顕著な残存部分がみられるが、南側ではわずかにその痕跡を止めるのみであった。この浅黄色焼土の広がりから推定して



第9图 下坂1号窟结构图



第10図 下坂1号家室内図 (C~Jは第11図参照)

床面最大幅約1.7mを測り、床面傾斜角は12'以上と思われる。

灰 原

灰原は焚口部より120°の角度で広範囲に広がり南北約11m、東西約4mの扇状を呈する。南端部分は、2号窯灰原に切られている。灰原は、前庭部より傾斜する傾斜面に、厚さ約15～30cmの堆積をみるが、裾部は林道敷設により不明である。灰原は大きく3層に分層できる。上層は、1号窯より排出された窯壁・窯滓・炭を含む灰褐色土層、中層は、整地された淡褐色砂質土層、下層は黄褐色土を混入する灰褐色粘質土層に大別できる。また灰原の中心部分は、1号窯下方にあたり溝状に深くなっていることが知られた。

1号窯北側部分にみられる窪地においても、多量の窯壁と遺物の堆積がみられた。その中心部分は、窯体の北側部分に集中しており、未調査区に存在するであろう窯の灰原と考えられる。

下坂1号窯関連遺構

下坂1号窯には、関連する遺構として階段状遺構および道状遺構がみられた。ともに1号窯の下方で繋っており、一つの遺構として考えられる。

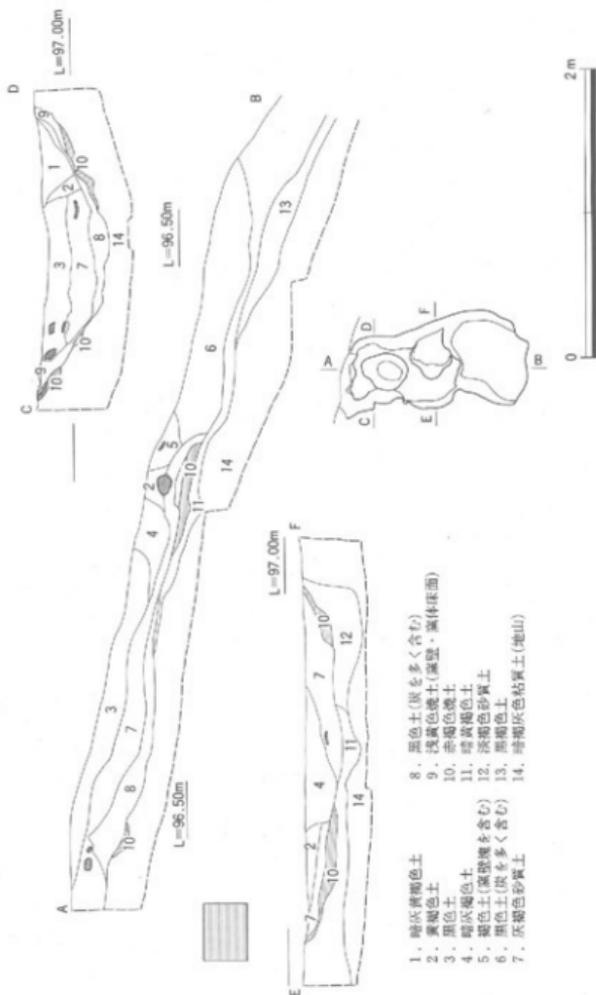
1号窯の下方は、林道敷設によって削りとられ、その後の土取りなどによって欠失しており詳細については不明な点が多い。しかし、残存部分でみられる階段状を呈した平坦面は、3～4段を認めることができた。平坦面の幅は15～35cmを測り、北方にやや傾斜している。この階段状遺構は、1号窯構築前に形成されていた黒褐色を呈する灰原上に作られていた。炭を多く含んだ黒褐色土に、砂状の細かな窯壁ブロックや黄褐色土を混じって固く叩き締めている。1号窯北側に位置し、排水などを意図した溝状を呈する窪みの下方部分で階段状遺構は道状遺構へと変換している。

この道状遺構は、北側のE地区にのび末端は林道敷設によって切断されている。この遺構は、幅60～70cmを測り固く叩き締った平坦面をなし淡橙色を呈している。道状遺構は、F地区にみられた灰原の下端部分では、灰原を形成する黒褐色土を叩き締めて道としている。

第4節 下坂2号窯

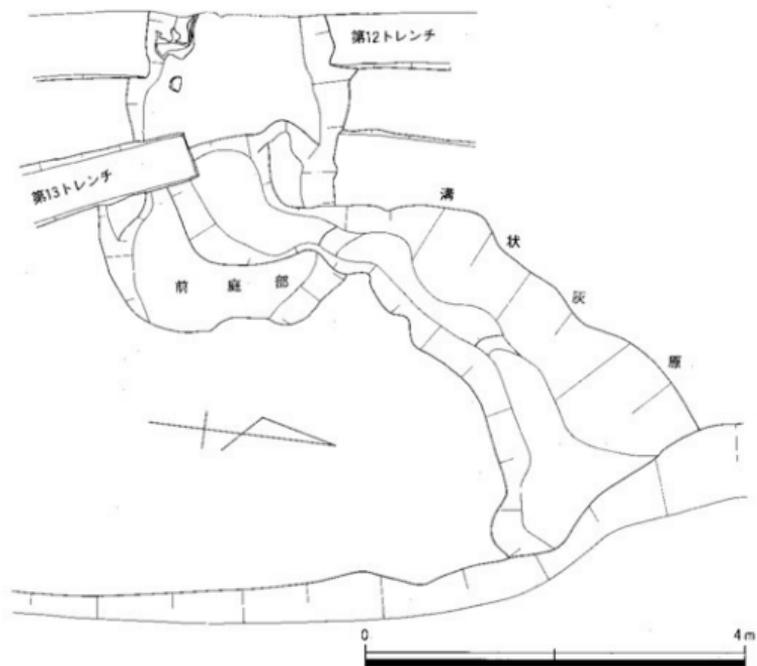
下坂2号窯は、G地区中央部に位置し丘陵東側斜面(傾斜角32°)の自然地形を利用して築かれた半地下式竈窯である。北側約7mの地点に下坂1号窯が立地する。2号窯の直下には下坂3・4号窯が構築されている。

2号窯は、3号窯廃絶後前庭部および窯体構築地点を中心として周囲に盛土を行い、3号窯直上部分で盛土を掘り込み窯体の体裁を整えている。盛土は版築を行っており、粘質土を固く叩き締めた層と土器を多量に含む層とが互層となっている。土器を含む層には、



1. 暗灰黄褐色土
2. 黄褐色土
3. 黑色土
4. 暗灰褐色土
5. 棕色土(深部硬壳含む)
6. 黑色土(灰を多く含む)
7. 灰褐色砂質土
8. 黑色土(灰を多く含む)
9. 淡黄色硬土(藻類・藻体残画)
10. 赤褐色硬土
11. 暗黄褐色土
12. 淡褐色砂質土
13. 黑褐色土
14. 暗褐色粘質土(地山)

第11図 下坂1号泥土層断面図



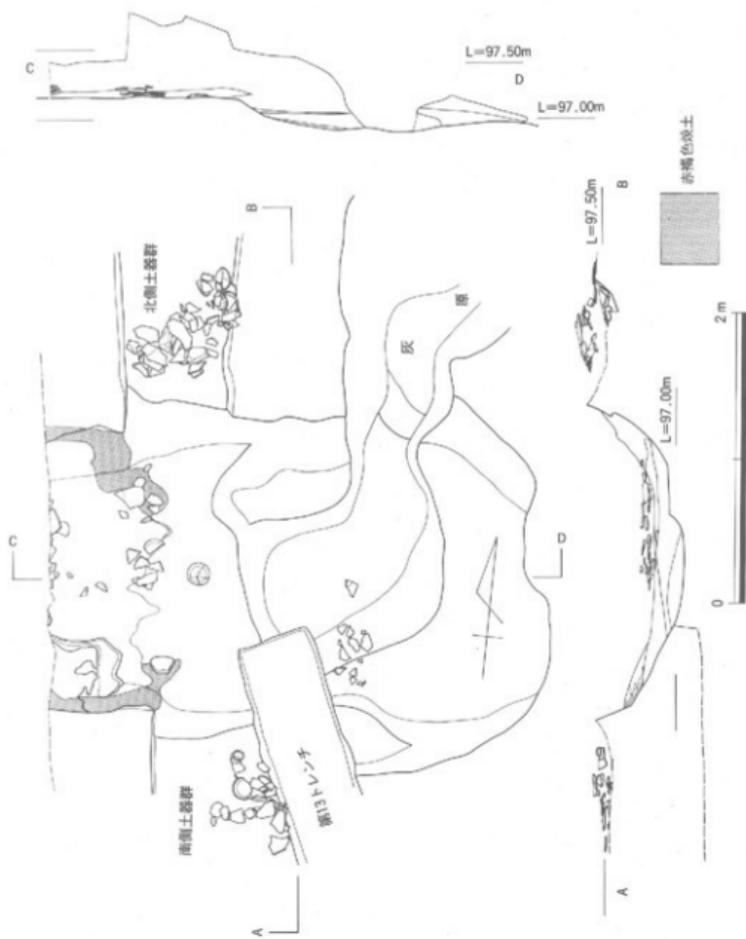
第12図 下坂2号窯遺構図

多量の窯壁ブロックや窯内から排出される砂粒状の窯壁崩落土がみられた。また、窯体の周囲には土器の集積がみられ、窯体に沿って堆積していた。これは、排水の便をとるために行われたものと考えられる。検出された窯体は、焚口部および燃焼部下端部分と思われる傾斜をもたず平坦面をなす。前庭部およびそれに続く灰原は顕著に残存していた。

検出できた範囲での窯体規模は、検出長約1.32m、床面最大幅約1.88mを測り、床面の標高は97.16mである。窯体の主軸方位は $N84^{\circ}E$ である。

焚口部および前庭部

焚口部より前庭部にかけて、やや開きぎみであるが、焚口部の側壁の遺存状態は良くない。このため境界が明確でない。しかし焚口床面下端部分より落ち込み凹状を呈しており、この部分が前庭部と考えられる。この前庭部の北側から、溝状を呈した灰原が東北にのびている。焚口部は、広い範囲で赤褐色焼土がみられ焚口部最大幅約1.8mを測る。前庭部最大幅約1.95mを測る。



第13号 下板2号窯体图

燃 燒 部

燃焼部は、最大幅約1.5mを測り、長さは約0.8mを検出し未調査部分にのびている。床面は浅黄色を呈し焼きしまっている。燃焼部側壁は床面より約60cm遺存しているが、焼きしまった部分は少く明赤褐色土を呈している。燃焼部は、窯体の断ち割りの結果、床面に2～3回の補修あるいは作業が行われていたことが知られる。

床面には、杯・杯蓋などの他に焼台に用いたと思われる壘片などがみられた。

灰 原

灰原は前庭部の北側から北東にのび溝状を呈している。灰原は、厚さ10～40cm堆積し、裾部に向かって薄くなり末広がりに開く。灰原は2層に分層でき、上層より窯壁・窯洋・遺物を含む黒褐色土層、遺物を多量に含む黒色灰層に大別できる。

第5節 下坂3号窯

下坂3号窯は、下坂2号窯の直下約7～43cmに構築された半地下式窑窯である。

3号窯は、4号窯窯体の崩落土の上に粘質土を埋めため、窯体周辺部も盛土を行って構築していたことが知られた。3号窯の主軸と4号窯とに差が生じており、3号窯は4号窯南側の側壁の上部を壊している。床面および側壁に約3～5cmの粘土（側壁にはスサを含む）を貼りつけたもので床面には段をもたない無段式である。3号窯の南側は、4号窯構築時に地山を削り作業場としたものを若干の盛土で整地面としている。北側は、盛土を行い北側に傾斜をつけている。これら左右の施設は、作業場と排水を意図したものと考えられる。

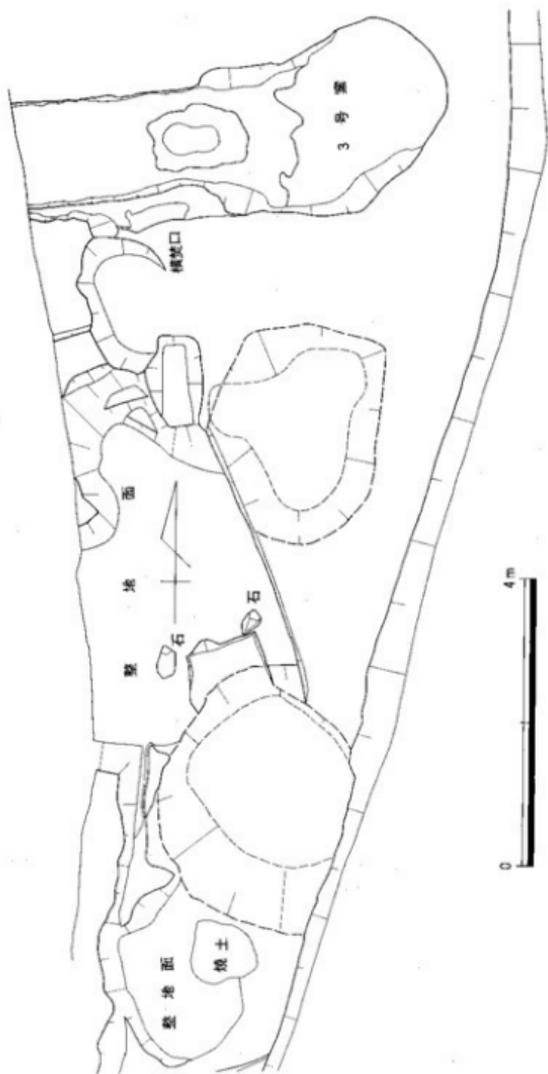
窯体の規模は、全長約3.8m（未調査部分を除く）、焼成部床面の最大幅約1.4mを測り、焚口部床面の標高約96.4mに対し、焼成部最上端の標高約97.2m、床面傾斜角約14°となる。これは焼成部から煙道部にかけての部分未調査のため、焼成部床面の傾斜角は約22°を測る。窯体の主軸方位はN82.5°Eである。

焚口部および前庭部

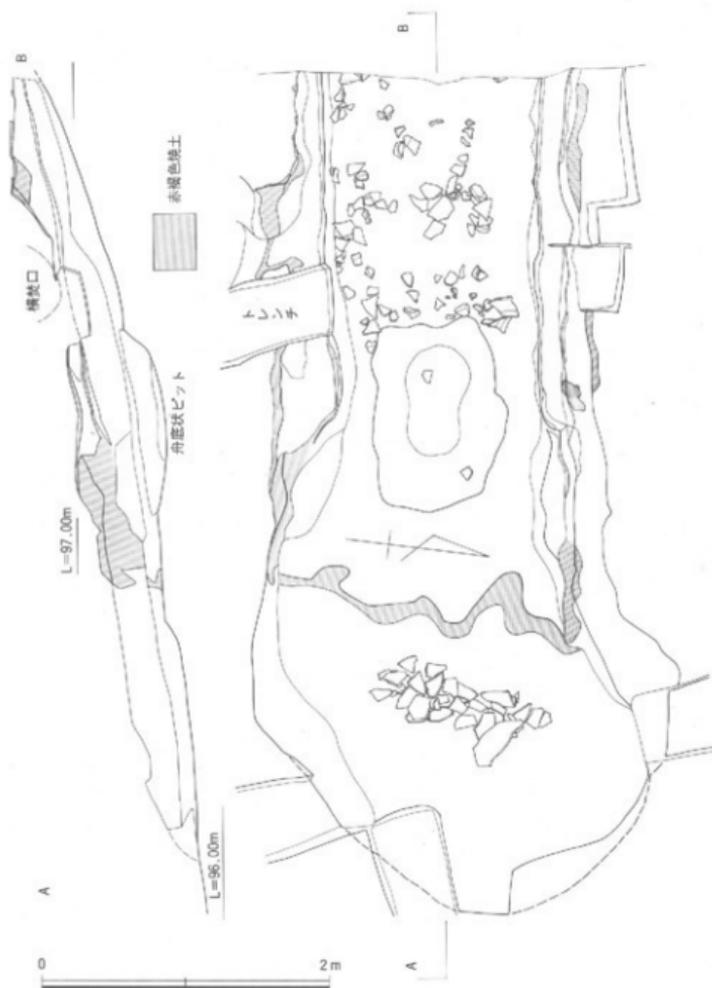
焚口部から前庭部にかけて、やや「ハ」字状に開きぎみであり、焚口部側壁は床面から約30cm残存していた。焚口部床面はほぼ水平で、端部では弧状に赤褐色焼土の広がりが認められた。焚口部から前庭部にかけてやや窪みをもつが前庭部はほぼ水平面をなす。前庭部中央部は凹んで大形壘片が堆積していた。焚口部は、断ち割りの結果、浅黄色焼土と赤褐色焼土が互層に堆積しており2～3回の補修作業の行われていたことが知られた。

燃 燒 部

燃焼部は、長さ約1.7m、床面の最大幅約1.3mを測り、床面は砂質を帯びたオリーブ灰



第14图 下坂3号墓平面图



第15図 下板3号窯窯体図

色に焼きしまっていた。燃焼部側壁は床面より25~40cm遺存しており、床面に比較して非常によく焼きしまっている。燃焼部上端の南側において側壁上端部分で、浅黄色焼土と赤褐色焼土の広がりが見られた。この部分は一部地山を削って水平面をなし、窯体内側に向けて傾斜をもたせている。外側には多量の炭が検出されており、焚口（追焚口）と考えられる。燃焼部中央には、94×140×18cmの舟底状ビットが設けられているが、最終段階の操業時には埋められていた。窯体断ち割りの結果、灰色土と赤褐色土が互層に堆積しており4~5回の床面が確認された。また、側壁は顕著に確認しうるもので4回の補修作業が行われ、その都度若干の盛土（裏込めのもの）が行われていることが知られた。

焼成部

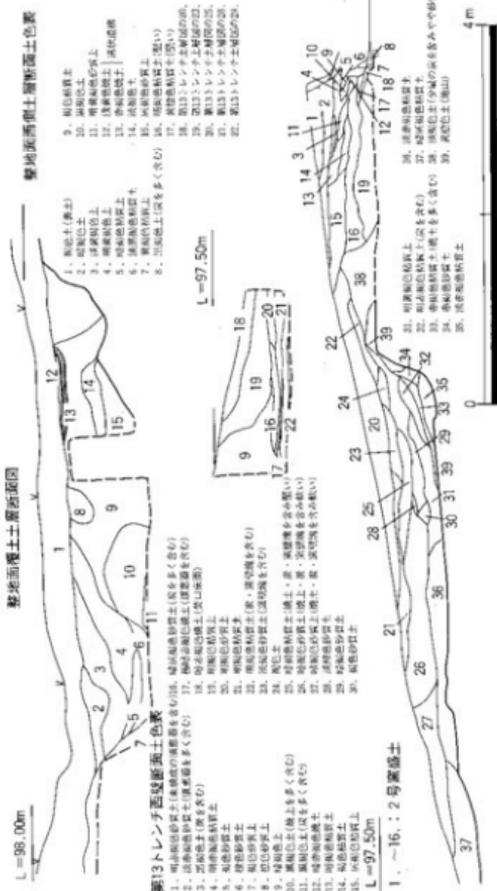
焼成部は、長さ1.4m（未調査部分を除く）、床面最大幅約1.4mを測り、側壁は床面よりやや内湾気味に約10~15cm立ちあがる。床面は煙道部に向かって約22°の角度で傾斜している。床面の一部には、多数の石が床面に半ば埋って出土したが、これは焼台に用いられたものと考えられる。

下坂3号窯関連遺構

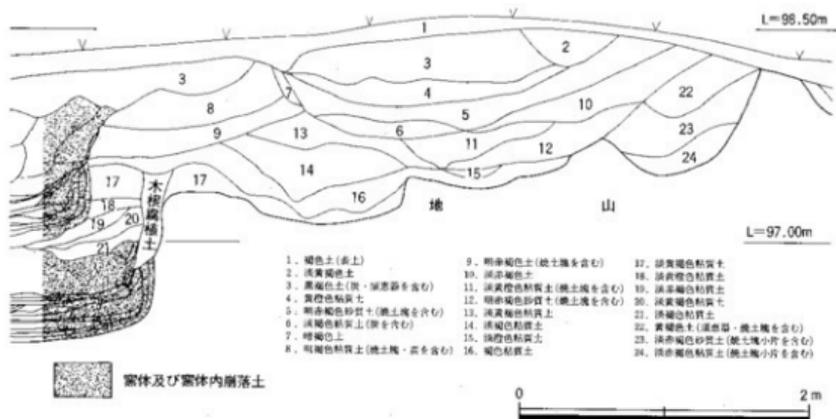
下坂3号窯の南側には、3号窯の操業時に伴うと考えられる整地面が確認された。整地面は、明黄褐色粘質土や窯体内から排出されたと思われる灰・砂状の窯壁ブロックなどを埋め水平面をなしている。この整地面は、版築を行ったかの如くかたく叩きしまっていた。また、整地面の中央部に上面が平坦な石が置かれ、この石を中心にして焼土面の広がりが見認められた。整地面は、直下にその所在が知られた第2~4土坑が埋められた後に形成されているが、東側については林道敷設に伴い削り取られており広がり確認できていない。3号窯の南側は、地山を削り作業面をなす平坦部を呈しているが、この部分でも整地面に接する地点で通路状の掘り込みや段が設けられていることが知られた。

整地面は、すなわち下坂3号窯の操業時に伴う作業場を意図しているものと考えられるが、窯体より一段低くすることで排水をも意図していたことが考えられる。

これらの遺構が廃絶した後、多量の土器を含む暗褐色を呈した砂質土で埋った時点で、窯状遺構がみられる。この窯状遺構は、3号窯の南4mに位置するが、その大部分は未調査区にのびているため詳細は不明である。調査区西端の土層断面観察によると、床面をなしたと思われる浅黄色焼土と直下には赤褐色焼土がみられ、ともによく焼きしまっている。3号窯と2号窯との時期差が余り認められないことからみて、この窯状遺構は、窯の操業期間は短かったものと考えられる。

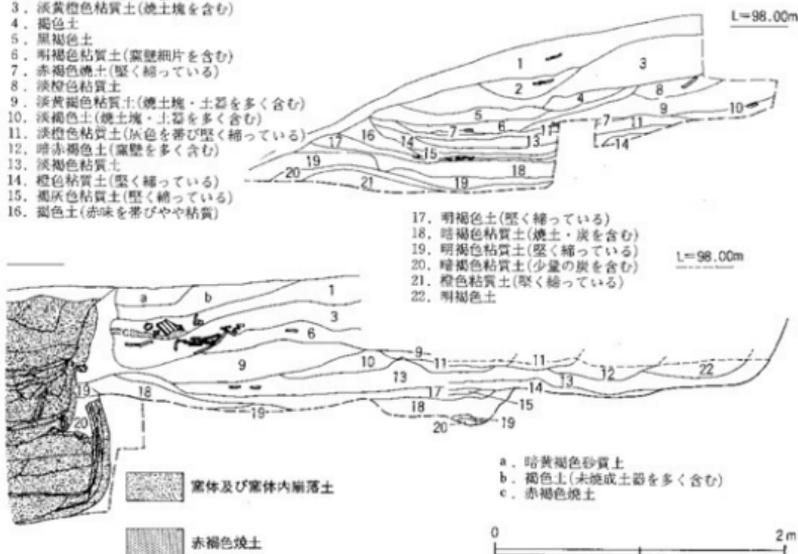


第16図 第13トレンチ西縁断面図・第16号腐植土層断面図



第17図 下板2・3号窠盛土断面図(調査区西側断面)

1. 明赤褐色砂質土(窠壁・土器を多く含む)
2. 黒褐色土(炭を多く含む)
3. 淡黄褐色粘質土(焼土塊を含む)
4. 褐色土
5. 黒褐色土
6. 明褐色粘質土(窠壁細片を含む)
7. 赤褐色焼土(堅く締っている)
8. 淡褐色粘質土
9. 淡黄褐色粘質土(焼土塊・土器を多く含む)
10. 淡褐色土(焼土塊・土器を多く含む)
11. 淡褐色粘質土(灰色を帯び堅く締っている)
12. 暗赤褐色土(窠壁を多く含む)
13. 淡褐色粘質土
14. 褐色粘質土(堅く締っている)
15. 暗褐色粘質土(堅く締っている)
16. 褐色土(赤味を帯びやや粘質)



第18図 下板2・3号窠北側盛土断面図

第6節 下坂4号窯

下坂4号窯は、下坂3号窯の直下約5～60cmに構築されていた半地下式窯である。

4号窯は、黄橙色を呈する砂質の地山を「U」字状に掘り込んだのち、そのまま窯体とした（第1次4号窯）ものと、床面および側壁に約3～7cmの粘土（側壁にはスサを含む）を貼りつけた（第2次4号窯）もので、床面に段をもたない無段式である。4号窯の窯体の左右は地山を削り取り、窯体部が高位にあるよう成形されており、排水を意図したものと考えられる。

窯体の規模は、調査実施できたのは焚口から燃焼部にかかる部位であるため全長は不明だが、検出長約2.8m、燃焼部最大幅2.15mを測り、床面の標高約95.7mを測る（第1次4号窯）。窯体の主軸方位は、N80°Eである。

焚口部および前庭部（第1次4号窯）

焚口部から前庭部にかけて、やや開きぎみに灰原につづくが、前庭部は3号窯構築に際し削り取られているため不明である。焚口部の側壁の遺存状態は、北側が良く残存しており、床面より約60cm遺存している。焚口部の最大幅約1.2mを測り、ほぼ水平面をなす。

焚口部および前庭部（第2次4号窯）

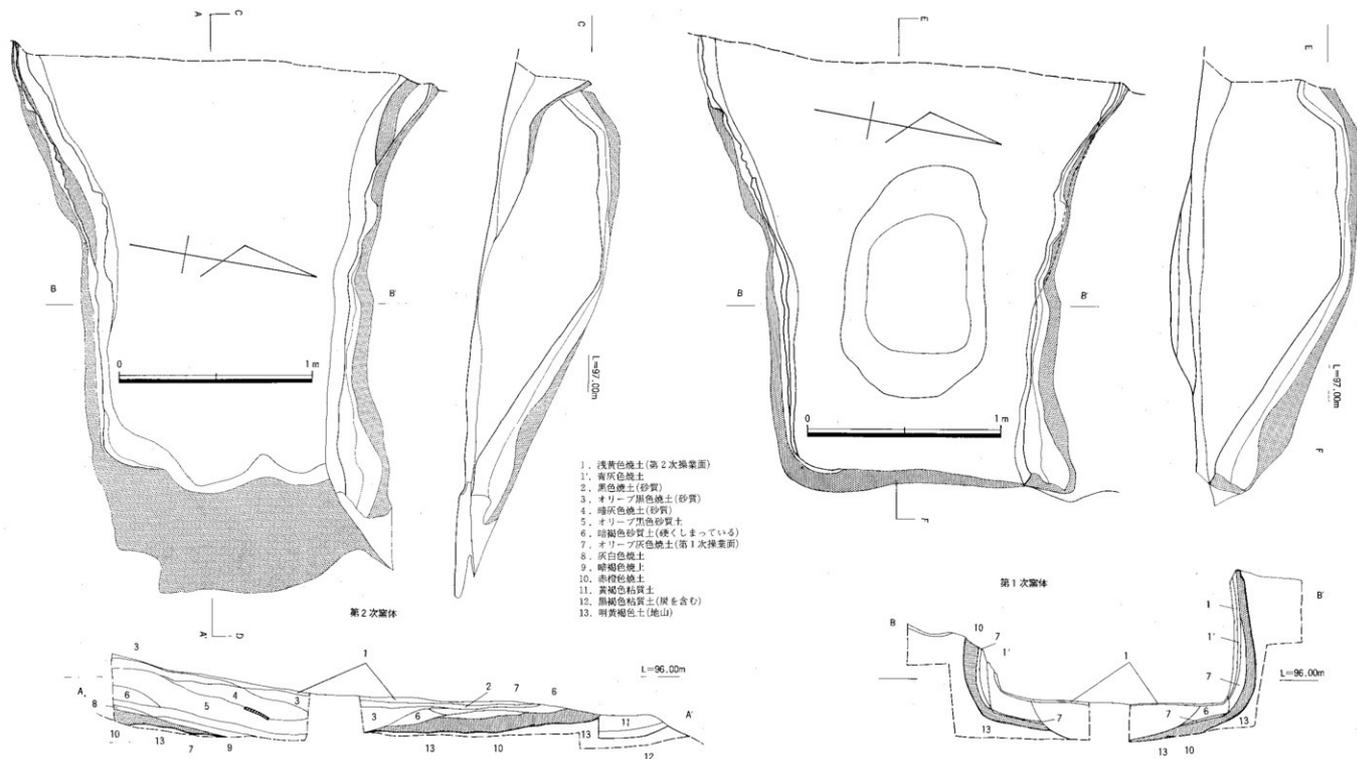
第1次4号窯の側壁を利用し、一部に粘土を貼りつけて構築している。焚口から前庭部にかけて、やや顕著に「ハ」字状に開く。焚口部は、第1次4号窯に比べてやや前進する。焚口部床面にはほぼ半円状に赤褐色焼土の広がり認められる。焚口部はほぼ水平で、長さ約1.4m、床面最大幅1.15mを測る。

燃焼部（第1次4号窯）

燃焼部は、長さ約1.8mを検出しているが全長は不明である。床面の最大幅約2.1mを測り、床面最下端の標高96.3m、上端で96.35mである。床面はほぼ水平である。中央部に70×125×10cmの舟底状ピットがみられるが、これは第2次4号窯の初期段階に作られたものである。窯体床面の断ち割りの結果、青灰色焼土の堆積がみられ少なくとも1回の補修が行われていたことが知られた。

燃焼部（第2次4号窯）

燃焼部は、第1次4号窯と同様、部分的な検出であるが長さ約0.9m、床面最大幅約1.9mを測る。床面および側壁は、青灰色に焼きしまっている。側壁には一部に手の圧痕が認められる。燃焼部は、窯体断ち割りの結果、床面を表わす青灰色・灰色の焼土層と黒色・赤褐色焼土が互層をなしており4回の補修あるいは作業が行われていたことが知られる。初期段階には、舟底状ピットを設けているが、その後この部分を埋めて補修しており、最終段階では側壁も作り替えていた。



第19図 下板4号築体図

灰 原

灰原は焚口部から60°の角度で、東西約4m、南北約4.7mの範囲で扇状に広がり裾部に行くにしたがい薄くなる。灰原は焚口部より傾斜する傾斜面に、厚さ5～25cm堆積し、溝状に排出されている。灰原は遺物・窯滓を多量に含む炭層である。裾部は、3号窯構築に際し明黄褐色砂質土の盛土によって切断されていた。

下坂4号窯関連遺構

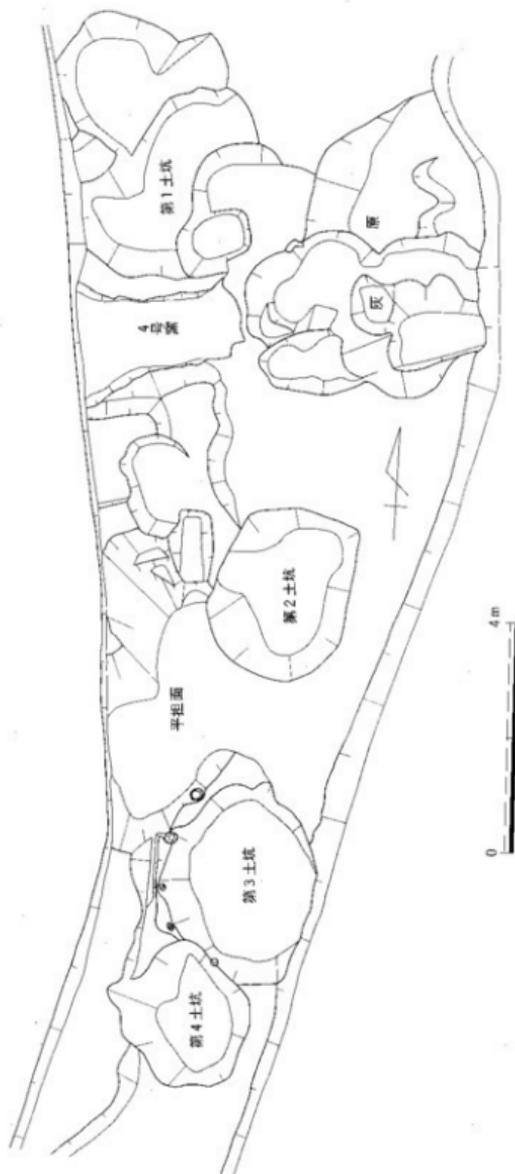
下坂4号窯の左右には、地山を削り取り作業場とした遺構が確認されている。これらは窯体を高位に保つよう形成されたものである。

北側には、第1土坑とした階段状を呈するテラスが設けられている。このテラスのうち、窯体に近い部分は溝状を呈し、排水を意図したものと考えられる。前庭部から北西方向に広がるテラスは、それぞれ水平面をもち作業場としたと思われる。これらのテラスは、いずれも灰原に向かって開けていることが知られた。

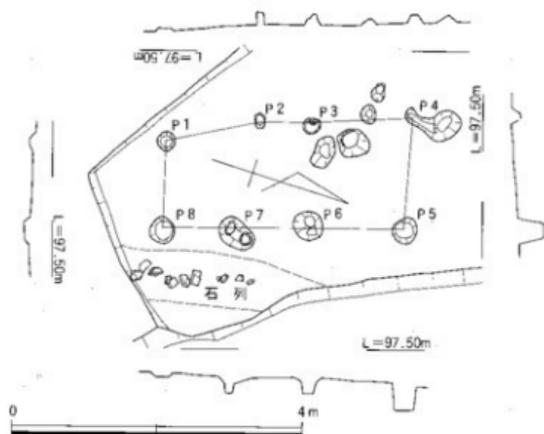
南側は、地山を大きく削り取り広い平坦部をもっている。この平坦部は、4号窯窯体および第1土坑と比べて、一段低く設けられていた。平坦部に接して、第2・第3土坑が設けられ、第3土坑の南に接した第4土坑が位置する。第2土坑の規模は、長径約3.05m、短径約2.4m、深さ20～90cmを測る。床面には多量の窯壁塊の堆積が認められ、土器の堆積もみられた。土坑内は、窯体内から排出された砂状の窯壁崩落土で埋まっていた。床面の下部の土坑底には粘質土の堆積がみられた。この粘質土の堆積は、土坑の北側部分では地山を水平方向に穿った痕跡が認められた。これらのことにより、本土坑は本来、採土坑であった可能性も充分に考えられる。第3土坑は、第2土坑の南約2mに立地する。第3土坑の規模は、長径3.6m、短径約3m（推定）、深さ約50cmを測り楕円形を呈する。第3土坑と北側の平坦部と接する部分は、一段高く盛り上りをもっている。この土坑の西側の肩に小ピット5を有し、径12～25cmを測る。土坑内には、多量の土器が堆積していた。土器の多くは未焼成品であった。土器の堆積は、中央部から北側にかけての部分に集中しており、未製品の廃棄場所であったと考えられる。土坑底には、第2土坑と同様に粘質土の堆積がみられた。第4土坑は、長径約2.55m、短径2.2mを測り、深さ約35cmで不整な円形の土坑である。土坑内には、土器の堆積が認められたが、他の土坑に比べて量は少ない。

第7節 掘立柱建物跡

下坂窯跡群では1棟の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡は、H地区の南端に位置し、下坂4号窯の南約19mに立地する。字与三兵衛平の谷合いの平地に所在する。主軸はN18°Wで、桁行3間、梁間1間の建物である。桁行長3.35m、妻通長1.25～1.55m、床面



第20图 下板4号窖藏平面图



第21図 掘立柱礎物跡遺構図

積約4.7㎡を測る。柱穴は8個で、P3は二段掘りであるが他は全て円形の単孔である。各柱穴間距離はP1より1.34、0.75、1.4、1.57、1.3、1.15、0.95、1.22mを測る。各柱穴プランはP1より(25×26-5)、(14×20-17)、(24×21-14)、(17×21-13)、(35×35-36)、(41×40-22)、(55×36-22)、(35×36-9)cmである。柱穴底の絶対高はP1より97.18、96.95、96.98、96.97、96.65、96.88、96.89、96.09mで差は50cmである。

掘立柱礎物跡は、遺物を多量に含む黒褐色土で覆われ灰原を形成していた。この灰原に伴う窯跡は未調査区に存在するものと考えられ、下坂1～4号が立地する丘陵斜面に構築されたと思われる。遺物は糸切り底を有する杯・杯蓋が多くみられた。柱穴内より少量の須恵器片を検出しているが、灰原出土の遺物とほぼ同時期と考えられる。

また、建物跡の東側では、桁行に沿って石列が検出された。建物跡は、灰色砂質土に建てられていたが、石列はよくしまった灰白色砂質土が帯をなし、その上に置かれていた。

第8節 出土遺物

下坂窯跡群より出土した遺物は、下坂1～4号窯体内と各々の関連遺構および試掘トレンチ内・調査表採のものである。遺物はコンテナ(33×49×30)約80ケースをかぞえた。

遺物は、須恵器が主体で蓋・杯・椀・皿・壺・甕・鉢などがみられ、円面硯・獸脚・瓦の出土も知られた。また、赤彩土師器・土師器甕なども少量みられた。

出土した遺物の整理は、現地調査終了後に行った。本書では、整理期間の都合上一部の遺物について図化作業を行い、一括資料と考えられる遺物を取り上げ完形あるいは完形に復元し得るものを図示した。また特異な器形のものについては細片でも図示することに努めた。図示した資料の中で、完形あるいは完形に復元し得るものについては法量を計測し、分類を行うこととした。

その結果、個々については後述するが、類別された器形を杯A・杯B……、蓋A・蓋B……、と呼び、その各々で大小の関係にあるものを杯AⅠ・杯AⅡ……、と細分することとした。このように同一記号のもとにまとめた同一系列の土器のうちで、手法などの点でさらに分類が可能なものをa・b・cの記号をつけて区別した。^{註1}

蓋は、端部の形態で3種に類別でき蓋A・蓋B・蓋Cに大別した。蓋Bと蓋Cには大小がみられたことにより、それぞれⅠ～Ⅲを付している。

杯は、杯A・杯Bに大別し、さらに杯AⅠ・杯AⅡ、杯BⅠ・杯BⅡ・杯BⅢに分類した。杯Aは平底を呈し、杯Bは断面四角形および断面三角形の高台をもつ杯である。

椀は、椀A・椀Cがみられた。椀Aは平底を呈し、椀Cは丸い底部のものである。

1. 下坂1号窯出土遺物 (第26・27図、図版31)

下坂1号窯の出土遺物は、蓋A、蓋B、杯B、椀A、椀C、甕、鉢がみられ、鉄鉢形土器も出土している。

蓋A (4) は、口径16.6cm、器高1.9cmを測る。平坦な頂部よりゆるく屈曲した縁部をもち、端部は丸くおさめる。つまみは中央部がやや盛り上る。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行う。

蓋B (1～3・6) は、縁部は屈曲せず、頂部はまるいものとやや平坦なもので、中央部にややくぼみをもつ平坦なつまみがつく。大型のBⅠ (6) とその他BⅡ (1～3) に大別できる。縁端部をみると、断面が三角形を呈するもの (6) とまるくおさめるもの (1～3) がある。内外面の調整は蓋Aと同様である。口径15.4～19.5cm、器高2.9～3.9cmである。

杯BⅡ (11～17) は、口径12.4～17.0cm、器高3.2～4.3cmを測る。口縁部の開いた土器で、外面の調整法によってb (11～13・15～17)、c (14) がみられる。BⅡbは、内外面ロクロナデ、底部外面へら切りの後ナデ調査を施す。BⅡcは底部外面回転糸切りである。

椀A (7～9) は、小さな平底よりわずかに内湾ぎみに開く口縁部からなるやや深い器形で口径12.6～15.6cm、器高3.5～4.9cmを測る。内外面の調整法は杯と同様で、底部切り離しの差によってb (7)、c (8・9) に分けられる。

椀C (10) は、まるい底部からやや内湾気味に開く口縁部をもち口径12.6cm、器高4.1cmである。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はていねいなナデをヘラ切り痕をとどめない。

皿A I (18) は、大形の皿で口径21cm、器高2cmを測る。平坦な底部よりやや内湾気味に短く立ち上る口縁部からなる器形である。内外面ロクロナデを行い底部内面は、ロクロナデの後不整ナデ調整を施す。底部外面に板目圧痕がみられる。

甕 (20) は、口径24.4cmを測り大形品である。肩部張り気味で斜め上方に立ち上る口縁部からなる。端部は外側に肥厚し平坦面をもつ。口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。肩部外面は平行鼓きの後一部にハケメをつける。内面には同心円印がみられる。

鉢 (19) は、口径27.8cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上り、外反する口縁部からなる。内外面ロクロナデ調整を施す。

鉄鉢 (21~23) は、いわゆる鉄鉢と呼ばれるもので、内湾する口縁部と鈍角の尖底からなる。(21・22) は同一個体と思われる。口径20.1cmを測り、口縁部は垂直にたつ。内外面ロクロナデ調整を施し、外面下半はヘラケズリを行う。灰褐色を呈し、やや軟質である。

(23) は、口径19.2cmを測り、口縁端部は内湾した後端部をつまみ上げる。内外面ロクロナデ調整を施し、灰色で硬質である。器壁は薄い。

不明土器 (24) は、底部穿孔された土器で、底径6.6cmを測る。底部端は円形に穿孔し端部は丸くおさめる。

2. 下坂1号窯灰原出土遺物 (第28~30図、図版31~33)

下坂1号窯灰原の出土遺物は、蓋A、蓋B、蓋C、杯A、椀A、椀C、皿A、鉢、壺、高杯、円面硯などがみられた。

蓋A (6・8・9) は、口径16.5~16.9cm、器高2.6~2.9cmを測る。やや丸味をもつ平坦な頂部から屈曲する縁部へと続く。端部は内側へ屈曲する。つまみは中央部がややくぼむ。内外面ロクロナデ調整を施す。頂部は、ヘラケズリの後ナデを行う。

蓋B (1・3・5・7) は、縁部は屈曲せず、頂部は丸いものとやや平坦なものがある。つまみは中央部にややくぼみをもつ。大形のB I (5・7) とやや小形のB II (1・2) がみられる。B Iは口径17.5~17.7cm、器高3.2~4.0cmを測り、B IIは口径16.2~16.4cm、器高2.8~3.7cmである。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行ったもの(1・5・7)とナデを行わないもの(2)がみられる。

蓋C II (3) は、平坦な頂部よりなだらかにつづく縁部からなる器形で口径16.4cm、器高2.0cmを測る。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリ。つまみは平坦である。縁端部は断面三角形を呈し外面に沈線をもつ。

杯A (14・16・17) は、口縁部の開いたやや浅い器形である。A I a (14) は口径15.6

cm、器高3.6cmを測る。内外面ロクロナデ調整を施し、底部はヘラ切りである。A II a (16・17) は小形品で口径9.4~10.6、器高2.1~3.2cmを測る。底部はヘラ切り無調整で(17)は口縁部が外反する。

椀B II (21~30) は、口縁部の開いた土器で、外面の整形手法によってa (21~23)、b (24~30) に分けられる。口径13.2~16.0cm、器高3.4~5.0cmを測る。内外面ロクロナデ調整を施している。(24) はやや腰高な器形である。

椀A (11・12・15) は、口径13.8~15.2cm、器高3.6~4.0cmを測る。外面の整形手法によってa (12・15) b (11) に分けられる。

椀c (13) は、口径14.3cm、器高4.6cmを測る。底部はやや丸底を呈し、やや内湾気味に立ち上った後外反する口縁部からなる器形である。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切り無調整である。

図A (18~20) は、口径15.9~22.7cm、器高1.7~2.5cmを測る。大形のA I (20) とやや小形のA II (18・19) がみられる。平坦な底部より斜め上方に立ち上る口縁部からなる器形で、内外面ロクロナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

鉢 (31~33) は2種みられた。鉢 (31) は、口径23.8cmを測る。やや内湾気味の体部から、やや斜め上方に立ち上る口縁部をもつ。内外面ロクロナデ調整を施し、体部外面にカキメを行う。鉢 (32・33) は、やや大形の (33) と小形の (32) に分けられ口径14.4~21.2cmを測る。なだらかな胴部より直立気味の口縁部からなる器形で、(33) は口縁端部がやや肥厚する。内外面ロクロナデ調整を施し、(32) は胴部内面青海波文を工具によりナデ消す。

壺 (34~36) は、3種みられた。直口壺 (34)、長頸壺 (35)、広口壺 (36) である。(34) は張り気味の肩部より直立する口縁部からなる器形で、内外面ロクロナデ調整を施す。口径は11.0cmを測る。(35) は肩部が張り気味で稜のある器形で、口縁部の開く頸部をもつ。筒形の口頸部中央に浅い凹線が一条めぐる。体部は内側にすぼまり、ソロバン玉を呈する。底部には外方にふんばった高台がつく。肩部は口頸部基部までひきあげたのち口頸部をつけた2段構成である。(36) は体部のみであるが、広口口縁のつくものと思われる。底部に外方にふんばった高台がつく。

高杯 (37~40) は、口径15.8~18.0cm、器高5.8~10.4cmを測る。低脚のもの (39・40) と高い脚をもつ (37・38) ものがみられる。(39) は深い杯部を呈する。脚は「ハ」字状に開き、そのまま端部をおさめる (40) と、水平気味に外方に開きさらに下方に折りまげる (37・38) もの、あるいは端部を屈曲させる (39) ものがみられる。(39) は (40) の整形手法の違いによるものであろう。

高杯 (115) は、脚部を欠損する。口径10.0cmを測る。小さな平底から斜め上方に直線的に広がる口縁部をもち深めの杯部を呈する。内外面ロクロナデ調整を施し、器壁は薄く硬

質である。

円面硯(43・44)は、通常圈足硯と呼ばれるものである。いずれも台脚部に「+」字形の透しが四方向にみられる。陸部は中高を呈していたと思われる。陸部の端部は欠損している。海部は溝状を呈し底部は平坦である。外堤は、海底部から直立する。外堤外側に筆立てまたは墨立てを有し、外周に12個をつけたと考えられる。(44)の台径30.6cm、器高8.9cmを測る。(43)は、台脚部のみであるが(44)と同様の器形をとると考えられる。台径31.4cmを測る。その他、(44)にみられる外堤部のみの出土が2個体みられている。

高杯(41)は、托杯形土器と思われる。口径9.5cm、器高5.8cmを測る。

3. 下坂2号窯出土遺物(第31図、図版33~34)

下坂2号窯出土遺物は、蓋C、杯B、椀A、皿A、鉢、甕がみられた。

蓋CⅡ(1~5)は、縁部は屈曲せず、頂部は平坦で、つまみは中央部のややしばむ平坦なものである。縁端部はおりかえして丸くおさめる。口径15.7~17.1cm、器高1.9~2.4cmを測る。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行う。

蓋CⅢ(6)は、口径8.4cm、器高1.3cm(つまみ欠損)の小形品である。整形手法は蓋CⅡと同様である。

杯BⅡ(8~13)は、口径14.0~15.6cm、器高3.7~4.1cmである。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行っている。

椀A c(8)は、口径12.0cm、器高4.5cmを測る。小さな平底から内湾気味に立ち上り、口縁端部は外方につまみ出す。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面は回転糸切りを行う。

皿A(14・15)、平坦な底部より、斜め上方に立ち上る口縁部からなる器形で、大形のAⅠ(14)と小形のAⅡ(15)がある。(14)は口径18.4cm、器高1.8cmで口縁端部が屈曲し端部を上方につまみ上げる。(15)は、口径14.2cm、器高1.9cmを測る。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

鉢(16)は、口径23.8cmを測る。直立気味に立ち上る口縁部をもち、肩部やや張り気味である。内外面ロクロナデ調整を施す。

甕(17)は、口径20.7cmを測る。なだらかな肩部から斜め上方に立ち上る口縁部につづく。口縁部外面に、ヘラ先による波状文が2条施されている。口縁部内外面ロクロナデ。肩部内外面ロクロナデ。体部外面平行敲きの後ナデ消す。体部内面同心円叩きみられる。

4. 2号窯灰原出土遺物(第32・33図、図版34~35)

2号窯灰原出土遺物は、蓋A、蓋B、蓋C、杯B、皿A、甕、壺などがみられた。

蓋A(1・2)は、口径15.5~16.4、器高2.0~2.7cmを測る。やや丸味をおびた平坦な頂部よりゆるやかに屈曲する縁部からなり、(1)は端部を内側に折りまげた後外方につまみ出す。(2)は端部を丸くおさめる。つまみは平坦である。

蓋BⅡ(3)は、口径15.3cm、器高3.2cmを測る。頂部は平坦でゆるやかに縁部へつづく。天井部は笠形を呈する。縁端部は、内側に折り曲げた後外方につまみ出す。つまみは中央部にややくぼみもち平坦なものがつく。

蓋CⅡ(4)は、ゆるやかな頂部から縁部につづく。縁端部は内側に折り曲げた後、外方につまみ出す。端部は尖り気味である。口径18.2cmを測る。

杯BⅡ(5~12)は、口径13.5~15.1cm、器高3.3~4.3cmである。整形手法によってa(5・8・9・12)、b(6・7・11)、c(10)がみられる。口縁部の開いた浅い土器で、斜め上方に立ちよる口縁部をもつ。高台は底部と口縁部の屈曲部につけるが、(10・11)はやや内側につける。内外面ロクロナデ調整を施す。

皿A(13~15)は、平坦な底部より斜め上方に立ちあがる口縁部からなる器形で、AⅠ(13)は口径20.9cm、器高2.3cmを測る。AⅡ(14・15)は口径15.0~17.2cm、器高1.7~2.4cmを測る。整形手法によってa(14)、b(13・15)に分けられる。(13・15)の口縁部は(14)に比べて低く、端部は尖り気味である。

甕(16・17)は、大形品である。(16)は、口径22.5cmを測る。やや張り気味の肩部から外反気味の口縁部へとつづく。口縁部内外面ロクロナデ調整を施し、肩部外面タタキメ、カキメがみられる。内面は同心円文。(17)は、口径28.2cmを測る。丸味をおびた体部より頸部屈曲して外反する口縁部からなる。口縁部端部は外方へつまみ出し、端部は浅凹線を呈する。口縁部内外面ロクロナデ調整を施す。体部外面格子目タタキ、内面同心円文がみられる。

壺(18~20)は、長頸壺(18)、短頸壺(19)、三足壺(20)がみられた。(18)は、肩部が張って稜のある壺で、肩部中央に浅い凹線1条をめぐらす。体部は内側にすぼまり、ソロバン玉状を呈す。内外面ロクロナデ調整を施す。(19)は、口径15.1cm、器高14.8cmを測る。平坦な底部から内湾気味の体部へつづく。肩部はなだらかで頸部の屈曲部より外傾気味の口縁部からなる器形である。口縁端部は内方につまみあげる。口縁部肩部内外面ロクロナデ調整を施す。体部外面ヘラケズリの後ナデを行う。(20)は、口径10.1cm、器高15.6cmを測る。丸味をもった底部から外傾気味の体部へつづく。肩部が張って稜がある。口縁部は直立気味で端部を外方につまみ出す。肩部に4個の穴が掘り込まれている。体部下半に獸脚を付着させた痕跡が認められ、底部にもみられることからいわゆる三足壺と呼ばれる壺と考えられる。内外面ロクロナデ調整を施す。この壺に付けられた獸脚は、胎土、焼成の具合からみて第54図11が該当する。

5. 整地面覆土出土遺物(第34図、図版35)

整地面覆土は3号窯廃絶後に埋まったもので、2号窯構築前のものと思われる。ここからは、蓋、蓋B、蓋C、杯A、杯B、椀A、皿A、壺がみられる。

蓋A(4~6)は、口径14.9~16.5cm、器高1.5~2.6cmを測る。平坦な頂部からやや屈曲し縁部につづく。縁端部は折り曲げる。中央部に平坦なつまみがつく。

蓋BⅡ(1・2)は、口径15.8~16.5cm、器高3.1cmを測る。小さな頂部からなだらかに縁部につづき、天井部は笠形を呈する。縁端部は折りまげた後丸くおさめる。頂部中央に平坦なつまみをつける。

蓋CⅡ(3)は、口径16.0cmを測る。平坦な頂部と縁部からなる器形で、縁端部は内側に折り曲げ尖り気味におわる。

杯AⅠ(7)は、口径13.3cm、器高3.6cmを測る。平坦な底部からやや直立気味に内湾する口縁部へとつづく。口縁端部はやや外反する。内外面口クロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

杯BⅠ(9~13)は、口径18.5~19.8cm、器高5.7~7.3cmを測る。平坦な底部から外反気味に開く土器で、高台を屈曲部より内側につける。高台は断面四角形のもの(11)、断面台形のもの(9・11)、断面三角形のもの(10・13)がみられる。(11)の口縁部は直立気味である。内外面口クロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後不整ナデを行う。褐灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

杯BⅡ(14~17)は、口径14.0~15.9cm、器高3.4~4.4cmを測る。整形手法によってb(14・17)、c(15・16)がみられる。(16)は平坦な底部だが、(14・15・16)はやや丸底を呈す。

碗A(8)は、口径13.4cm、器高4.2cmを測る。小さな底部より内湾気味に立ちあがる口縁部からなる。底部はやや上げ底を呈する。内外面口クロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

皿AⅠ(18)は、口径24.5cm、器高1.7cmを測る。平坦な底部より斜め上方に立ち上る口縁部からなる。口縁部は短く、端部はやや尖り気味である。内外面口クロナデ調整を施す。

壺(19)は、口径20cmを測る。広い開口部をもち、丸味をもった体部からやや斜め上方に立ち上る口縁部をもつ。内外面口クロナデ調整を施す。

壺(20)は、口径19.5cmを測る。やや張り気味の肩部から短く直立気味の口縁部をもつ。開口部は広い。内外面口クロナデ調整を施す。

6. 下坂3号窯出土遺物(第35・36図、図版35~36)

下坂3号窯出土遺物には、蓋B、蓋C、杯A、杯B、碗A、皿A、鉢、壺、甕がある。

蓋BⅠ(1)は、口径17.4cmを測る。天井部やや笠形を呈し、縁端部は外方へつまみ出す。内外面口クロナデ調整を施す。

蓋CⅡ(2~4)は、口径16.4~17.9cmを測る。平坦な頂部よりなだらかな縁部からなる。(2・4)の縁端部は外方につまみ出す。(3)の縁端部内面にかえりをもつ。内外面

ロクロナデ調整を施し、(2・4)の頂部はヘラケズリの後ナデを行う。

杯A I (8)は、口径15.2cm、器高4.2cmを測る。平坦な底部よりやや内湾気味に斜め上方に開がる口縁部からなる。口縁端部は外方へつまみ出す。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面は回転糸切りを行う。

杯B I (21)は、口径20.3cm、器高4.6cmを測る。平坦な底部より斜め上方に直線的に開く口縁部からなり、口縁端部はやや尖り気味におわる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

杯B II (10・20・22・28)は、口径14.4~17.3cm、器高3.0~4.4cmを測る。整形手法によってa (15・22)、b (16・24・27)、c (10~14・17~20・23・25・26・28)に分けられる。平坦な底部より斜め上方に開く口縁部からなる土器で、底部の屈曲部に断面四角形および断面台形の高台がつく。内外面ロクロナデ調整を施す。

碗A (5~7・9・36)は、口径12.5~15.2cm、器高3.5~4.2cmを測る。小さな平坦部より内湾気味に立ち上る口縁部からなる。(5)の平坦部は広い。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

皿A I (29・30)は、口径18.6cm、器高1.9~2.2cmを測る。平坦な底部より斜め上方に短く立ち上る口縁部からなる。口縁部端部は尖り気味。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

皿A II (31)は、口径16.0cm、器高2.5cmを測る。内外面の調整はA Iと同様である。

鉢(33)は、口径25.4cmを測る。直立気味の体部から外反する口縁部へつづく。内外面ロクロナデ調整を施す。

壺(32)は、口径14.0cmを測る。張り気味の肩部と稜をもつ広い壺である。口縁端部は外反し水平気味である。底部には、外方にふんばった高台をつける。内外面ロクロナデ調整を施す。

壺(35)は、小形壺で口縁部を欠失する。推定口径8.4cm、器高8.2cmである。張り気味の肩部から斜め上方に開く口縁部をもつ。口縁部外面には波状文を施している。底部外面に高台をつける。内外面ロクロナデ調整。底部外面はヘラ切りの後ナデを行っている。

7. 下坂2・3号窯北側盛土出土遺物(第37~41図、図版36~38)

下坂2・3号窯構築時の盛土中より多量の遺物が出土している。器種として、蓋A、蓋B、蓋C、杯A、杯B、皿A、鉢、壺、甕などとともに円形硯の出土をみた。

蓋A (3・5)は、口径16.0~16.6cm、器高2.5cmを測る。平坦な頂部から屈曲する縁部につづく。縁端部は折りまげられた後、丸くおわる(5)ものと外方につまみ出す(3)がみられる。つまみは中央部がやや盛り上る(5)と、くぼむ(3)がある。調整は、蓋B・蓋Cと同様内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行う。

蓋BⅡ(7)は、口径17.2cmを測る。天井部は笠形を呈し、縁端部は内方に折り曲げ丸くおわる。

蓋BⅢ(8~10・12)は、口径6.4~13.4cm、器高2.4~3.8cmを測る。(8・9)は、平坦な頂部から下方に折れ曲がる縁部をもつ。縁端部は内方につまみ出す。(10・12)は、縁端部の折り返しがない。頂部中央につまみをつける。壺の蓋と思われる。

蓋CⅠ(13・14)は、口径23.8~24.8cm、器高1.7~2.3cmを測る。平坦な頂部となどらかな縁部からなる大形の蓋である。縁端部は丸くおわる。

蓋CⅡ(4・6)は、口径15.7~16.2cm、器高2.2~2.5cmを測る。平坦な頂部からなだらかに縁部につづく。縁端部は丸くおわる(4)と、折り曲げる(6)がみられる。頂部中央には平坦なつまみがつく。

蓋CⅢ(11)は、口径8.5cm、器高2.6cmを測る。小さな頂部からなだらかに縁部につづく。縁端部は断面三角形を呈す。頂部中央に宝珠つまみをつける。

杯AⅠ(15・16・25)は、口径15.0~15.4cm、器高3.4cmを測る。平坦な底部より斜め上方に開く口縁部からなる土器で、(16)はやや上げ底を呈する。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行い、(16)は回転糸切りである。

杯BⅡ(19~24・26)は、口径11.0~15.4cm、器高2.9~4.9cmを測る。整形手法によってa(21・24)、b(19・20・22・23・26)に分けられる。平坦な底部から口縁部の開いた土器である。底部の屈曲部に断面四角形および台形の高台をつける。内外面ロクロナデ調整を施す。

碗A(17・18)は、口径13.0~13.4cm、器高3.5~3.7cmを測る。(17)は、内湾気味に立ちあがる口縁部からなり、端部をやや外反させ丸くおわる。(18)は、やや内湾気味に斜め上方に立ち上る口縁部からなる土器である。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

皿AⅡ(27~30)は、口径14.6~16.2cm、器高2.1~2.5cmを測る。平坦な底部より斜め上方に短く立ち上る口縁部からなる土器で、端部尖り気味(27・29・30)のものと同角ばる(28)ものがみられる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面ヘラ切りの後ナデを行う。(28)は蓋とも考えられる。

鉢(33)は、口径29.0cm、器高17.0cmを測る。平坦な底部より、内湾気味に立ち上る体部につつき外反する口縁部からなる。頸部に浅い凹線を1条つける。内外面ロクロナデ調整を施し、体部下半から底部にかけてヘラケズリの後ナデを行う。体部下半は厚みをもつ。

壺(37~45)は、肩部が張って稜をもつ(37・38)広口壺、なだらかな肩部から丸い体部をもつ(39・40)広口壺、短頸の(41・45)がみられる。(42~44)は小形の壺で、(42・43)は口縁部外面に波状文を施す。(37・38)は底部に高台を有する壺と思われるが、他は

平底の壺と考えられる。(37~40)は、体部から一気に引き上げ、口縁部をつける二段構成である。

甕(32・34・46~48)は、3種みられた。(32・47・48)の大形甕、(46)は横瓶である。(34)は、短く外反する口縁部と長手の体部からなる甕で、口縁部内外面はナデで、体部外面は縦に刷手目で仕上げる。内面はヘラケズリを施す。土師器の整形手法で仕上げ、須恵質に焼成されたものである。(32・47・48)の大形の甕は、丸い体部から外反する口縁部につづく。より外反の強い(48)と直線的にのびる(32・47)がみられる。いずれも口縁端部を肥厚させる。(46)は、口縁部を欠失している。体部は両端とも円板を当てて整形する。(46・48)の体部外面は格子目タタキを残す。内面には同心円文がみられる。(32・47)の体部外面は平行タタキ、内面は同心円文がみられる。

甗(49・50)は、甗の底部と思われる。いずれも中央部に円形の穴が開けられ、周囲に楕円形の穴が4つある。

鉄製品(51)は、鋤先と思われる。盛土最下層の窠体脇から出土した。

8. 下坂2号窠南側盛土(第42・43図、図版38~39)

下坂2号窠構築時の盛土中にみられた土器の集積より出土したもので、蓋A、蓋B、蓋C、杯A、杯B、碗A、碗C、壺、甕がある。

蓋A(2・3)は、口径16.2~17.0cmを測る。つまみは欠損する。平坦な頂部と屈曲する縁部からなる。縁端部は折り曲げられ断面やや三角形を呈し丸くおわる。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリ無調整である。

蓋BⅡ(5)は、口径16.6cmを測る。天井部笠形を呈し縁部かすかに屈曲した後折り曲げる。縁端部はやや外方に向く。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリ。

蓋BⅢ(1)は、口径13.6cm、器高2.2cmを測る。平坦な頂部より下方に折りまげた縁部からなる。縁端部は丸くおわる。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部ヘラケズリの後ナデを行う。つまみをつけない。

杯AⅠ(7・8・11)は、口径12.6~14.3cm、器高3.3~4.2cmを測る。整形手法によってa(8)、c(7・11)に分けられる。(7)は、平坦な底部から斜め上方に開く土器で、口縁端部をやや外反させる。(8)は、平坦な底部より屈曲して斜め上方に短く立ち上る口縁部からなる。(11)は、小さな平坦部よりやや内湾気味に直立する口縁部からなる器形である。いずれも内外面ロクロナデ調整を施す。

杯BⅡ(12~19)は、平坦な底部から斜め上方に開く口縁部をもつ。整形手法によってa(12・13・16・17・19)、b(14・15)、c(18)に分けられる。口縁部端部には、外反する(13・15)のものがみられる。(12・13・17・18)の高台は、底部の屈曲部よりやや内側につける。高台は(13・17・18)が断面三角形を呈す。いずれも内外面ロクロナデ調整を

施す。

碗A(6)は、口径13.0cm、器高2.9cmを測る。平坦な底部から内湾して短く立ち上る口縁部へつづき、端部は内側に肥厚する。

碗C(9・10)は、口径13.9~14.4cm、器高4.3~5.0cmを測る。小さな底部より内湾する口縁部からなる。底部は丸底を呈す。(9)は内湾する深い器形で縁端部は直立気味におわる。内外面ロクロナデ調整を施し、(10)の底部外面はヘラ切りである。

皿AⅠ(20)は、口径18.2cm、器高1.5cmを測る。

皿AⅡ(21・22)は、口径16.4~16.6cm、器高2.1~2.2cmを測る。

皿は、平坦な底部より斜め上方に短く立ちあがる口縁部からなる。(20・22)の底部は厚い。口縁端部はやや尖り気味におわる。いずれも内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

壺は3種みられた。(23)は、口径7.1cmを測る。丸い体部よりなだらかな肩部につづく。口縁部は直立気味でやや外反する。体部から肩部上端まで一気に引き上げた後、口縁部は装着する二段構成である。胎土は灰白色を呈し密である。外面と口縁部内面に釉がかかり灰釉陶器を思わせる。内面ヨコナデを行う。(24)は、口径12.5cmを測る。「ハ」字状に開く肩部をもち、頸部より「く」字状に屈曲し外反する口縁部からなる壺である。内外面ロクロナデ調整を施し、頸部内面にヘラ記号がみられる。(25)は、口径8.0cmを測る。小形の壺で、口縁部はやや直立気味に立ち上がり端部は外方にのびる。口縁部外面にヘラ先による1条の波状文を施す。

甕(26)は、口径14.4cmを測る。丸い体部と外反する口縁部からなる。口縁部端部はより外方に外反し端部は平坦面をつける。口縁部内外面、体部外面ヨコナデを施し、体部内面は同心門文をナデ消す。

9. 整地面、整地面盛土出土遺物(第44図、図版39)

整地面とそれを形成する盛土中より蓋B、蓋C、杯A、杯B、皿A、皿C、鉢、壺の出土をみた。

蓋BⅠ(2)は、口径17.7cmを測る。つまみ部欠損。丸味をおびた頂部から縁部につづく。縁端部は下方につまみ出し屈曲する。(5)は、口径19.5cm、器高2.6cmを測る。平坦な頂部より下方に折れ曲る縁部からなる。縁端部はフラットな面をとる。内側面ロクロナデ調整を施し、天井部は不整ナデを行う。頂部はヘラ切りの後ナデを行う。

蓋BⅡ(4・6・7)は、口径15.0~15.3cm、器高2.3~2.6cmを測る。(4)の天井部は笠形を呈し、縁端部は内方に折り曲げ端部は尖り気味である。(6・7)の頂部は平坦で、下方に折れ曲る縁部からなる。縁端部は内方につまみ出す。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行っている。

蓋CⅡ(1・3)は、口径15.4~18.9cm、器高1.8cm内外を測る。小さな頂部よりなだらかな縁部からなる。縁端部は丸くおわる。(1)の頂部中央に平坦なつまみをつける。

杯AⅠ(8)は、口径13.6cm、器高4.8cmを測る。平坦な底部と口縁部の開く土器で、口縁部端部はやや外反する。底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

杯BⅠ(10)は、口径19.5cm、器高6.7cmを測る大形で深い土器である。底部屈曲部のやや内側に高台をつける。第30図(9~13)と同様の整形手法である。底部はヘラ切り。

杯BⅡ(9)は、口径16.6cm、器高4.2cmである。口縁部の開く土器で、口縁部端部はやや尖り気味である。内外面口ロナデ調整を行い、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

皿AⅡ(12~14)は、口径13.0~16.6cm、器高2.0~3.5cmを測る。平坦な底部より斜め上方に短く立ち上る口縁部からなる。(13・14)は口縁端部を外反させる。内外面口ロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデ。(14)の底部は回転糸切りを行う。

皿CⅠ(11)は、口径20.1cm、器高4.4cmを測る。小さな底部よりなだらかに内湾して立ち上る口縁部からなる土器で、端部は丸い。底部はやや丸底を呈す。内外面口ロナデ調整を施し、底部外面に簾状圧痕を残す。

壺(15)は、小形の壺で口径7.7cm、器高5.6cmを測る。平坦な底部と角張った体部からなる。肩部から口縁部はなだらかにつづく。口縁部はやや内方に立ち上る。

壺(16)は、口径14.0cm、復元器高約28cmである。やや張り気味の肩部から丸い体部につづく。口縁部はやや屈曲しながら直立する。底部は丸底を呈する。体部内面上半は、同心円文をナデつけ、下半は同心円叩きを残す。体部外面上半は、斜方向に平行タタキ、下半は斜格子状に平行タタキを施す。口縁部内外面は口ロナデ。

10. 下坂4号窯出土遺物(第45~47図、図版40)

下坂4号窯の出土遺物には蓋A、蓋B、蓋C、杯B、碗A、碗C、皿A、壺、甕がみられた。

蓋A(15・16・20)は、口径15.3~15.9cm、器高2.4cm内外である。平坦な頂部と屈曲する縁部からなる。いずれもつまみを欠失する。(15)の頂部はヘラケズリ無調整。

蓋BⅠ(8)は、口径17.4cm、器高2.2cm内外を測る。天井部は笠形を呈す。縁端部は内方に折り曲げる。

蓋BⅡ(6・9~11・13・18)は、口径14.8~15.8cm、器高2.9~3.2cmを測る。丸味をおびた頂部と屈曲する縁部からなる。天井部笠形を呈し、縁端部は内側に折り曲げた後屈曲して外方につまみ出す。頂部中央には平坦なつまみをつける。(1~5・7・12・14・17・19)は、口径15.2~18.9cm、器高1.9~約3.0cmである。(1~4)の縁部内面に「かえり」を有す。平坦な頂部よりなだらかに縁部につづき、縁端部は折り曲げる。(1~4)は内外面口ロナデ調整を施し、他のものは頂部ヘラケズリの後ナデを行う。(1)と杯(30)は

セット状態で出土した。

杯BⅡ(30~40)は、口径13.0~15.8cm、器高3.2~4.6cmを測る。口縁部の開く土器で、底部の屈曲部に高台をつける。(35)の底部外面はヘラ切り無調整であるが、他は全てヘラ切り後ナデを行う。内外面ロクロナデ調整を施す。

杯BⅢ(29)は、小形品で口径7.0cm、器高2.2cmを測る。底部外面ヘラ切り無調整で、蓋に用いたものとも考えられる。

椀A(22~25・27・28)は、口径12.0~13.8cm、器高3.5~4.3cmを測る。平坦な底部より内湾気味に立ち上る口縁部からなる。(23)の口縁端部は外方につまみ出す。(22・25・26)の口縁端部は直立する。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

椀C(21・26)は、口径12.0~13.7cm、器高3.4~3.6cmである。平坦な底部から内湾気味に斜め上方につづき、口縁端部は直立する。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面は(21)はヘラ切り無調整、(26)はヘラ切りの後ナデを行っている。

皿AⅡ(41)は、口径15.6cm、器高2.2cmである。平坦な底部よりなだらかに口縁部につづきやや直立気味に立ち上る口縁端部からなる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。蓋?か。

(42)は横瓶である。口縁部はやや直立気味に立ち上る。肩部内外面にタタキ目が残り、外面は平行タタキ、内面には同心円文を残す。口縁部内外面ロクロナデ。口径12.3cmである。

(45)は、平瓶の体部の破片で、口縁部基部である。口縁部・把手・体部の大半は不明である。肩部に浅い凹線を残す。

壺は3種みられた。(43)は長頸壺で口縁部端部を欠失する。やや張り気味の肩部よりなだらかに体部へつづく。底部の屈曲部に高台をつける。筒部内外面ロクロナデ調整を施す。体部下半はヘラケズリを行いその後ナデで仕上げる。(44)は、口径12.0cmを測る。「ハ」字状の肩部とやや稜をもち体部につづく。口縁部はやや外方に立ち上る。内外面ロクロナデ調整を施し、底部から一気に引き上げて成形している。やや直立気味の口縁部をもつ(47)もみられた。(46)は、口径7.2cmを測る短頸壺と思われる。内外面ロクロナデ調整を施し、器壁は薄いが硬質に焼成される。

甕(48)は、口縁部のみで口径50.0cmを測る大形の甕である。体部は破片のみの出土であるが、やや張り気味の肩部より倒卵形の体部からなる。口縁部端部は外方に肥厚させ、外側と上端に平坦面をつける。口縁部内面下半に、横方向の不規則なハケメをつける。肩部内面には同心円文がみられる。

11. 下坂第2土坑出土遺物(第48図、図版41)

第2土坑の出土遺物は、蓋B、蓋C、杯B、椀A、皿A、鉢、壺がみられた。

蓋BⅡ(3)は、口径16.6cmを測り、つまみを欠失する。天井部笠形を呈し、縁端部は折り曲げ丸くおわる。

蓋CⅡ(1・2)は、口径15.1~16.0cm、器高1.5~2.0cm内外を測る。(2)はつまみ部を欠損する。平坦な頂部より縁部につづく。縁端部は折り曲げた後(1)は丸くおわり、(2)は断面三角形を呈しやや尖り気味である。(1)の頂部中央に平坦なつまみをつける。内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデを行う。

杯BⅡ(5・6)は、口径13.6~13.8cm、器高3.2~4.1cmを測る。口縁部の開く器形である。(5)は平坦な底部よりなだらかに口縁部につづき、やや屈曲気味に斜め上方に立ちあがる口縁部端部からなる。底部の屈曲部に断面三角形を呈する高台をつける。底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。(6)は、やや直立気味の口縁部をもつ。高台は断面台形を呈する。底部外面はヘラ切り無調整である。

碗A(4)は、口径12.9cm、器高3.7cmを測る。平坦な底部より内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、端部は丸い。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切り後ナデ。

皿AⅡ(7)は、口径16.2cm、器高2.5cmを測る。やや上げ底を呈す平坦な底部より内湾気味に斜め上方に短く立ち上る口縁部からなる。端部は丸くおわる。内外面ロクロナデ調整を施し、底部外面はヘラ切りの後ナデで仕上げる。

鉢は2種みられた。(8)は通常鉄鉢形土器と呼ばれるもので、口径30.4cmを測る。内湾気味の口縁部より丸い体部につづく。体部外面下半は横方向にヘラケズリを行いナデで仕上げる。(9)は摺鉢と思われる。底部は欠損する。内外面ロクロナデを施し、暗赤色を呈す。

壺は3種出土した。(10)は、口径19.9cmを測る。なだらかな肩部より短く内方に立ち上る頸部から外反する口縁部につづく。体部に口縁部を装着した二段構成をとる。口縁部頸部内外面ロクロナデを施し、肩部内外面タタキを施す。内面は青海波文がみられる。(11)は、張った肩部と稜をもつ長頸壺である。筒部中央部に浅い凹線を1条めぐらす。底部の屈曲部に断面台形の高台をつける。肩部は角ばり稜上面に浅い凹線をめぐらす。口縁部頸部の内外面ロクロナデを行い。底部外面はヘラ切り後ナデで仕上げる。(12)は小形の短頸壺と思われる。底部外面ヘラ切りの後ナデを行い高台はつけない。肩部は角張る。

12. 下坂第3・4土坑出土遺物(第49・50図、図版41~42)

第3・4土坑は、第2土坑とともに下坂4号窯の関連遺構で、蓋A、蓋B、蓋C、杯A、杯B、碗A、皿A、壺、甕などとともに円面碗の出土をみた。

蓋A(2・4~6・22)は、口径15.6~18.7cm、器高2.0~2.9cmを測る。平坦な頂部と屈曲する縁部からなり、縁端部は折り曲げる。頂部中央部に平坦なつまみをつける。(4・5)は中央部のやや盛り上る宝珠形つまみをつける。(4~6)の縁端部は丸くおさめ、他は屈曲して外方につまみ出す。

蓋BⅡ(1・3)は、口径16.1~16.5cm、器高2.7~3.7cmを測る。天井部笠形を呈し、なだらかに縁部につづく。縁端部は折り曲げた後屈曲して外方につまみ出す。頂部中央部に、くぼみをつけたつまみをつける。

蓋は内外面ロクロナデ調整を施し、頂部はヘラケズリの後ナデで仕上げる。(6)の頂部は、回転糸切りの痕跡がみられる。

杯AⅠ(10・12)は、口径13.5~15.0cm、器高3.4~3.6cmを測る。口縁部の開く器形で、(10)はやや内湾気味に開き、口縁端部外反し丸い。底部外面は回転糸切り。(11)は、平坦な底部より外反する口縁部をもつ。内外面ロクロナデ調整を行い、(11)の底部外面はヘラ切りの後ナデで仕上げる。

杯BⅡ(14~16・18~20・23)は、口径14.5~15.7cm、器高3.5~4.4cmを測る。整形手法によってa(23)、b(14・16・18~20)、c(15)に分けられる。外反気味に口縁部の開く器形で、底部屈曲部に高台をつける。(15)は断面三角形を呈し、他のものは断面台形の高台をつける。内外面ロクロナデ調整を施す。

皿AⅡ(17)は、口径15.5cm、器高2.2cmを測る。平坦な底部よりなだらかに口縁部につづき屈曲して外反する口縁端部からなる。内外面ロクロナデを行い、底部外面はヘラ切りの後ナデで仕上げる。

椀A(8・11・13)は、口径14.4~15.3cm、器高3.2~4.5cmを測る。平坦な底部より内湾気味に立ち上る口縁部からなる。(8)はやや深めの器形で口縁端部を内向させたのち端部を外方につまみ出す。内外面ロクロナデ調整を行い、底部外面は回転糸切り。(11・13)は、浅めの器形である。底部外面はヘラ切りの後ナデを行う。

壺(26)は、丸い体部と外傾気味の短い口縁部からなる。体部に口縁部を接続した二段構成である。口径12.2cmを測り、内外面ロクロナデを行う。(27)は、やや張り気味の肩部より外反する口縁部からなる。体部より一気に引き上げて成形する。内外面ロクロナデ調整を施し、口縁端部は丸くおわる。(27)は小形の壺で体部のみの破片である。やや胴の張る丸い体部で外反する口縁部につづく。内外面ロクロナデ調整を施す。(31)は、口径14.8cmを測る広口壺で、肩部が張り稜をもつ。底部は欠損するが、ふんばった高台がつくと思われる。口縁端部は、外反し端部をつまみ上げて平坦面をつける。

甕(25)は、口径12.0cmを測る横瓶である。張り気味の肩部より外反する口縁部からなる。口縁部内外面ロクロナデを行い、体部外面タタキメを施し、内面は青海波を残す。(24)は、口径19.8cmを測る。やや張り気味の肩部より外反する口縁部につづく。口縁端部は丸い。口縁部内外面ロクロナデを行い、肩部内外面タタキメを残す。内面は青海波タタキである。(29)は、口径20.0cmを測る。張り気味の肩部と外反する口縁部からなる。口縁端部は肥厚し、端部はフラットである。口縁部内外面ロクロナデを行い、肩部外面平行タタキ、

内面は同心円文をナデ消している。

円形硯(30)は、口径14.7cm、器高4.3cmを測る。杯の口縁部上面を硯面で遮蔽したもので、杯円形硯と呼ばれるものである。陸の周囲に浅い溝状の海を有する。外堤は断面三角形を呈する。杯部外面下半はヘラケズリの後ナデを行って仕上げている。

13. 掘立柱建物跡、表採、試掘トレンチ出土遺物(第51図、図版43)

掘立柱建物跡の出土遺物は、その覆土中より蓋C、杯Bを図示した。

蓋CⅡ(1・2)は、口径13.6~13.8cm、器高2.1cmを測る。平坦な頂部よりなだらかに縁部につづく。縁端部は折り曲げた後丸くおわる。内外面口ロナデを行い、頂部は回転糸切りによる。頂部中央部に宝珠つまみをつける。

杯BⅡ(3・4)は、口径13.6~14.8cm、器高3.5~5.0cmを測る。(3)は深い器形で、口縁部はやや内湾気味に斜め上方に立ち上る。(4)はやや浅めの器形で、外反する口縁部を有し端部はやや尖り気味におわる。内外面口ロナデ調整を行い、底部切り離しは回転糸切りによる。底部屈曲部に断面台形の高台をつける。

(5)は、G地区の表採遺物である。口径29.3cmを測る。体部は逆「ハ」字状を呈し、口縁部の肥厚する摺鉢である。体部内面に12条を数えるカキ目を施す。内外面赤褐色を呈す。

(6)は、D地区窯状遺構より出土したもので、甕の口縁部と思われる。復元口径20.4cmを測り、内外面ヨコナデがみられる。

(7)は、H地区遺構面の直下より出土したもので、土師器甕の口縁である。いわゆる複合口縁を呈し、内外面ヨコナデを行う。稜はシャープ。復元口径15.2cmを測る。

(8)は、F地区第8トレンチの表土下層より出土したもので、土師器甕である。丸底の底部よりやや内湾気味に立ち上る体部へつづき、口縁部は外反する。体部内面は時計回りにヘラケズリを行う。底部内面には指頭圧痕を残す。口縁部内外面はヨコナデ。体部上半は縦方向にハケメを施し、体部下半および底部外面は不規則なヨコハケを行う。

14. 下坂窯跡群出土、ヘラ記号・糸切り底(第52図)

下坂窯跡群出土遺物の中でヘラ記号を有する遺物が若干知られた。ヘラ記号は、蓋の外面上につけたもの(1~3)、内面につける(4・5)のもの他、口縁部外面につけるもの(5)や杯底部外面にみられた(7~9)。記号は「人」字状を呈するもの(1・2)。「ノ」状あるいは「\」状につけられ(3・5・9)たもの。「X」状のもの(4・6~8)がみられた。

底部切り離しの際、回転糸切りを行ったものは、杯A、杯B、椀にみられた。回転糸切り底を有するものは、下坂1~3号窯およびこれらの関連遺構より出土している。下坂1号窯より(13)、同2号窯より(14・15・20)、整地面覆土より(18)、同2・3号窯北側盛土より(12)、同3号窯より(10・11・16~19)がみられた。糸切り法は、2種に分けられる。

分類の基準はここでは「山田窯跡群」^{註1}の分類基準に従って行う。

山田Aタイプ……両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、左手を固定する場合には手前より前方右手を押しぎみに切り、前方より手前へ切る場合は右手を固定し、左手で引き切る方法で、ロクロの回転速度は早い。糸切り文様は「**㊦**」状の放物線を描く。

下坂窯跡群出土のものでは(10・13~20)が該当する。

山田Cタイプ……両手で糸を張り、粘土塊にかけたのち、粘土切り離しの最終に際して右手で引っ張り、左手の糸を離す。糸を引く際やや下げ気味に引く。糸切り文様は「**㊦**」状を呈す。

下坂窯跡群出土のものは(11・12)が該当する。

以上の離し糸切り方法を、下坂窯跡群出土遺物のうち凶化したもので検討した結果、「山田Aタイプ」のものはすべて杯A、杯Bの器種に用いられ、杯Aは1点のみである。「山田Cタイプ」の器種は碗A、と小形の壺にみられた。

15. 下坂窯跡群出土土製品 (第54図、図版44)

下坂窯跡群より出土した土製品は、獣脚・土馬などである。

獣脚は、すべて須恵質を呈し瓦質のものはみられない。1号窯周辺の灰原より(1~6)がみられ、2号窯灰原より(7)がある。窯体からの出土はみないが、3号窯窯体埋土より(13)、3号窯窯体盛土より(15)の出土をみた。整地面覆土および2・3号窯盛土中より(8~11・14)をみる。(16)は、第2土坑埋土の出土である。計15個体で10種類がみられた。これを形態で分類し、A類(1・4・5・10・11・13・16)とB類(2・3・6~9・14・15)に大別した。さらに細分し、A類Ⅰ(1)、A類Ⅱ(4・5・11)、A類Ⅲ(10・13・16)、B類Ⅰ(7・9)、B類Ⅱ(3・6・8)、B類Ⅲ(15)、B類Ⅳ(14)、B類Ⅴ(2)とする。

A類Ⅰ：(1)は、脚端部外側に3ヶ所刻み目を入れ、内側にも1ヶ所「V」字状に刻みをつける。脚部より上端にかけてゆるやかなカーブをつけ、獣形の蹄をリアルに表現する。脚上端は斜めに傾き37°を測る。

A類Ⅱ：(4・5・11)の脚端部は比較的高くつくり、外側に5条の溝で蹄を表す。(5)は脚上端に器壁を付着させた状態で出土した。脚上端はいずれも傾斜し(4)は33°、(5)は50°を測る。(11)は上端部を尺損するが、第33図(20)の壺の底部につけられたものと考えられる。

A類Ⅲ：(10・13・16)は、Ⅰ類Bと形態が似ている。脚端部には刻みをつけず、5面の面取りを行う。上端の傾斜は(10)は35°、(13)は43°、(16)は40°を測る。

B類Ⅰ：(7・9)は、脚端部は低く角ばっている。端部外側に3~4条の刻みを入れる。脚部は直立し、上端部は傾斜し(7)は41°、(9)は50°を測る。

B類Ⅱ：(3・6・8)は、脚端部に刻みをつけない。脚端部丸い(6・8)ものと角張る(3)がみられる。脚部は(3・6)が直立気味で、(8)は斜めに傾く。上端は傾斜し(3)は40°、(6)は30°、(8)は50°を測る。(6)は硯の脚と思われる。

B類Ⅲ：(15)は、脚上端部が本体底部より剝離した状態を示し、底部の角度が133°をとる盤の脚部に用いられたと思われる。脚部は、底部の内方に内湾したのち端部を外方にふんばった形をとる。脚部中央部に突起をつける。脚部外面は、ヘラケズリによって細かく面取りし、内側はナデで仕上げている。

B類Ⅳ：(14)は、斜めに傾く脚部を呈し、脚端部の外側をカットする。全体をヘラケズリで仕上げる。上端部の傾斜は38°を測る。

B類Ⅴ：(2)は、下坂窯群出土の獣脚の中では一番雑な仕上りをみせる。平たくのぼした粘土板を丸く折り込んでつくる。脚端部下面は回し気味にヘラケズリし、端部を成形する。脚部はナデで整える。ここでは獣脚としてとらえたが、土馬の脚あるいは把手とも考えられる。

土馬(17)は、3号窯構築時に伴い窯体北側に行われた盛土中より出土した。全長13.6cm、高さ8.8cmを測る。片側の前後の脚を欠失する。尾は欠損している。焼成はやや軟質である。頭部は、目を粘土を貼りつけ表現し、鼻孔・口は、刺突、刻みを入れ表現する。頸部上端は薄く立ち上がらせ、たてがみを線刻によって表現している。体部・脚部はナデで仕上げる。尿道・肛門を直径3~4mm、深さ8~16mmの穴で表現する。

16. 下坂窯跡群出土遺物・瓦(第55~58図、図版45・46)

下坂窯跡群より出土をみた瓦は、すべて平瓦で三種類知られた。凸面に格子目タタキ、縄目タタキを有するものとタタキを施さないもの三種で、凹面はすべて布目をつける。凸面に格子目タタキを施すものをA類、縄目タタキを残すものB類、そしてナデを行って仕上げるものをC類として分類することとした。

A類：(1~15)、出土した平瓦の中でもっとも多い部類で、完形品はみられずすべて破片での出土であった。破断面に自然釉のかかるものが多くみられ、焼台として用いられたと考えられる。(1・6・11・13・14)は、凸面に一辺7~10mmを中心とする斜格子の叩き目をもつ平瓦である。灰色もしくは暗灰色の色調を呈する。(1)の凹面には、布の縦じ合せ痕が明瞭に残る。(6・14)の凹面には、梓板痕が明瞭に残り、桶巻作りによるものであることを物語る。(14)の凹面には、縦方向にナデの痕跡を残す。(2~5・7~10・12・15)の凸面には、一辺6~8mm、8~11mmを測る正格子の叩き目を残す平瓦である。灰色もしくは暗灰色を呈した色調を主体とし、黄褐色を呈する未焼成品もみられる。(10)は梓板痕を残す。(8・9・14・15)は、凹面に縦方向に3~4条のナデ痕を明瞭に残す。

B類：(23~36)、出土した点数はA類に次ぐ。凸面に、縄を叩板に巻きつけた後叩板と

したものを使用する。A類に比べて薄手である。すべて平瓦で(25・36)は隅切り瓦である。(24)は、粘土板2枚を張り合せて成形している。

C類：(16~22)、B類と同様薄手の平瓦である。凹面には縄目を残すが、凸面は縦方向にナデで仕上げている。(17)は凸面に縄目を残すが、2次焼成による歪みが考えられる。

(19)の凹面端部にヘラ切り痕が残り、粘土円板をカットする際に残されたものと考えられる。

第5章 まとめにかえて

第1節 下坂窯跡群出土遺物について

下坂川荒廃砂防工事に伴う下坂窯跡群の発掘調査によって、4基の窯体構造およびこれらの関連遺構からの出土遺物が明らかになった。ここでは、調査によって明らかになった各窯出土遺物と関連遺構の出土遺物を検討してみたい。

下坂窯跡群の出土遺物は、コンテナ約80箱の量で、整理を行い図化したのは354個体である。このうち、蓋・杯・椀・皿などの供膳用の土器が約76%を占める。3号窯では約88%を占め、4号窯でも約87%と圧倒的に供膳用土器の占める割合が強いことが知られた。

下坂窯跡群の発掘調査で良好な一括資料が出土した窯が3~4基、これに関連した遺構9箇所をかぞえる。これらの遺構より出土した遺物より類推すると、下坂4号窯・第2土坑・第4土坑→下坂1号窯灰原→下坂3号窯・整地面・第3土坑・掘立柱建物→下坂2・3号窯盛土中→下坂2号窯→下坂1号窯という前後関係が考えられる。杯・椀・皿などの底部切り離しに際し下坂4号窯・第2土坑・第4土坑・下坂1号窯灰原では、ヘラ切りの後ナデを行い、ヘラ切り未調整のものもみられた。これに対し以降の遺構の出土遺物は、ヘラ切りの後ナデを行うものが多くみられたが、回転米切りのものが現われてきている。

下坂4号窯は、2期の操業時期が知られ、熱残留磁気測定の結果、下層670±50年、上層670±30年の年代が与えられている。4号窯より出土した蓋Bのうち、縁端部内面に「かえり」を残すものが4点みられる。笠形の天井部をなし、頂部よりなだらかに縁部につづく。「かえり」は、短く端部に申し訳程度に付されている状態で、その断面は三角形を呈している。上層より出土した蓋杯(第45図9・10)は、床面にセットされた状態で検出された。蓋の内面のかえりは消失している。やや丸味をおびた天井部は高く、頂部中央に扁平なつまみを付す。縁端部を内方に折り曲げ、杯身の外縁に固定させる効果を与えている。

杯身は高台を伴うものと伴わないものの二者があり、後者は本書においては椀として取り扱っている。高台を伴う杯Bは、口縁部が外反する器形からなり、高台は底部屈曲部よ

りわずかに内側に貼付ける。後者の椀は、内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、端部を丸く仕上げる。

壺は、長頸壺・短頸壺・平瓶・肩瓶がみられた。長頸壺は横部が張り稜をもつものと、肩部のなだらかなものがみられる。底部の屈曲部の内側に高台を貼りつける。短頸壺の口縁は外反するものとやや直立気味のものみられる。横瓶の口縁部はやや直立気味である。平瓶は肩部のみの出土であり全体は観察不能であるが、肩部に浅い凹線をめぐらす。

甕は大形品もみられた。口縁部のみを図示であるが、口縁部内面下半にハケメを残す。体部外面にみる叩きは平行叩きが大半で、その上にカキメを施す。内面は同心円、円弧の叩きで、一部にスリケシ調整を施したものがみられ、この外面は平行叩きを凹線で区切っており、把手あるいは獣脚の剥離痕を残す。

次段階に、1号窯灰原出土物が掲げられる。この灰原は、上層に整地（盛土）層がみられ、その上に1号窯及び道状遺構が構築されている。

蓋は、前段階と同じく天井部に丸みを持ち、頂部中央に凹みをつけた扁平なつまみを付す。とくに蓋全体の器高が高い。内面のかえりは全くみられず、端部を内方へ屈曲させている。頂部はヘラケズリの後ナデを行っている。

杯身は、外反する口縁部からなり、底部屈曲部の内方に高台を貼りつける。口縁端部は丸く仕上げ、S字状を呈するものがみられる。高台を付さない杯身も若干みられたが小形品である。椀は内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、端部を外反させるものもみられた。杯Aの底部は、ヘラ切り未調整で、杯Bはヘラ切りの後ナデ調整を行っている。

皿は大小二種みられる。口縁部がゆるやかに外反し、端部を丸く仕上げるものと平坦面をなすものがみられた。底部はヘラケズリの後ナデで仕上げている。

表2 下坂窯跡群出土、蓋・杯・椀分類表(単位cm)

器種	分類	法	量	器種	分類	法	量
蓋	A	口 径	14.9 ~ 18.7	杯	A I	口 径	12.6 ~ 15.6
		器 高	1.5 ~ 2.8			器 高	3.3 ~ 4.8
	B I	口 径	17.0 ~ 19.5		A II	口 径	9.4 ~ 10.6
蓋		器 高	2.9 ~ 4.0		器 高	2.1 ~ 3.2	
	B II	口 径	14.8 ~ 16.6	杯	B I	口 径	18.5 ~ 20.3
		器 高	2.3 ~ 3.9			器 高	4.6 ~ 7.3
B III	口 径	6.4 ~ 13.6	B II		口 径	11.1 ~ 17.0	
蓋		器 高	2.4 ~ 3.8		器 高	2.9 ~ 5.4	
	C I	口 径	23.8 ~ 24.8	杯	B III	口 径	7.0
		器 高	1.7 ~ 2.3			器 高	2.2
C II	口 径	13.6 ~ 18.9	A		口 径	12.0 ~ 15.6	
	器 高	1.5 ~ 2.4	椀		器 高	2.9 ~ 4.5	
C III	口 径	8.5		C	口 径	12.0 ~ 14.4	
	器 高	2.6			器 高	3.6 ~ 5.0	

表3 下坂窯跡群出土遺物集計表(蓋・杯・椀)

遺構名	器形	個体数	総数	比率	遺構名	器形	個体数	総数	比率		
1号窯	蓋A	1	16	6%	2・3号窯 南側盛土	蓋A	2	19	11%		
	B I	1		5%		B II	1		5%		
	B II	3		19%		B III	1		5%		
	杯B II	7		44%		C II	1		5%		
	椀A	3		19%		杯A I	3		16%		
C	1	6%	B II	8		42%					
1号窯 灰原	蓋A	2	26	8%		椀A	1		10	5%	100%
	B I	2		8%		C	2			11%	
	B II	3		11%		椀A	1			10%	
	C II	1		4%		B I	1			10%	
	杯A I	2		8%	B II	1	10%				
	A II	2		8%							
	B II	10		38%							
	椀A	3		11%							
	C	1		4%							
2号窯	蓋C II	6	13	46%	4号窯	蓋A	3	40	8%		
	杯B II	6		46%		B I	1		2%		
	椀A	1		8%		B II	16		40%		
2号窯 灰原	蓋A	2	12	17%		杯B II	11		8	28%	100%
	B II	1		8%		B III	1			2%	
	C II	1		8%		椀A	6			15%	
	杯B II	8		67%		C	2			5%	
整地 面土	蓋A	3	17	18%		第2土坑	蓋B II		1	6	17%
	B II	2		12%			C II		2		33%
	C II	1		6%			杯B II		2		33%
	杯A I	1		6%	第3土坑	椀A	1	9	17%		
	B I	5		29%		蓋A	5		30%		
	B II	4		23%		B II	2		13%		
	椀A	1		6%		杯A II	2		13%		
3号窯	蓋B I	1	28	4%	第4土坑	蓋C II	1	5	20%		
	C II	3		10%		椀A	4		80%		
	杯A I	1		4%	掘立柱 建物	蓋C II	2	4	50%		
	B I	1		4%		杯B II	2		50%		
	B II	18		64%							
椀A	4	14%									
2・3号窯 北側盛土	蓋A	2	26	8%							
	B II	1		3%							
	B III	5		19%							
	C I	2		8%							
	C II	4		15%							
	杯A I	2		8%							
	B II	8		31%							
	椀A	2		8%							

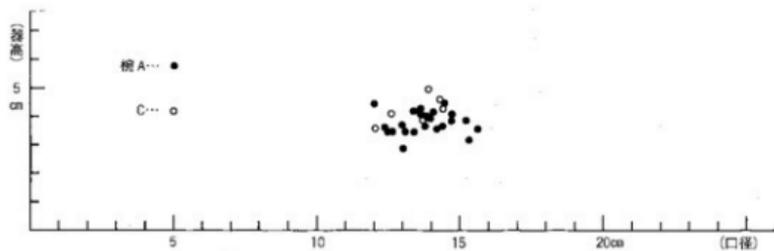
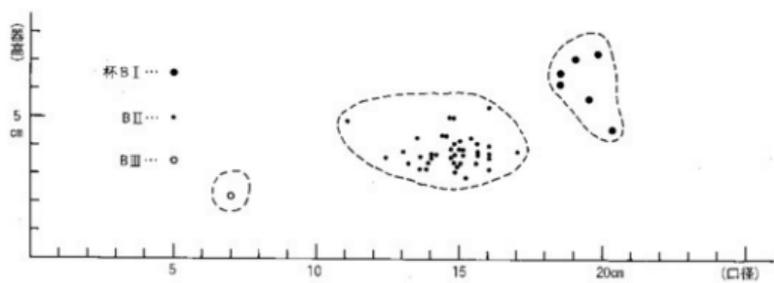
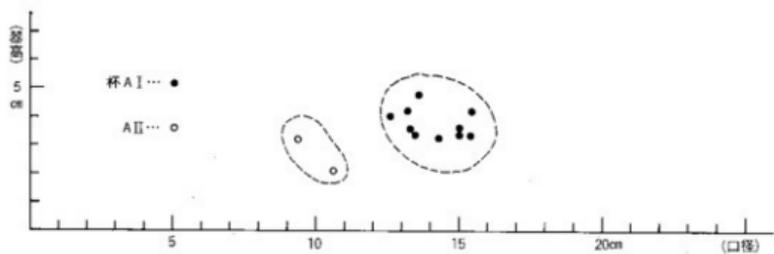
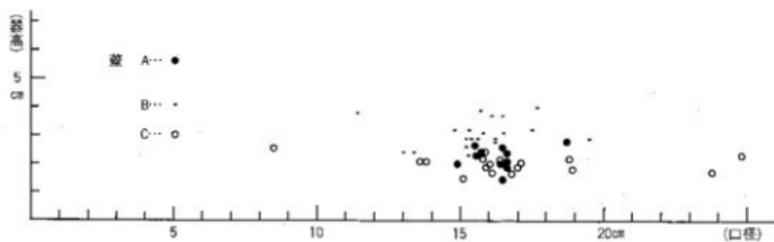


表 4 下坂窯跡群出土遺物法量比較表 (蓋·杯·碗)

壺は長頸壺・短頸壺がみられた。長頸壺の筒部は太く口縁部は外反する。肩部はなだらかで体部はソロバン玉状を呈する。底部屈曲部に、「ハ」字状にふんばった高台を付け、端部内面で接地する。

高杯がみられ、低脚のもの高い脚部を有するものがある。杯部は器高が比較的長く、皿状を呈するものが大半である。一部に器高が高いものがみられ、端部をわずかに外反させる。脚部は基部の細いものと太いものの二者がみられ、後者のものは低脚を呈する。「ハ」字状に開き端部を屈曲させるものと、内方に肥厚するものがみられる。前者は裾広がりで接地面で水平に外方にのび、端部をわずかに屈曲させる。

円面碗・圈足円形碗あるいは透脚円面碗とも呼ぶべきもので、外堤の外側に筆立て状の突起をめぐらす。脚端部は外側に肥厚させる。脚部中央に「十」字形の透しを入れる。陸部は中央部に盛り上がりみせる。海部の底は平坦で、外堤とは直角につながる。

下坂3号窯をはじめとする各種関連遺構の出土遺物が次の段階に位置するものと考えられる。順序としては、3号窯盛土→3号窯・整地面・第3土坑→整地面覆土→2号窯盛土となるが、時期の差は余りないと思われる。

蓋は、全体に前段階にみられたごとのふくらみが消え、天井部が低く平らになる傾向を示す。頂部中央には、中心部がやや盛り上がる擬宝珠様つまみが付きされるが器高は低い。

杯身は、高台を付すものが多く、口縁部外反しあるいはS字状を呈すハものに対しては字状に開く高台を貼りつける。直立気味あるいは斜め上方に開く口縁部を呈す杯身に対しては直立気味で断面四角形の高台が付けられている。

皿は、前段階でみる形態との差はほとんどみられないが、口径が小さくなり口縁部は丸く仕上げる。

壺は、広口壺が多くみられ、肩部の張るものには口頸部の比較的太いものがみられる。底部の屈曲部に外方にのびる高台を付す。これに対し肩部・体部ともに丸味をおびる壺は、口頸部の細い形をとり、直立気味に立ち上った後端部を外反させる。このタイプには高台を伴わない。その他、口縁部の短い短頸壺もみられ、体部倒卵形を呈するものの外面は平行叩きを施し、内面は円弧叩きに半スリケンを行っている。肩部張り気味の短頸部は、内外面口ロナデを施し、口縁部直立気味で直口壺とも呼ぶべきものである。底部には高台を伴わないと考えられる。これらの短頸壺を擬したと思われる小形壺も多くみられた。

甕は、肩部がハ字状に広がりで下りの体部を呈する。口縁部は頸部より屈曲して外反する。体部外面は平行叩き、内面は同心円状、円弧叩きを明瞭に残す。横瓶の外面は、格子叩きが施されその上にカキメを残す。内面は円弧叩きを施し内側は、それをスリ消している。

碗は2点みられた。圈足円形碗(第38図31)は、脚部を欠失する。陸部と海部の区別はない。高台を付した皿とも考えられるが、本窯跡群では高台付皿の出土がみられなかった

ことと、底部平坦面の器厚が厚いことや整形手法によって硯としてた。杯円形硯(第46図30)は、杯の口縁部を硯面で遮蔽したもので、わずかながら海部を有する。

下坂2号窯は、3号窯の焼成部床面を切って構築された窯跡である。3号窯の焼成部より下方は盛土を行って前庭部・作業面としている。熱残留磁気測定の結果、2号窯と3号窯の間には時間的な差は余りみられないが、2号窯構築に際し3号窯を破壊し、盛土を行って窯体の体裁を整えていることから、3号窯の次段階に位置づけてよからう。

この段階に位置づけられる遺構は、下坂2号窯、掘立柱建物跡、下坂1号窯埋土中の遺物と考えたい。1号窯は窯体を廃棄後に破壊を受けており、埋土中の遺物は、斜面上方に立地すると考えられる窯跡の遺物と思われる。

蓋は、前段階までに比して器高が低くなり、ほぼ水平気味の頂部より水平に縁端部につづくものと、縁端部が屈曲するものが主流を占める。縁端部は下方に折り曲げる。頸部中央に平坦な擬宝珠様つまみを付す。つまみの中央はややふくらみをもつものと平坦なものがみられる。

杯身は全体に浅く、口縁部は外反し端部丸く仕上げる。底部屈曲部にハ字状に開く高台を貼りつける。高台を伴わない杯身は全て碗である。底部内面に平坦面をもたず、内湾気味に立ち上る口縁部からなる。

皿は、形態的には前段階との差はみられないが、口縁端部をカットして尖り気味のものがみられる。口径にも大小がみられる。

壺は、いずれも底部に高台を伴わない。丸味をおびた体部のものには外傾気味の口縁部をつける。肩部の張る壺は2種あり、肩部の端部と中央部に浅い凹線をめぐらすものと、肩部端部を浅い凹線でめぐらした後、4ヶ所に穴を穿ったものがある。後者は短く直立した口頸部をもち端部を外方に肥厚させる。また、体部下半に斜めにナデ痕がみられ、底部の一部に粘土の盛り上がりが見られることにより、獣脚を伴う壺と思われる。ナデ痕と粘土盛り上りの位置から考えて三足壺であると思われる。

甕は大形品で、体部外面は平行叩きの後カキメを施す。内面は同心円弧叩きを施す。

これらの各窯・関連遺構出土遺物を検討した結果、大雑把にⅠ～Ⅴ期に区分してきた。

Ⅰ期とⅡ期を分ける基準としたのは、Ⅰ期の蓋内面にみられる「かえり」が、Ⅱ期では消失することによる。これは、熱残留磁気測定による結果と「陶器窯跡群」^{註3}を中心とする編年の画期と符合する。下坂4号窯の窯体床面も、Ⅱ期に入る時点で床面の作り直しをしていることでも裏づけられる。床面に砂などを入れて作業に備えるのではなく、盛土を行い窯壁をⅠ期の地山を利用した壁にスサ入り粘土を貼りつけて窯体の体裁を整えていることから、製品および窯体の画期を感じとることができる。

Ⅱ期とⅢ期の区分は、Ⅱ期で形成された灰原を切って1号窯灰原下層が堆積しているこ

とによる。Ⅲ期に入ると、Ⅰ・Ⅱ期に比較して器種に多様さが出ている点にもある。Ⅱ期までにみられない。特殊な硯の出現がある。この硯はⅣ期以降にはみられない。

Ⅲ期とⅣ期は、それぞれ形成された土層の重複関係で判断している。また、Ⅳ期以降では、杯・碗・皿などの底部切り離しに際し回転米切りの手法が現われている。3号窯出土遺物の中で、蓋にかえりを有するものが1点みられたが、混入品と思われる。

Ⅳ期とⅤ期は、前述した如く3号窯と2号窯の構築順による。熱残留磁気測定の結果、時期差が余りみられなかったが、これは床面の一部が接触しているために表われたものと考えられるが、少くとも一窯式の差を考えたい。

各期の年代は、遺物の検討と熱残留磁気測定の結果により、Ⅰ期：下坂4号窯下層は7世紀中葉、Ⅱ期：下坂4号窯上層・第2・第4土坑は7世紀後葉、Ⅲ期：下坂1号窯下層灰原は7世紀末葉、Ⅳ期：下坂3号窯・整地面・第3土坑・下坂2～3号窯盛土・整地面覆土は7世紀末葉～8世紀初頭、Ⅴ期：下坂2号窯・掘立柱建物跡・下坂1号窯埋土は8世紀初頭～8世紀中頃と考えられる。

第2節 下坂窯跡群の窯体構造について

下坂窯跡群では、4基の半地下式害窯とこれに関連する遺構の調査を行った。

各窯は丘陵東側斜面に位置し、狭い地域に集中して立地している。これは、最も焼成に適した一定方向の風を受け入れるため、大地谷の谷あいの地形を考慮したものと考えられる。ここでは特に、下坂2～4号窯の窯体構造をみてみたい。

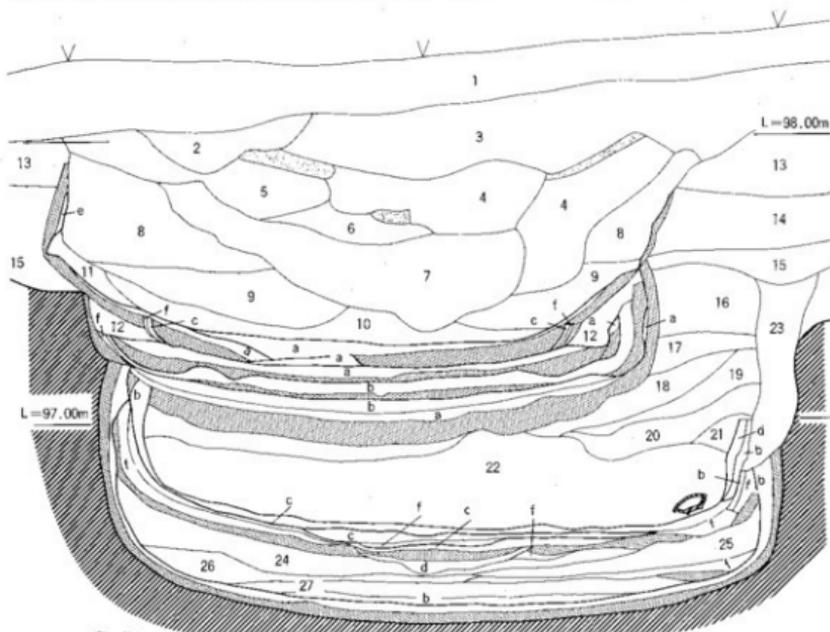
下坂窯跡群編年(案)

時 期	遺 構 名	熱残留磁気年代	年 代	陶器編年(註4)	田辺編年(註5)
Ⅰ 期	下坂4号窯下層	A. D. 670±50	7 C中頃	Ⅲ型式3段階	TK-46
	下坂4号窯上層	A. D. 670±30			
Ⅱ 期	第2土坑		A. D. 670±30	7 C後半	
	第4土坑				
Ⅲ 期	下坂1号窯灰原下層			7 C末	
Ⅳ 期	下坂3号窯整地面	A. D. 700±20	7 C末 } 8 C初頭	Ⅳ型式2段階	MT-21
	第3土坑				
Ⅴ 期	下坂2・3号窯盛土	A. D. 680±30	8 C初頭 } 8 C中頃	Ⅳ型式3段階	
	下坂2号窯掘立柱建物跡				
	下坂1号窯埋土				

下坂2～4号窯は、丘陵斜面の一角に位置し、同一地点において窯体の主軸をほとんど変えることなく重複して窯体が構築されていることが知られた。

各窯とも、調査地区に制限があったため燃焼部より下方のみの調査であったため、窯体の全長は不明である。3号窯は焼成部の一部を検出することができた。以下最下層の下坂4号窯より窯体構造を概観してみたい。

下坂4号窯は、地山（花崗岩風化土）を「U」字形に掘り窪め窯体としている。床・窯壁には粘土の貼り付けはみられない。検出されたのは焚口部より燃焼部の下半部分で、燃焼部の幅は下層の床面で約2.15m、上層の床面は1.95mである。下層の床面は表土下約2mの位置にある。窯体南側の地山に窯壁が良好に遺存しており、窯壁の傾斜より類推して



窯体

- | | | | |
|------------|---------------|---------------------|------------------|
| a. 浅黄色 | 1. 暗褐色土(表土) | 10. 灰褐色土 | 19. 淡黄褐色粘質土 |
| b. オリーブ灰色 | 2. 暗褐灰色土 | 11. 褐灰色土 | 20. 淡褐色粘質土 |
| c. 青灰色 | 3. 黒褐色土 | 12. 明褐色粘質土 | 21. 明黄褐色土 |
| d. 暗灰色 | 4. 黒色土 | 13. 明褐色粘質土(焼土・炭を含む) | 22. 暗赤褐色砂質土(崩落土) |
| e. 明赤褐色 | 5. 淡赤褐色土 | 14. 明赤褐色土(焼土塊を含む) | 23. 褐色土 |
| f. 黒色(酸化層) | 6. 淡黄褐色土 | 15. 褐色粘質土 | 24. 明黄褐色粘質土 |
| | 7. 黒褐色土(やや砂質) | 16. 淡黄褐色粘質土 | 25. 明黄褐色土 |
| | 8. 淡黄色砂質土 | 17. 淡黄褐色粘質土 | 26. 灰褐色粘質土 |
| | 9. 暗灰黄色砂質土 | 18. 淡赤褐色粘質土 | 27. 淡黄褐色砂質土 |



第22図 下坂2・3・4号窯窯体断面図・1 (横断面)

燃焼部の天井部までは約1.5~1.7mあったと思われる。4号窯の床面は2期の床面が存在し、それぞれの床面には2~4回の作業を行ったと考えられる砂の堆積が認められる。上層の窯体は、窯壁にスサを混じた粘土が貼られ、窯体構築の手法に変化がみられる。

下坂3号窯は、4号窯上層の天井部を崩落させた後に生じた窪地に埋土（盛土）を行い、窯体の主軸を少し南に偏し構築している。この構築に際し、4号窯周辺にあった作業場をも埋めている。埋め土は、窯体だけではなく前庭部から灰原に到る部分にまで認められる。3号窯の焚口の位置は、各窯の中で最も低位に位置する。窯体南側は4号窯の側壁を削平して構築する。南側は地山をそのまま窯壁としている。また、この部分には横位置に焚口を追加している痕跡が認められ、その焚口の上方も地山を利用してはいた。床面および側壁には修復の痕跡が明瞭に残り、浅黄色あるいはオリブ灰色を呈した床面と、赤褐色の酸化層が交互に堆積しており4~5回の修復が認められる。最終段階では窯体の幅を減じていることが知られた。

下坂2号窯は、焚口の位置が最も高位に作られ、そのため3号窯の焼成部を削平して燃焼部が構築されていた。燃焼部の幅も広く、約2mを測る。2号窯も3号窯と同様、3号窯廃棄後、周囲に盛土を行い、主軸を変えることなく3号窯直上に構築している。2号窯周辺にみられる盛土は、3号窯のそれに比して広範囲にみられる。盛土を行うことによって、窯体を高位にとることを意図したと思われる。この場合、北は1号窯回り、南は第3土坑回りまでの広い範囲が、2号窯の範囲といえる。2号窯の前庭部より北東へ伸びる灰原は、2号窯の下方に盛土を行って作業面とした結果、灰の排出が困難で、斜面の傾斜がある北東方向に溝を設けて灰原としたと考えられる。

註1……「奈良国立文化財研究所学報」第15冊、1962の63ページの分類法に従った。

本書では、蓋A、B、Cを

蓋A……平坦な頂部より屈曲し縁部につづく。

蓋B……天井部笠形を呈し、頂部よりなだらかに縁部につづく。

蓋C……平坦な頂部と縁部からなる。

と類別した。杯・柄・皿の類別は、

A……底部が平底を呈す。

B……底部に貼付高台をもつ。

C……丸い底部をなす。

とし、底部切り離し法に差がみられたことにより、それぞれa・b・cを付した。

a……ヘラ切り未調整。

b……ヘラ切りの後ナデで仕上げる。

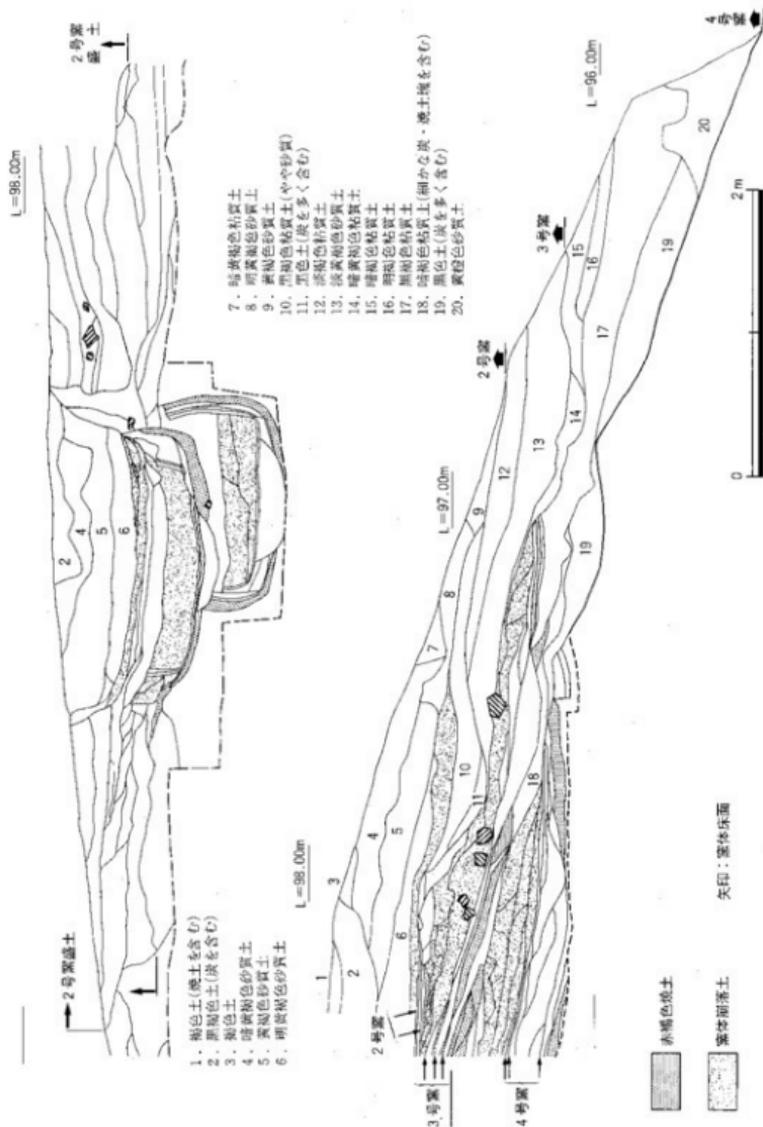
c……回転糸切りによる。

註2……中野知照『山田窯跡群』郡家町文化財報告9 郡家町教育委員会 1987

註3……中村浩他『陶色』I~IV・大阪府埋蔵文化財センター 1976~

註4……中村 浩『和泉陶器窯の研究』1981

註5……田辺昭三『須恵器大成』1981



第23図 下版2・3・4号溝体断面図・2

第6章 下坂窯跡群の熱残留磁気による年代決定

島根大学理学部 時枝克安 伊藤晴明

下坂遺跡（鳥取県郡家町下坂）から発掘された4基の須恵器窯について、熱残留磁気の方法を測定し、測定値を過去の地磁気永年変化と比較して、焼土の最終焼成年代を求めた。熱残留磁気による焼土の年代決定法については中島による解説^{註1}に詳しい。なお、1号窯と2号窯は少し離れた場所にあるが、3号窯は2号窯の下部に、4号窯はさらにその下部に位置する。熱残留磁気を測定するための定方位試料は、約5cm立方の焼土を石膏で固め、石膏面の方位をクリノコンパスで測定する方法を用いて採取した。試料の残留磁気の方法の測定には無定方位磁力計を用いている。

1. 測定結果

須恵器窯1号

この窯の床面は残り方も焼け具合もよくない。熱残留磁気測定用の試料として、31個の定方位試料を発掘面（窯体床面）に散見されるオリジナルな床面とおぼしき比較的焼けのよい場所から採取した。（この窯からは蓋杯等が出土し、考古学的年代は8世紀前半と推定されている。）図24に残留磁気の方法の測定結果を示す。4個の試料の残留磁気の方法は、磁性鉱物の不均質分布のために測定できていない。図から、残留磁気の方法が大きく分散しているのがわかる。ここで、他から飛び離れた結果は、試料を最終焼成後に動いた焼土から採取したためとして除外し、点線内の測定結果だけに注目しても、60%の試料について、残留磁気の方法が約70度にもなる。70度という値は、過去2000年間の西南日本における地磁気の方法最大伏角（約60度）を大きく越えている。したがって、点線内の結果をもたらした試料も最終焼成後に元の位置から動いたのに相違ない。以上の理由から、この窯の熱残留磁気の方法は窯の最終焼成時の地磁気の方法を正しく表しておらず、残念ながら、年代を求めることはできない。

須恵器窯2号

この窯の床面は厚さが約3cmにわたって焼けており、表面は赤茶色であるが、内部では灰色になっていた。また、この焼土の下部には多数の土器片や炭化物を含む層がある。熱残留磁気測定用の試料として、34個の定方位試料を発掘面（燃焼部床面）のよく焼けたところから採取した。（なお、この窯からは蓋杯等が出土しており、考古学的年代は8世紀前半と推定されている。）図24aに須恵器窯2号の残留磁気の方法の測定結果を示す。残留磁

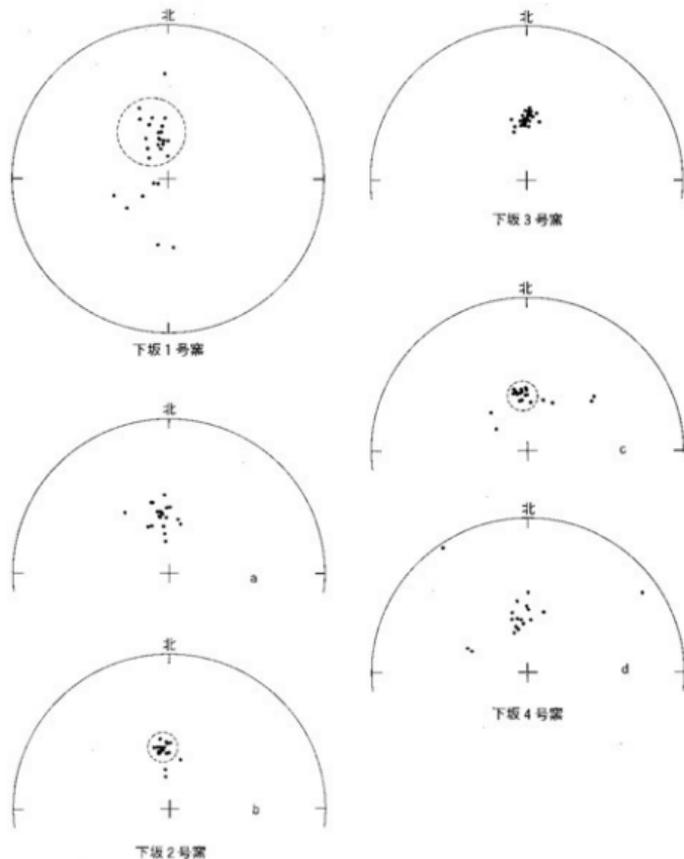
気の方向は1号ほど大きく分散していないが、方向の集中度は良いとは言えない。じつは、この窯の熱残留磁気の方向の測定結果には、誤差が目立って大きいものが含まれている。そこで、これらの誤差の多い結果を除外してみると、図24bに点線で囲んで示すように、3個の測定点を除いて、残留磁気の方向の集中度は大幅に改善される。このような大きい誤差を生じた原因は、焼土下部の脆弱な層、すなわち、土器片や炭化物を多量に含んだ層の局部的変形ではないかと考えている。図24bの点線の円内の結果について計算した平均値と誤差の目安となる数値を表5にまとめてある。

須恵器窯3号

この窯は2号窯の下(7~43)cmのところから出土した。床面の焼土は均質であり、厚さ約3cmにわたって灰色の還元色をおび固く焼き締まっている。熱残留磁気測定用の試料として、33個の定方位試料を床面の130cm×130cmの範囲から採取した。(なお、この窯からは蓋杯等が出土しており、考古学的年代は8世紀前半と推定されている。)図24に残留磁気の方向の測定結果を示す。方向の集中度は非常によい。したがって、これらの平均方向はこの窯の最終焼成時の地磁気の方向を示していると判断してよい。表5にすべての測定結果について計算した平均方向と誤差の目安となる数値をまとめてある。

須恵器窯4号

この窯は2号の下(5~60)cmのところから出土した。床の断面には、いくつかの層を観察できたが、その内、最上層と最下層について考古地磁気調査を行なった。これらの二層の表面の間隔は約20cmである。最上層の床面は比較的やわらかい黒褐色の均質な焼土であり、厚さは5~10cmである。残留磁気の方向を測定するために、窯の中軸にそって残されたアゼから24個の定方位試料を採取した。最下層の床面は地山(風化した花崗岩)の表面が赤茶色に焼けたものであり、焼けて赤変した厚みは約2cmと比較的薄い。この床面からは、中軸のアゼの両側から10個ずつ、計20個の定方位試料を採取した。(この窯からは蓋杯等が出土しており、考古学的年代は7世紀後半と推定されている。)図24c、24dに、それぞれ最上層、最下層の残留磁気の方向の測定結果を示す。最上層の2個の試料は整形中に壊れたため、また、最下層の2個の試料は磁性鉱物の非均質分布のために測定できていない。図から分るように、最上層については、点線で囲んで示すように、方向が飛び離れた試料を除外すると、残留磁気の方向の集中度は非常によくなる。しかし、最下層については、同様の手つづきを行っても、残留磁気の方向の収束は改善されない。じつは、最下層の試料の30%のものについて、残留磁気の方向の測定誤差が通常値に比べて異常に大きくなっている。この原因は、床面である焼けた花崗岩中の磁性鉱物粒子が比較的大きく、



第24図 下坂1・2・3・4号窯の残留磁気の方角図

その分布が均一でないために、残留磁気の方角の取束を悪化させているものと考えられる。表5に最上層と最下層の点線で囲んだ測定結果についての平均方向と誤差の目安となる数値をまとめている。

2. 考古地磁気年代

図25に下坂遺跡須恵器窯2～4号の熱残留磁気の平均方向と誤差の範囲を+印と点線の楕円で示す。曲線は広岡(1977)による過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化^{註2}である。考古地磁気年代を求めるには、地磁気永年変化曲線上に熱残留磁気の平均方向か

ら近い点を選び、その点の年代値を読み取ればよい。年代誤差も同様にして求めることができる。このようにして、それぞれの須恵器窯について考古地磁気年代を求めると次のようになる。なお、須恵器窯1号については、残留磁気の方向が分散すること、残留磁気の伏角が異常に大きいことから、考古地磁気年代を求めることができない。

須恵器窯2号	A.D. 680±30
須恵器窯3号	A.D. 700±20
須恵器窯4号(上層)	A.D. 670±30
(下層)	A.D. 670±50

3. 考 察

2号窯の平均方向は、地磁気永年変化曲線の突出した湾曲部の内側中央にあるため、永年変化曲線上で平均方向に近い点はA.D.640あたりとA.D.680あたりの二箇所あることになる。しかし、3号窯について、平均方向に近い点はA.D.700あたりの一点に定まり、また、2号窯は3号窯の上部に位置し、2号窯の方が新しいので、2号窯の考古地磁気年代値としてふさわしいのはA.D.680±30となる。両窯の年代の順序が逆転しているが、年代差は小さく、誤差を考慮すると納得できる範囲にある。このことから、2号窯の操業は、3号窯が廃棄されてからまもなくであると結論できる。

さて、これらの須恵器窯はしっかりした安定な地盤の上に構築されており、最終焼成後の窯体の傾動を示す地質学的特徴は観察されなかった。また、図25から分るように、2号窯、3号窯、4号窯最上層の残留磁気の方向はよくまとまり、また、それらの平均方向は地磁気永年変化曲線にうまく沿っている。さらに、これらの窯の考古地磁気年代値は窯体の位置の上下関係とも整合し、土器様式から推定された考古学的年代ともよく合っている。以上の理由から、この調査で得られた考古地磁気年代値は見掛けのものではなく、窯の実年代を表していると判断してよい。広岡による地磁気永年変化曲線の須恵器年代の部分は大阪南部の陶邑の考古地磁気調査に基づいている。最近、畿内から遠く離れると、例えば九州におけるように、地磁気永年変化の地域差による考古地磁気年代のずれが生じ、問題となっている。しかし、鳥取県は畿内から近いので、この原因による考古地磁気年代のずれはほとんどないと考えられる。実際、下坂遺跡の須恵器窯について、考古地磁気年代と考古学的年代がうまく整合することが、この推定を裏づけている。したがって、考古地磁気年代測定法は、焼土の簡便な年代測定法として、鳥取県の須恵器編年を進めるための有力な手段となるに相違ない。

最後に、試料採取にあたって便宜を図っていただいた郡家町教育委員会嘱託 中野知照

氏および郡家町教育委員会の皆様に心から感謝する。

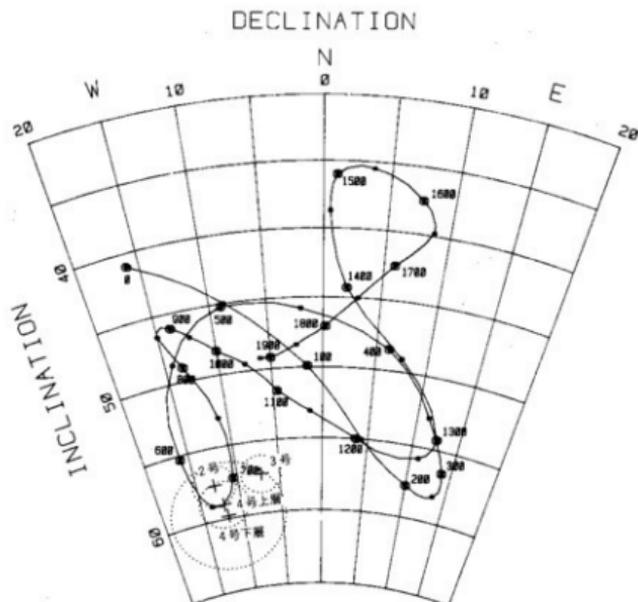
註1 中島正志、夏原信義 『考古地磁気年代推定法』、考古学ライブラリー9、ニューサイエンス社、1981

註2 広岡公夫 『考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向』、第四紀究、15巻、200-203、1977

表5 下坂遺跡須恵器窯の残留磁気の平均方向

	I m	D m	k	$\alpha 95$	N
須恵器窯2号	57.6	12.9W	657	1.4	17
須恵器窯3号	57.3	7.2W	379	1.3	33
須恵器窯4号(最上層)	59.0	12.2W	515	1.6	16
須恵器窯4号(最下層)	59.8	11.9W	117	3.7	14

I m : 平均伏角、D m : 平均偏角、k : Fisherの信頼度係数、 $\alpha 95$: 95%誤差角、N : 平均をとるのに採用した試料の数、測定結果の信頼性は、kが大きき $\alpha 95$ が小さいほどよい。



第25図 下坂3・4・5号窯の残留磁気の平均方向と広岡による過去2,000年間の西南日本における地磁気永年変化曲線

あ と が き

下坂窯跡群の調査では、考古学的な発掘調査と、自然科学の応用によるプロトン磁力探査、熱残留磁気測定を実施した。調査では、窯操業に伴う良好な一括資料を得ることができた。前者のプロトン磁力探査では、遺構の検出に際し重要な示唆を得た。熱残留磁気測定によって得られた年代は、出土した遺物の考古学的年代と比較検討を行うに際し重要な役割りを果たしたといえる。

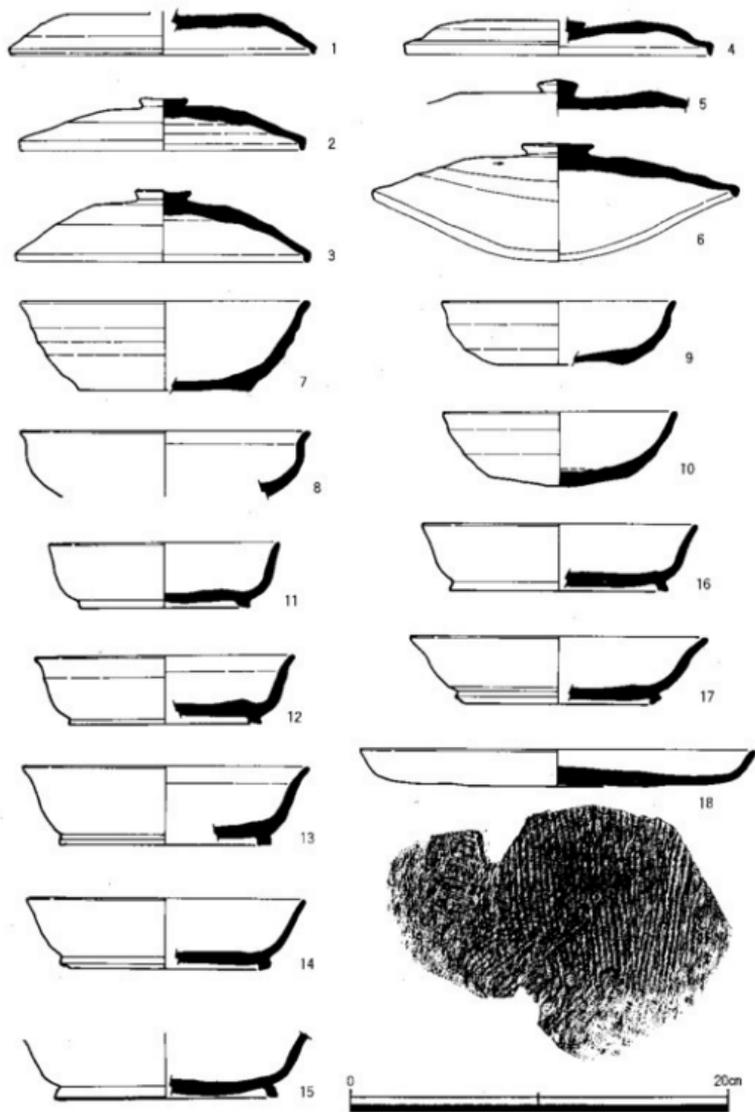
このように、自然科学分野の調査を行ったことで、発掘調査を効率的に行うことができ、かつまた窯の操業年代を推定することができたことは幸いであった。

従来、因幡地方における当該時期の須恵器の編年は、個々の器形の形態変化による編年作業が主であったといえる。下坂窯跡群の調査によって得られた年代を加味することにより、7世紀から8世紀にかけての須恵器の編年作業の一助を荷うことができるものと考えられる。

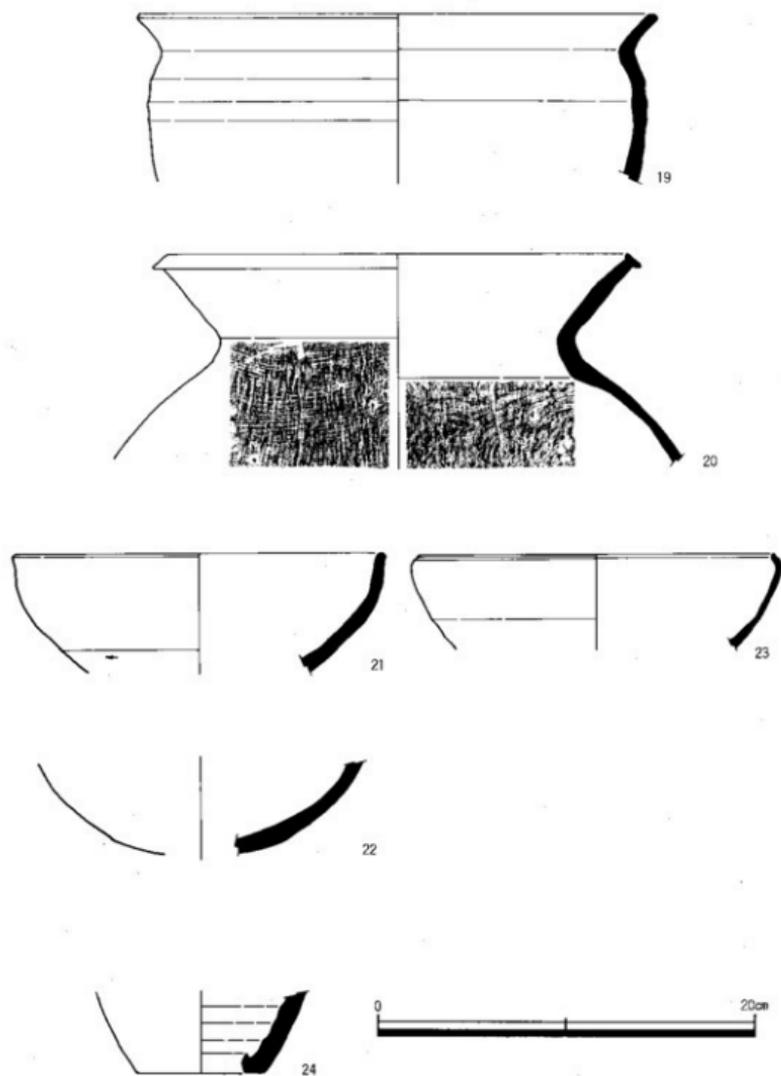
今回、整理作業の日程上行いえなかったが、下坂窯跡群をはじめとする私都古窯跡群の主たる消費地と考えられる八上郡衙、因幡国府あるいは当該時期の古墳などからの出土遺物との比較検討をすることが必要である。

供給地である窯跡の資料と、消費地出土遺物を検討することでより一層確固たる須恵器の編年が行えるといえる。

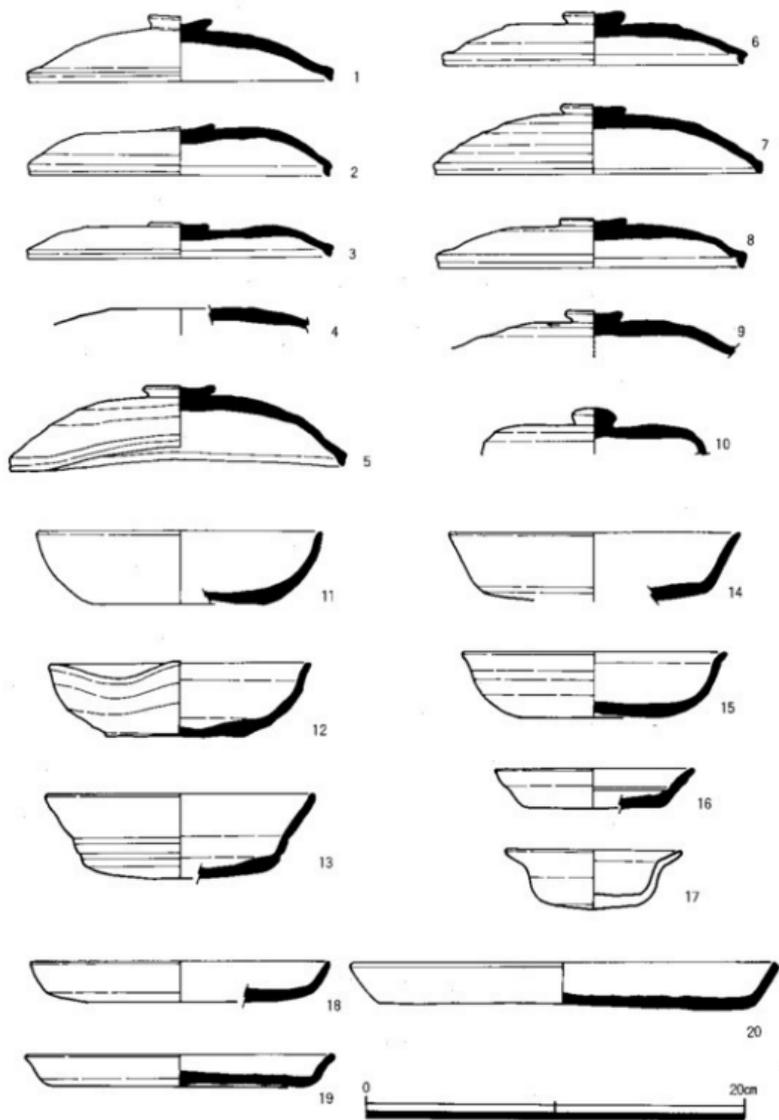
本報告では、出土した遺物の十分な検討を行えなかったが、今後窯跡の調査事例が増加することが予想され、向後の調査研究においての資料提供という点では十分な役割りを果たしたと考えている。



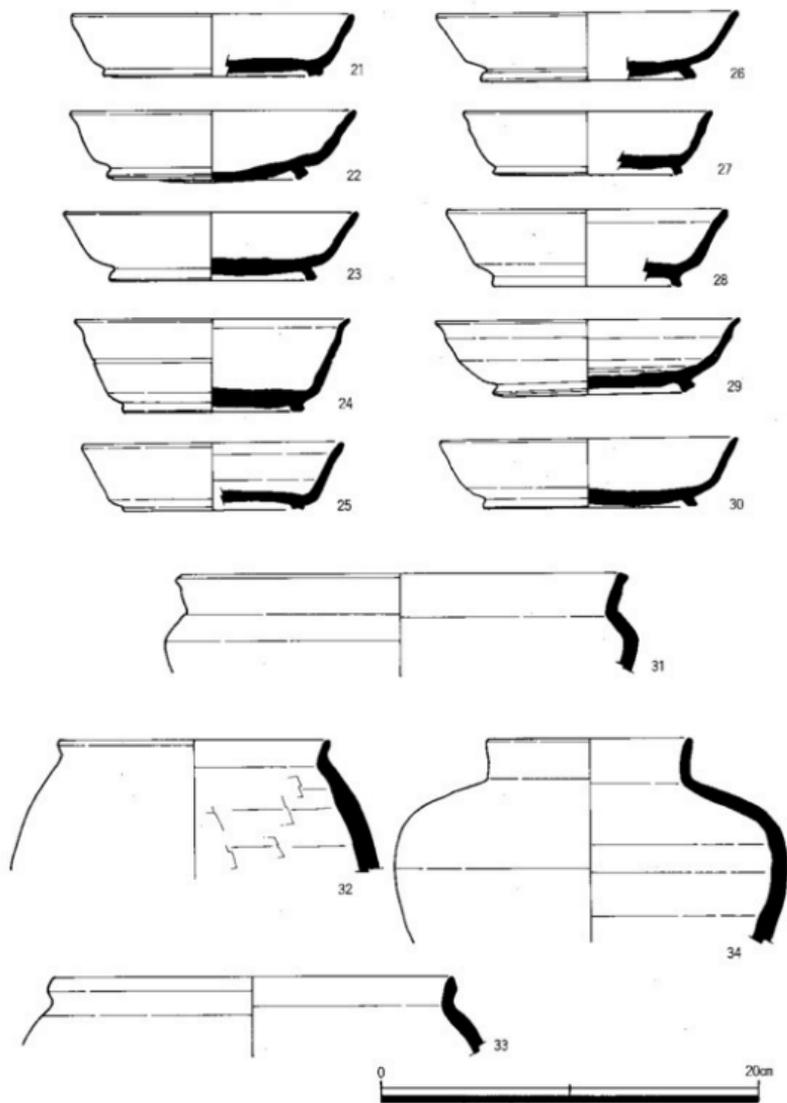
第26图 下板1号窯出土遺物実測図・1



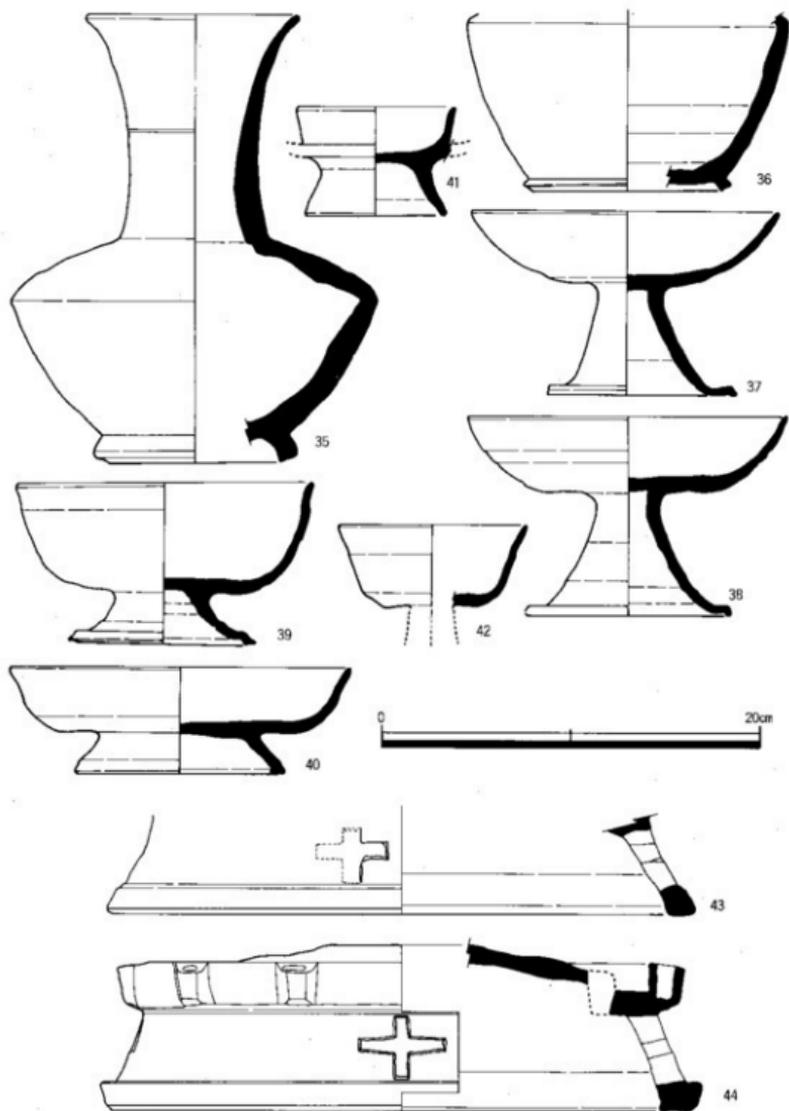
第27图 下坂1号窟出土遗物实测图·2



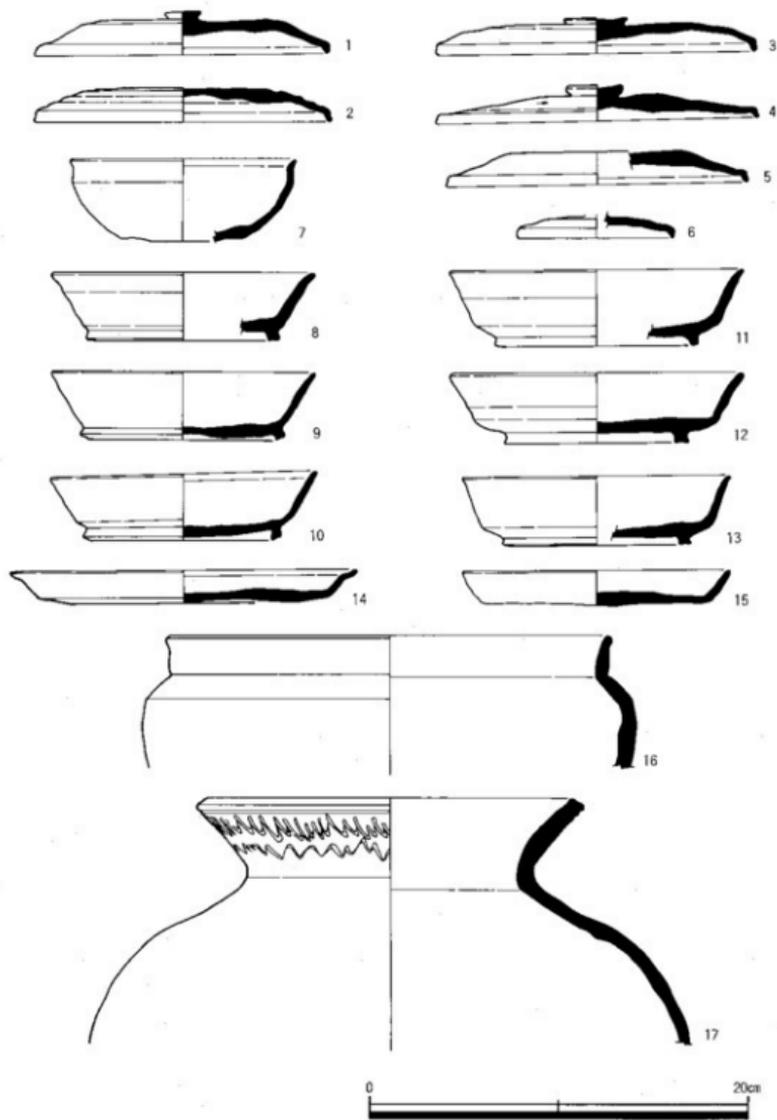
第28图 下坂1号室灰原出土遗物实测图·1



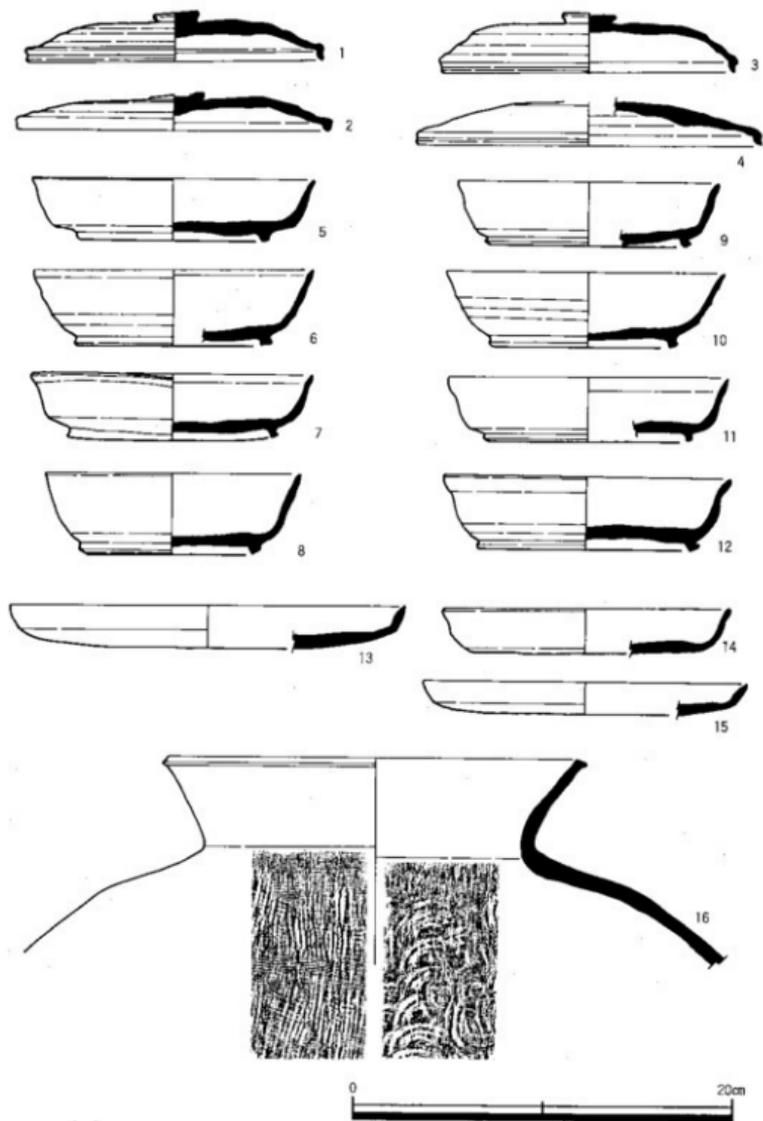
第29图 下坂1号窯灰原出土遺物実測図・2



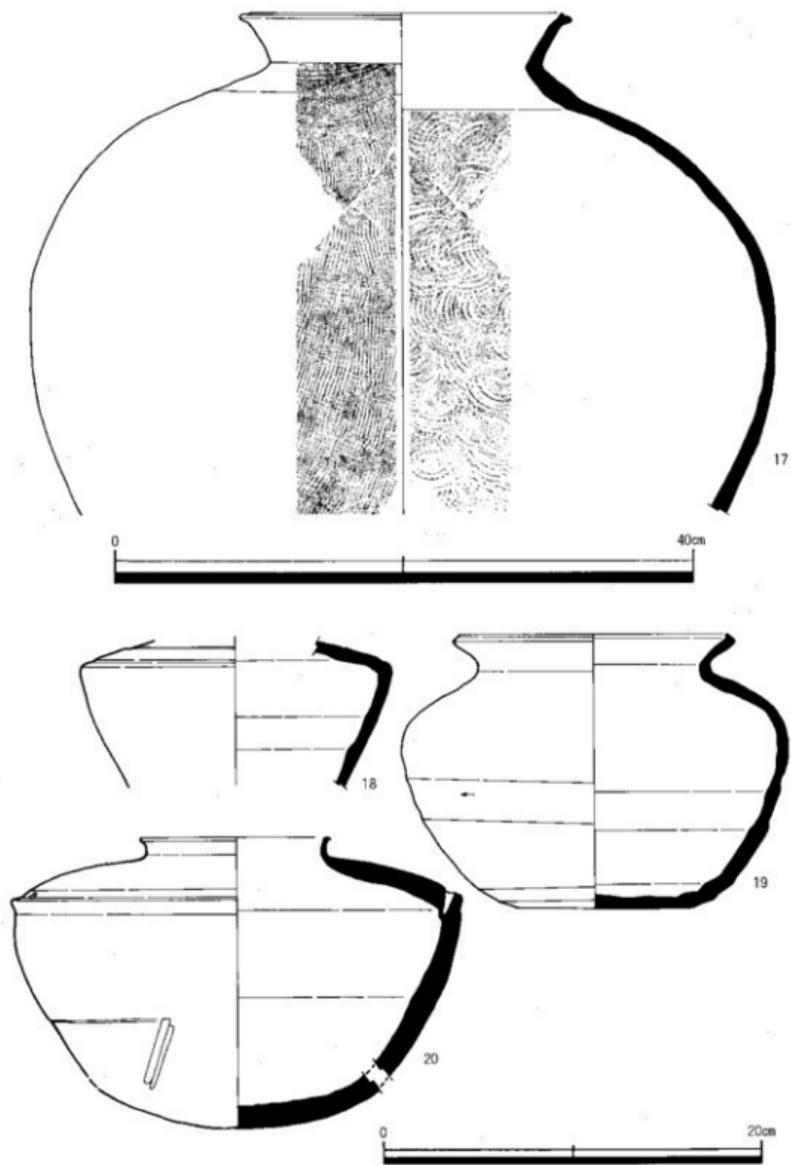
第30图 下坂1号室灰原出土物实测图·3



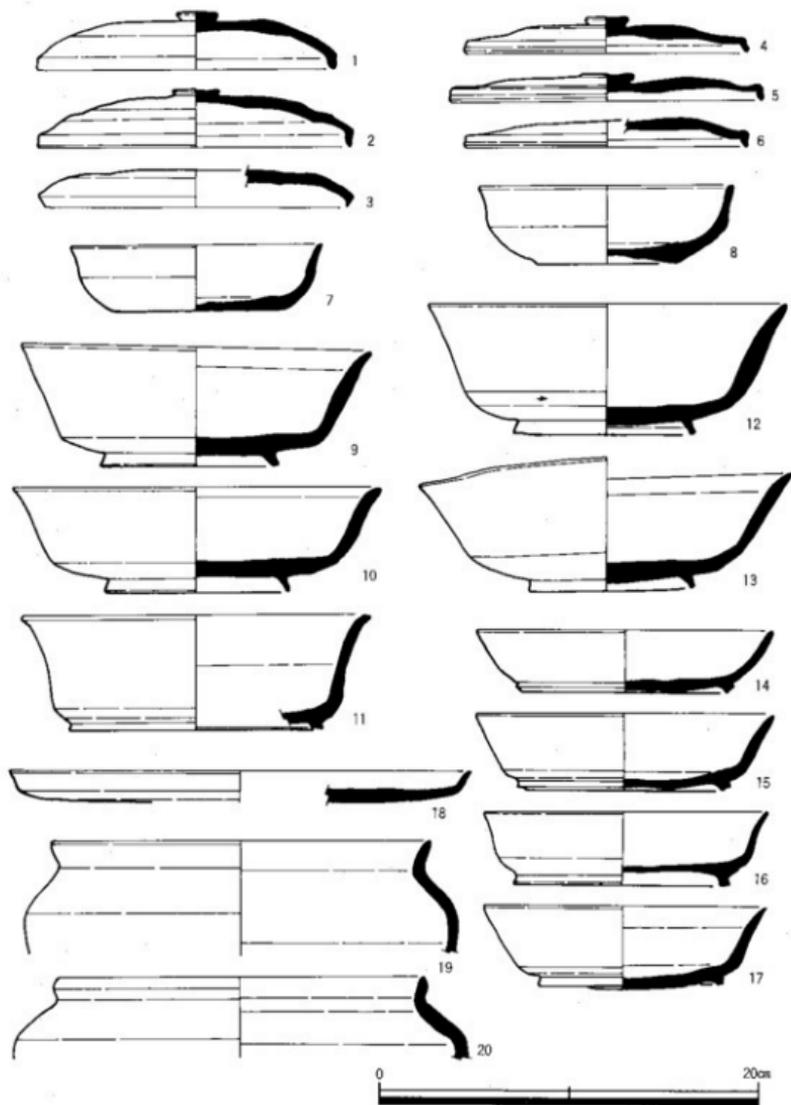
第31图 下板2号窟出土文物实测图



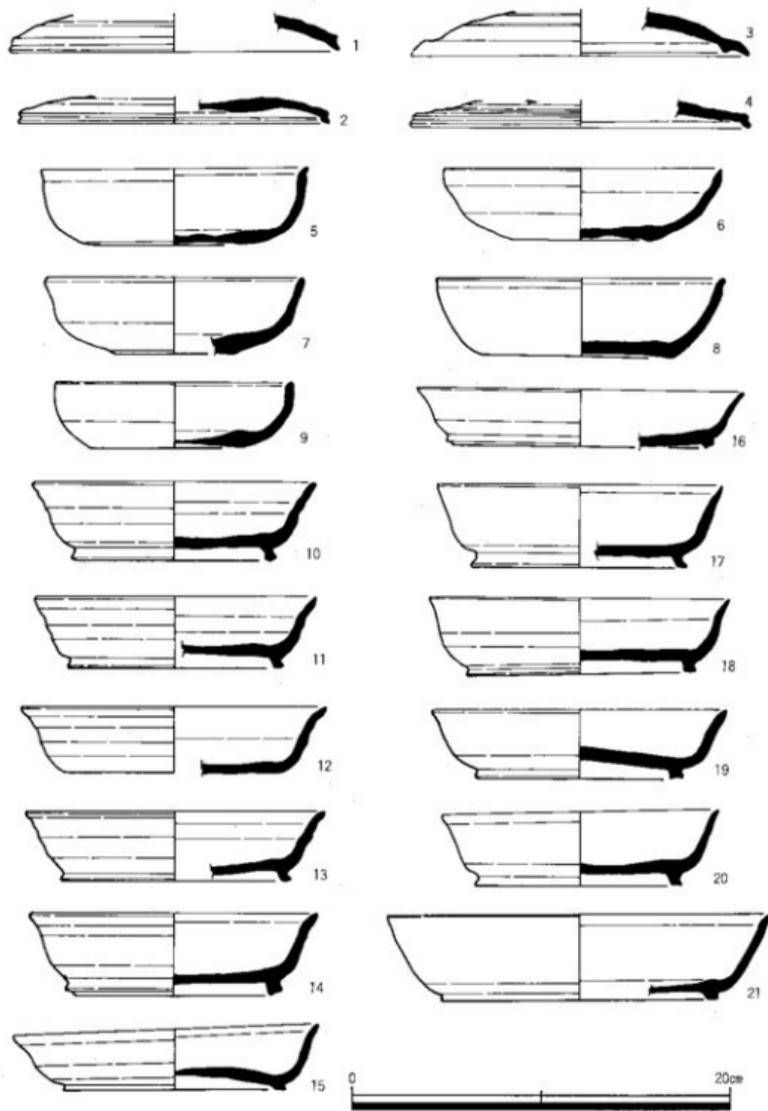
第32图 下坂2号窟灰原出土遗物实测图·1



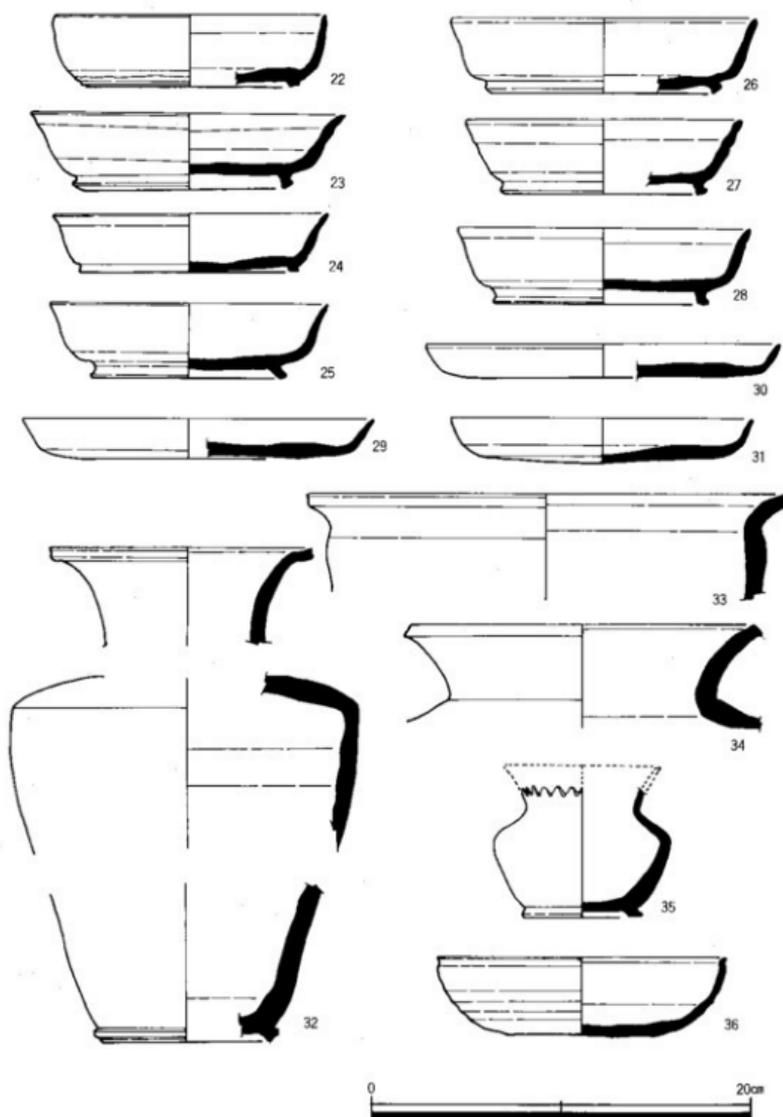
第33图 下坂2号窯灰原出土遺物実測図・2



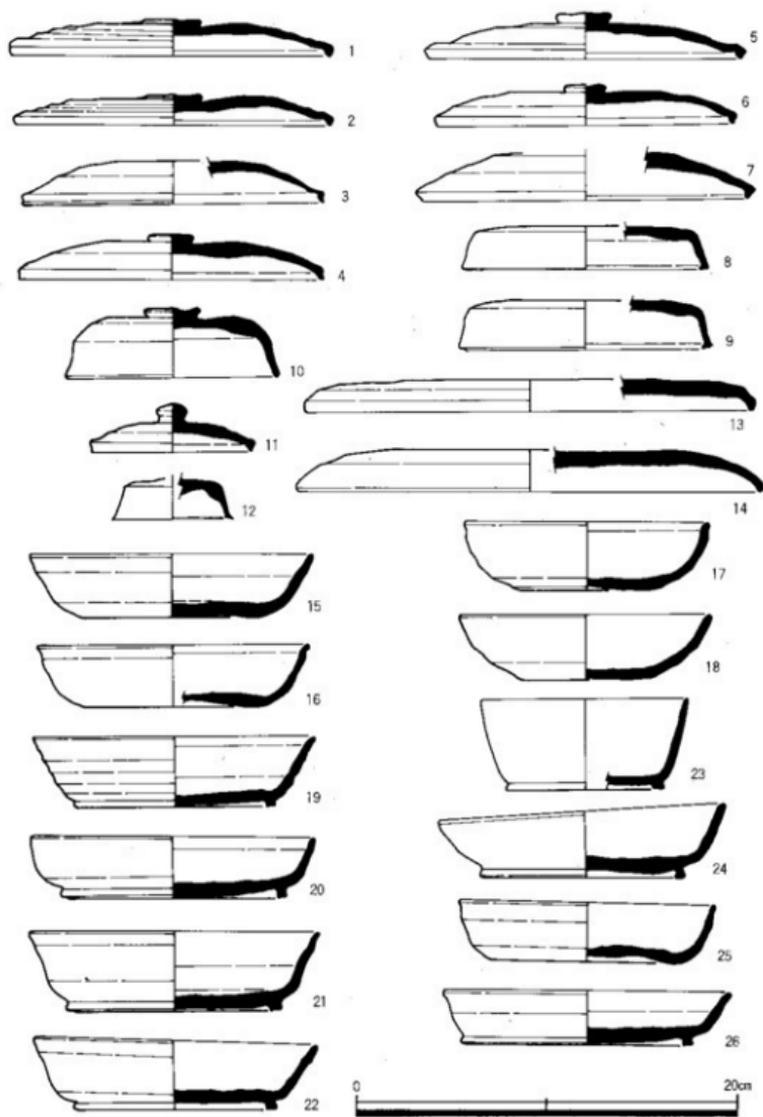
第34回 整地面覆土出土遺物実測図



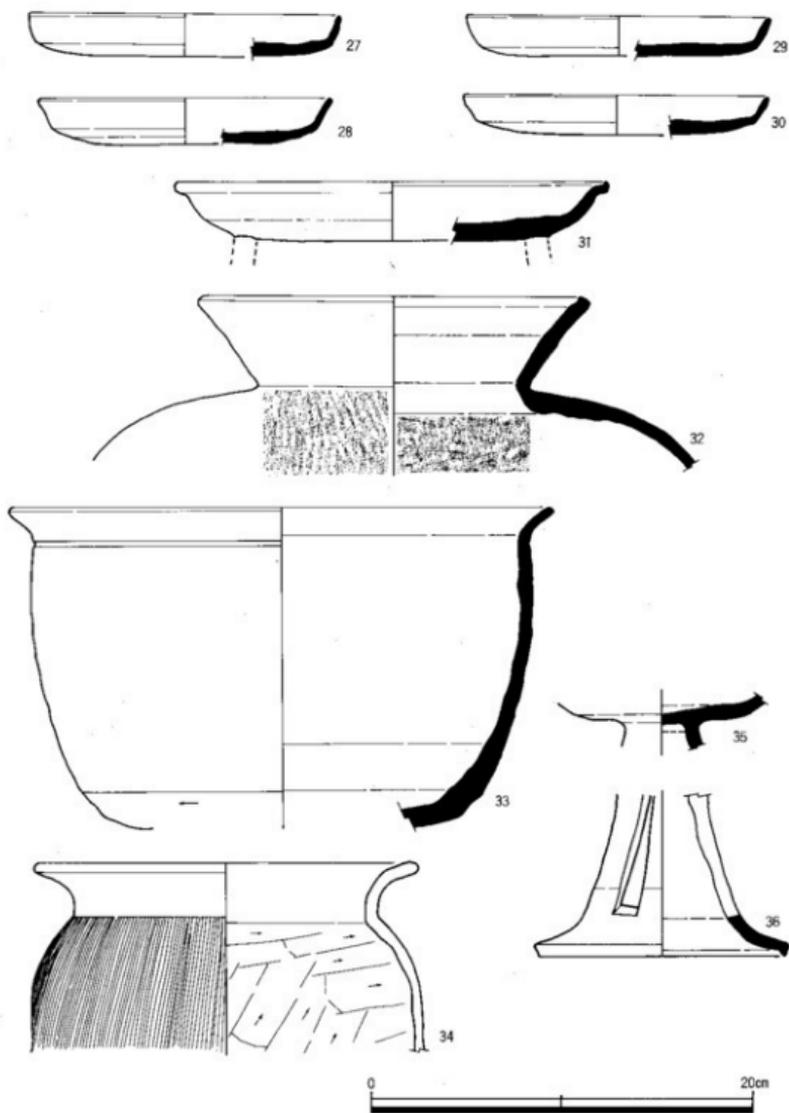
第35图 下坂3号窟出土遗物实测图·1



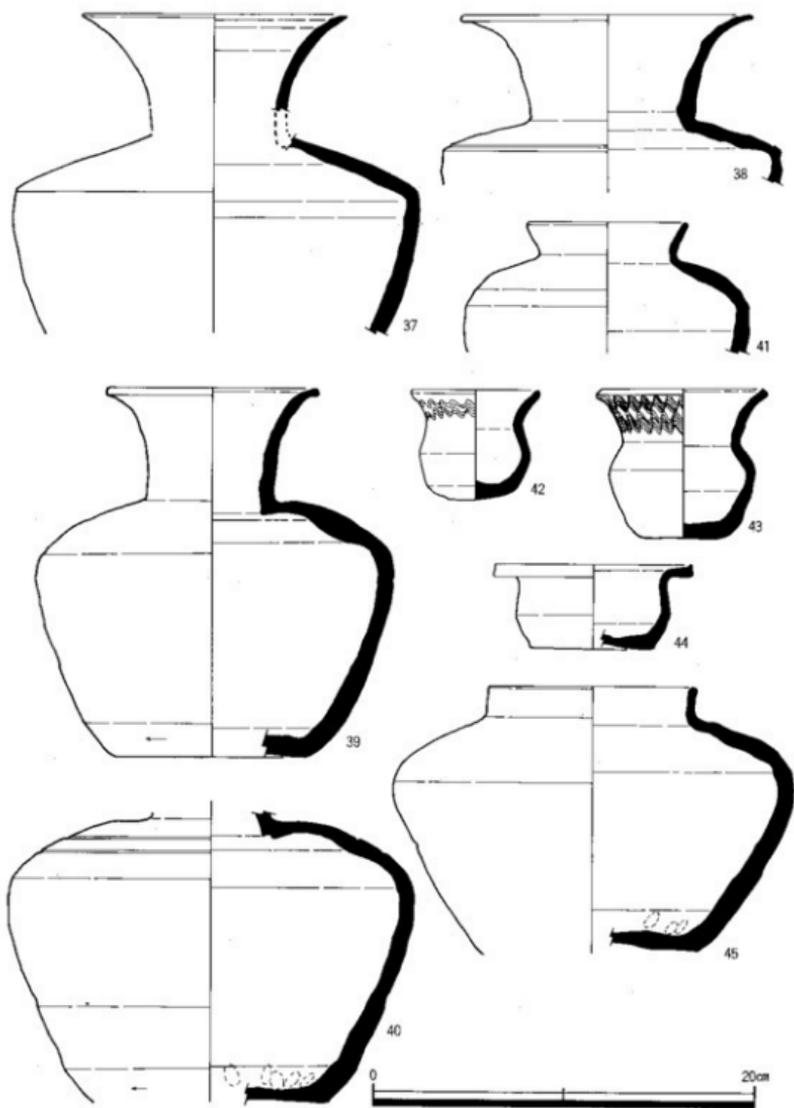
第36图 下板3号窑出土遗物实测图·2



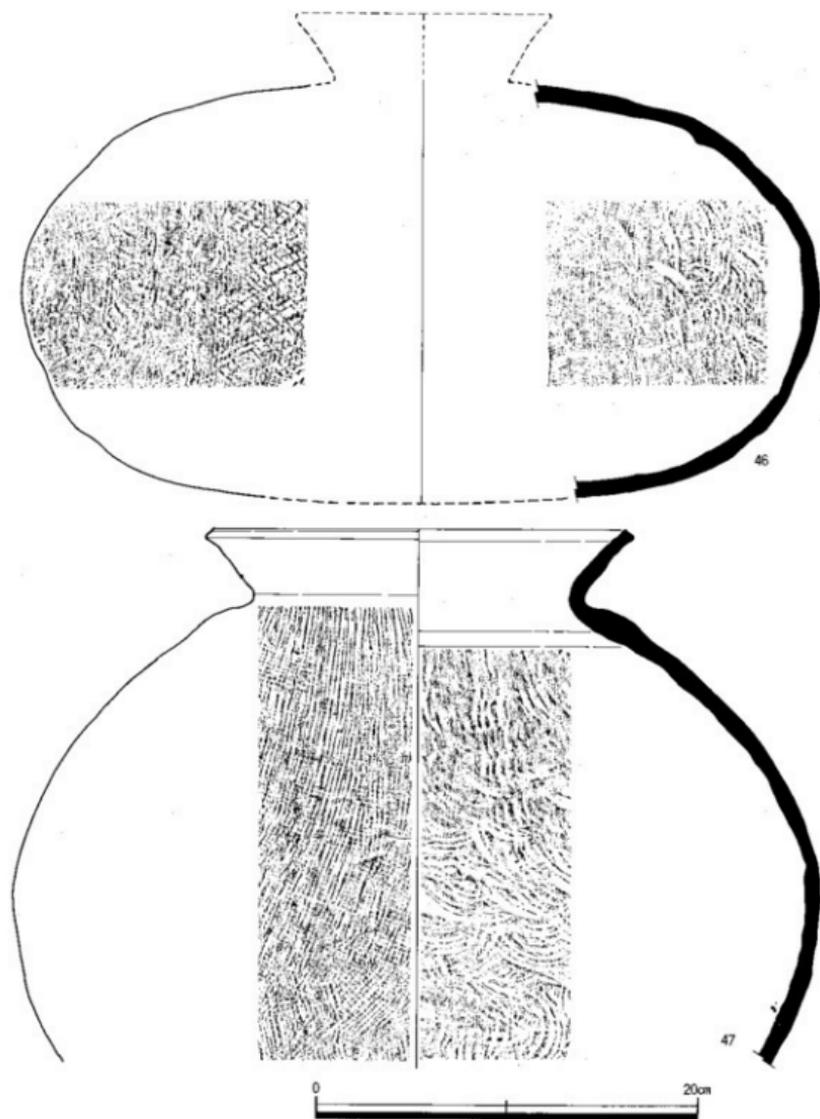
第37图 下坂2・3号窯北侧盛土出土遺物実測図・1



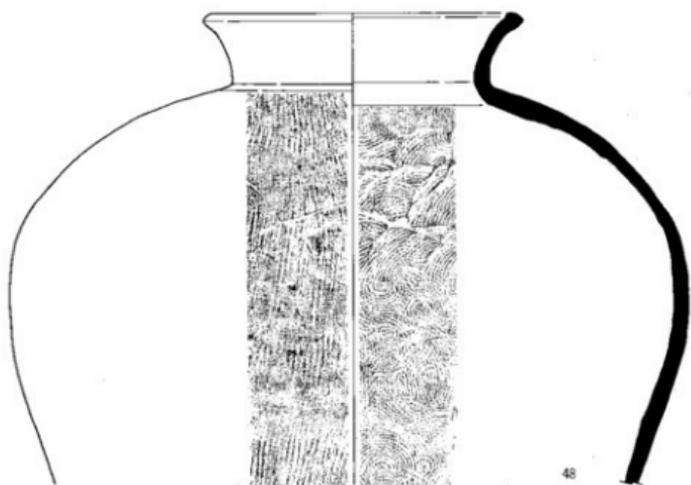
第38図 下坂2・3号室北側盛土出土遺物実測図・2



第39图 下坂2·3号窖北侧盛土出土遗物实测图·3



第40图 下坂2・3号冢北侧盛土出土遗物实测图・4



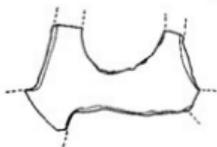
48



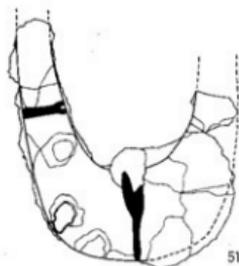
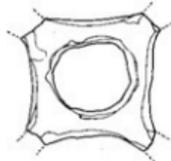
49



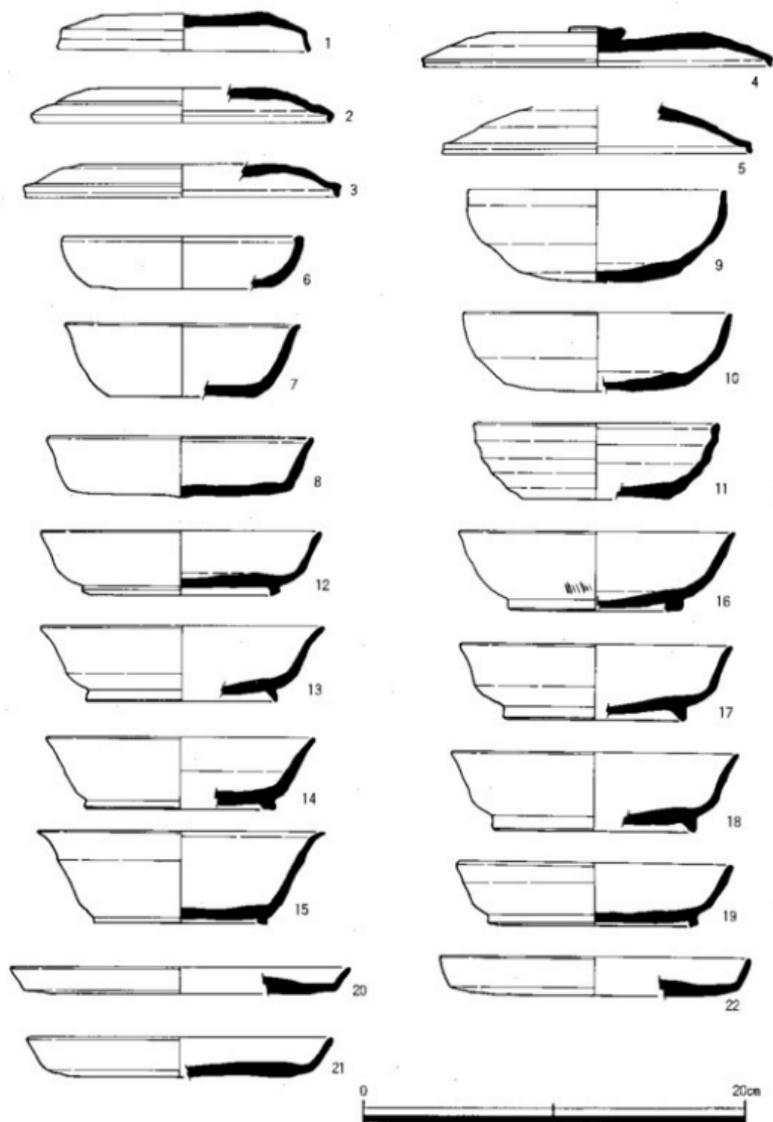
50



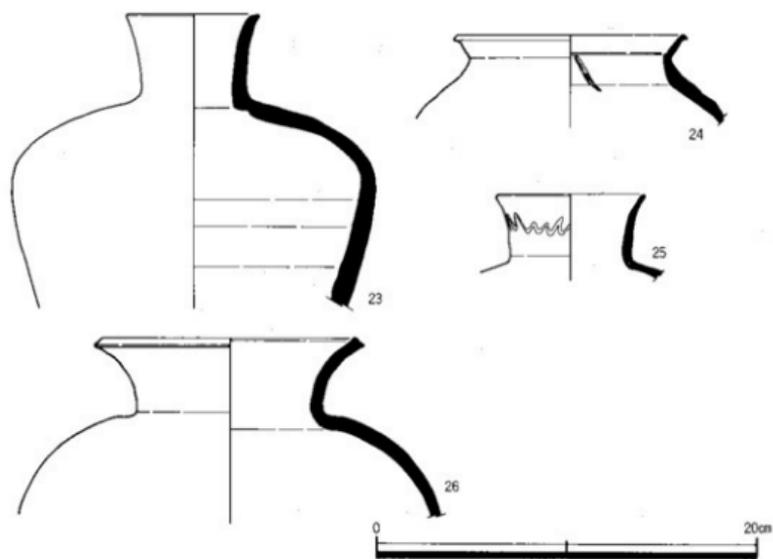
51



第41图 下坂2・3号窯北側盛土出土遺物実測図・5



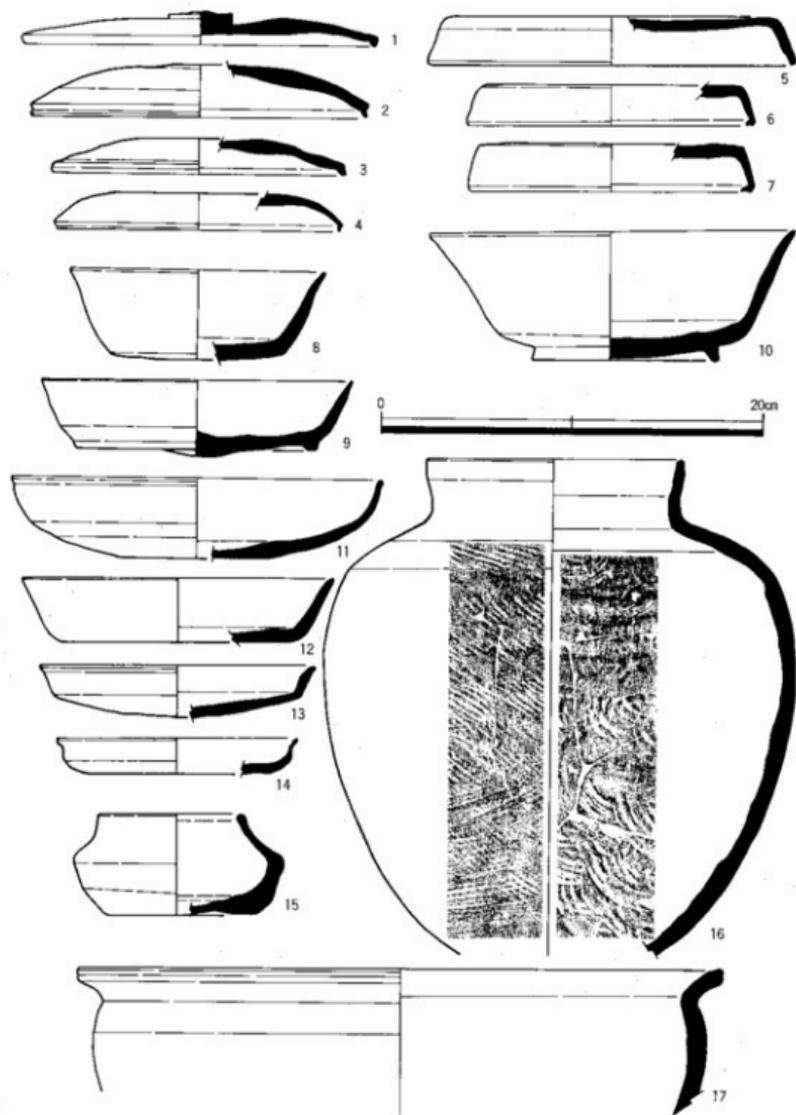
第42図 下坂2号窯南側盛土出土遺物実測図・1



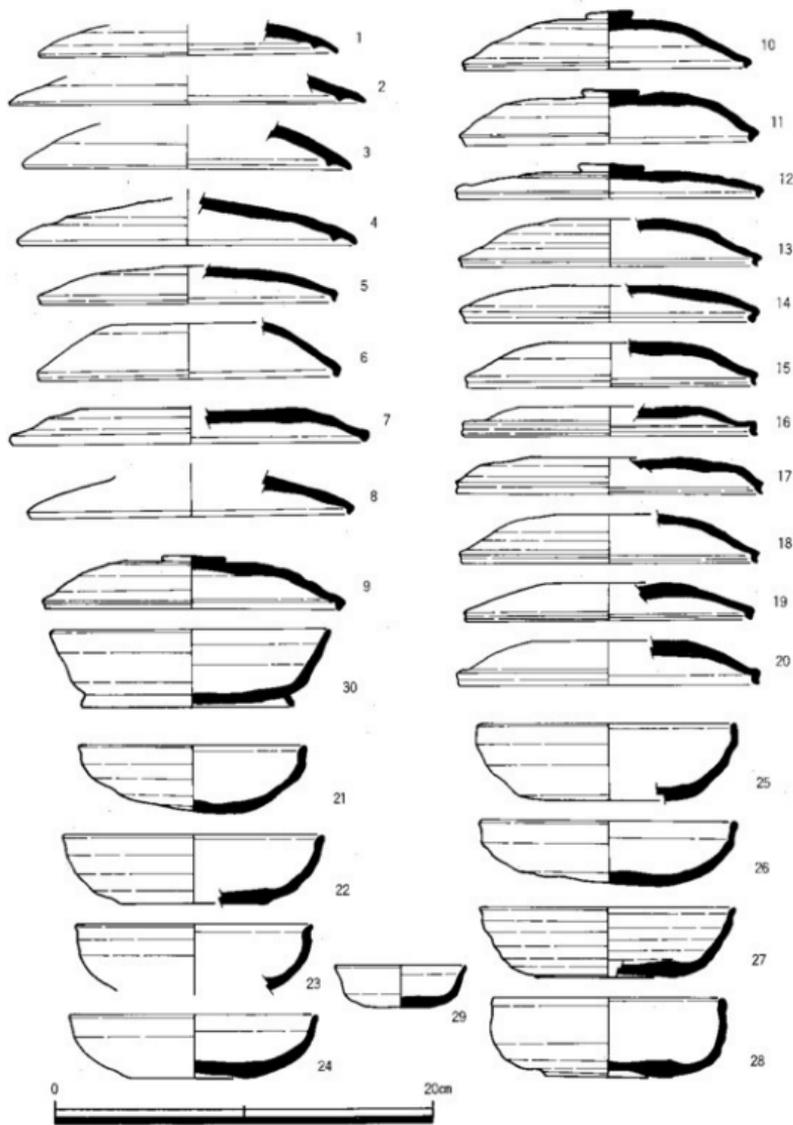
第43图 下坂2号室南侧盛土出土遺物実測図・2



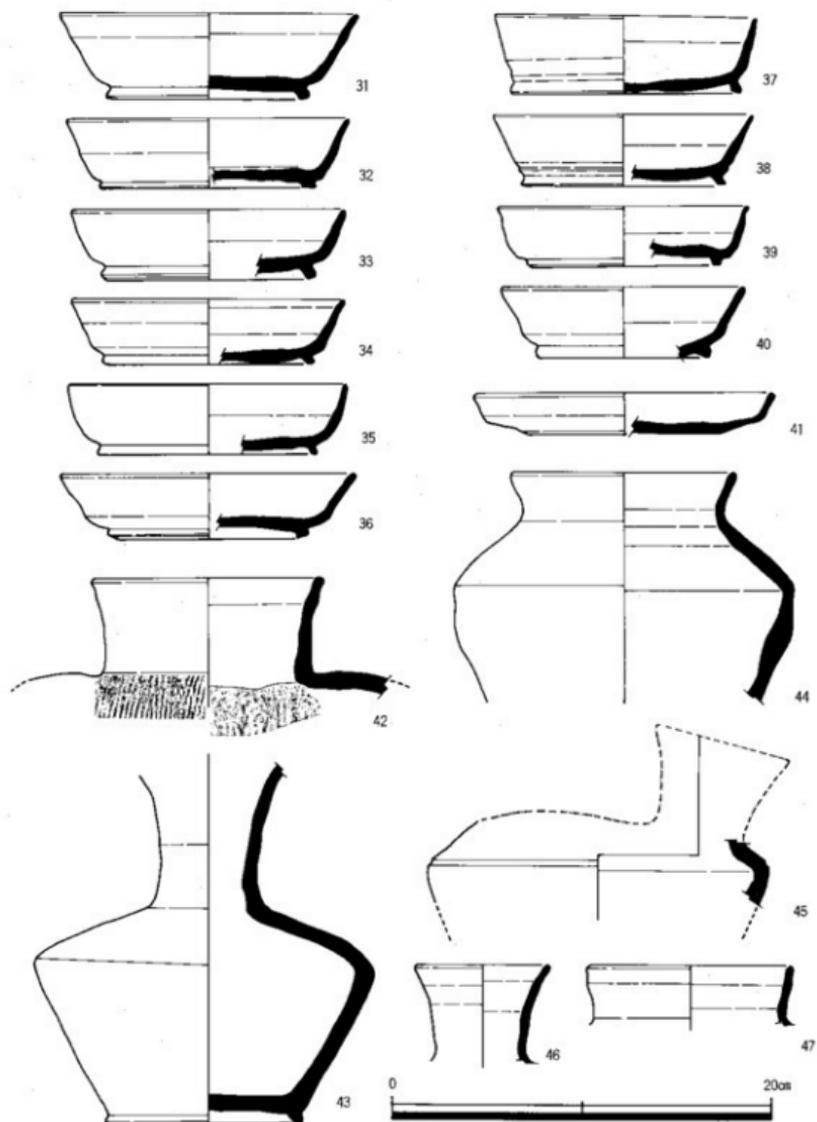
第47图 下坂4号室出土遺物実測図・3



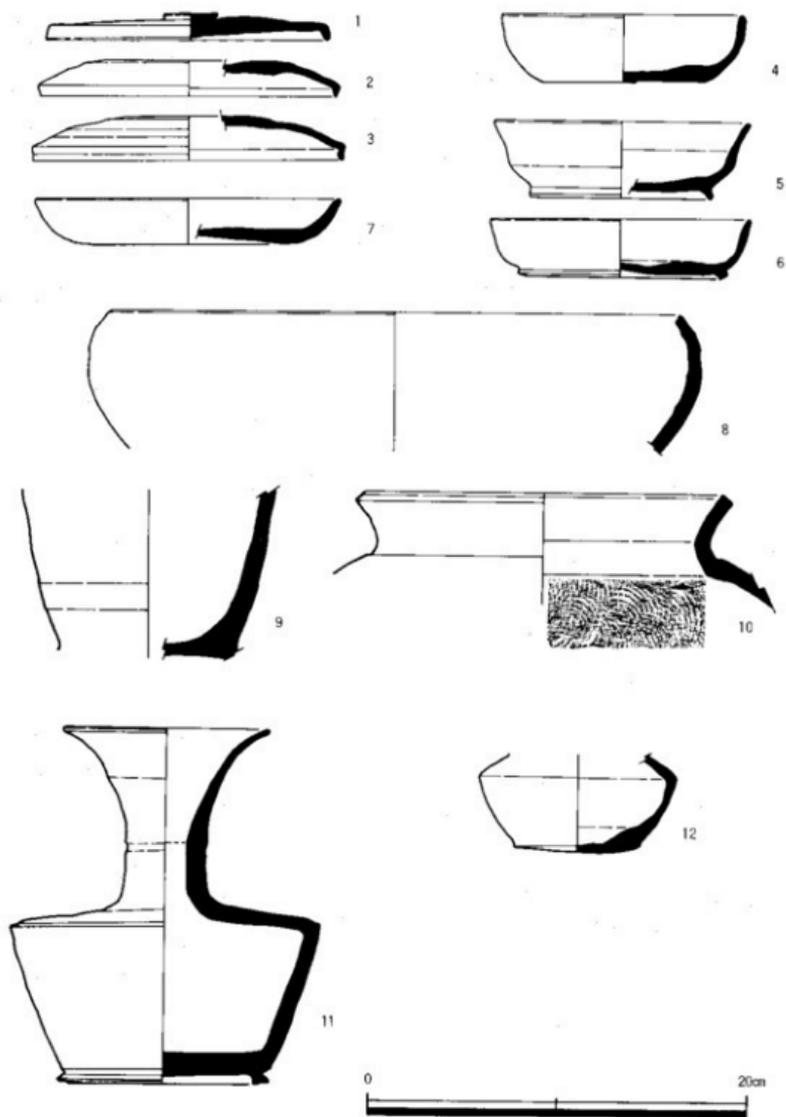
第44圖 整地面・整地面盛土・盛土出土遺物実測圖



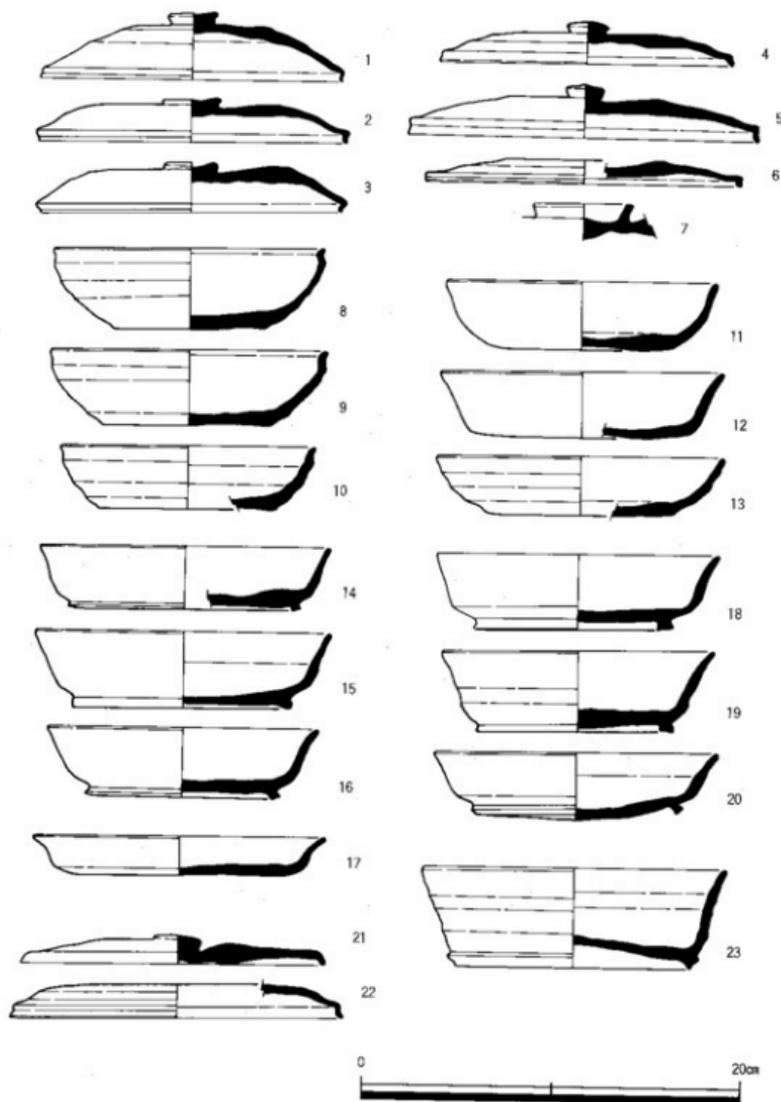
第45图 下坂4号窟出土遗物实测图·1



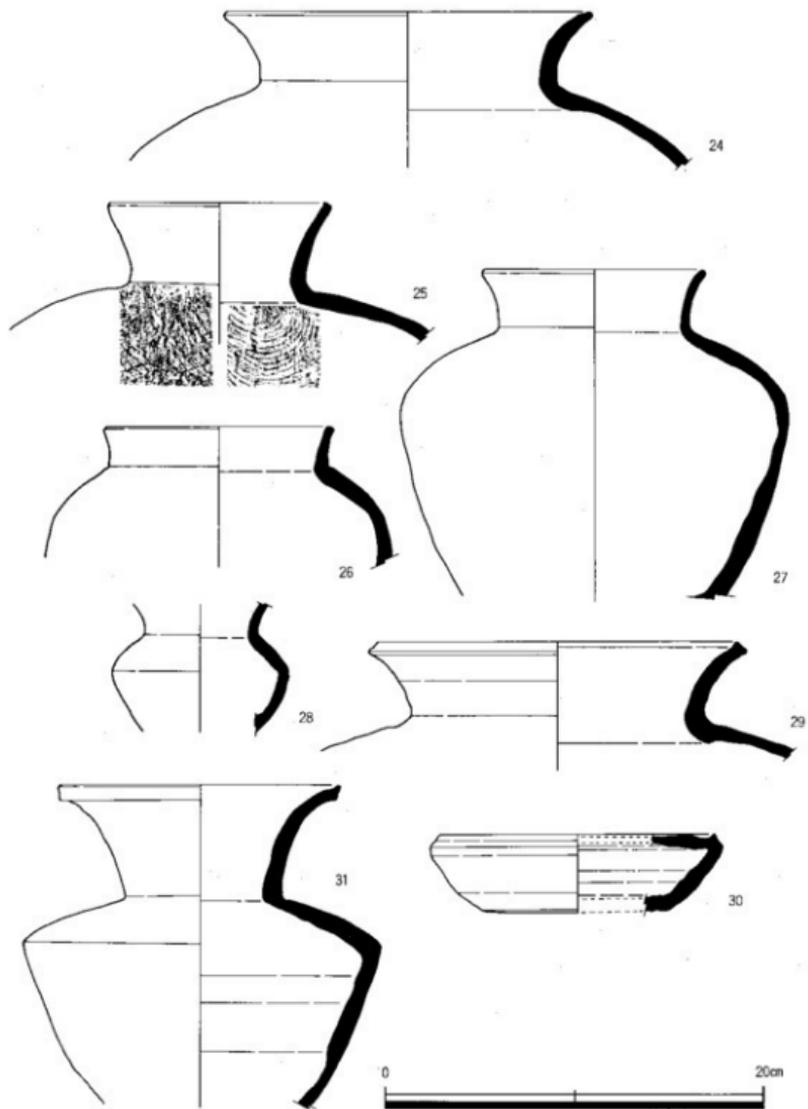
第46图 下板4号窟出土文物实测图·2



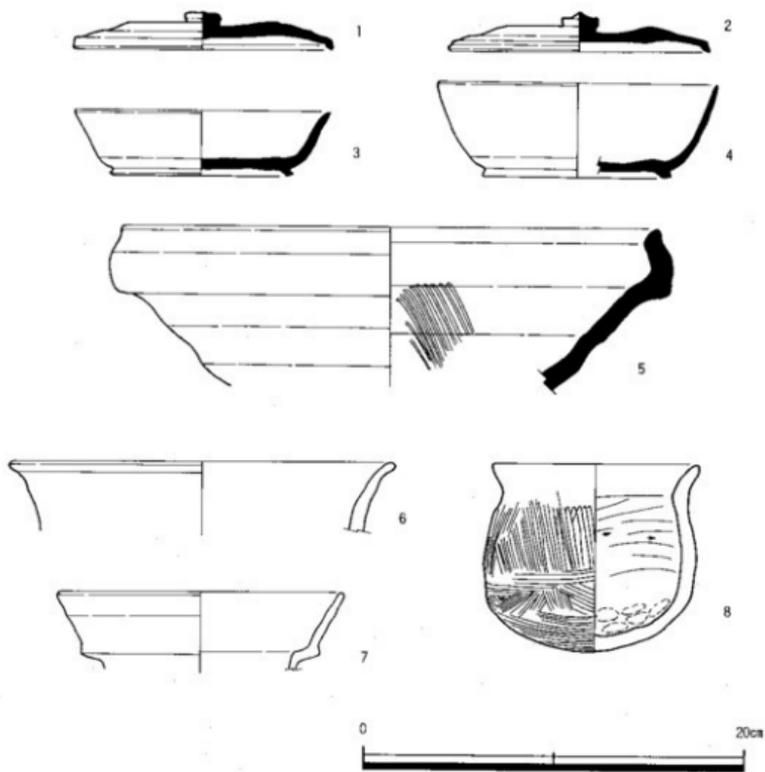
第48图 第2土坑出土遗物实测图



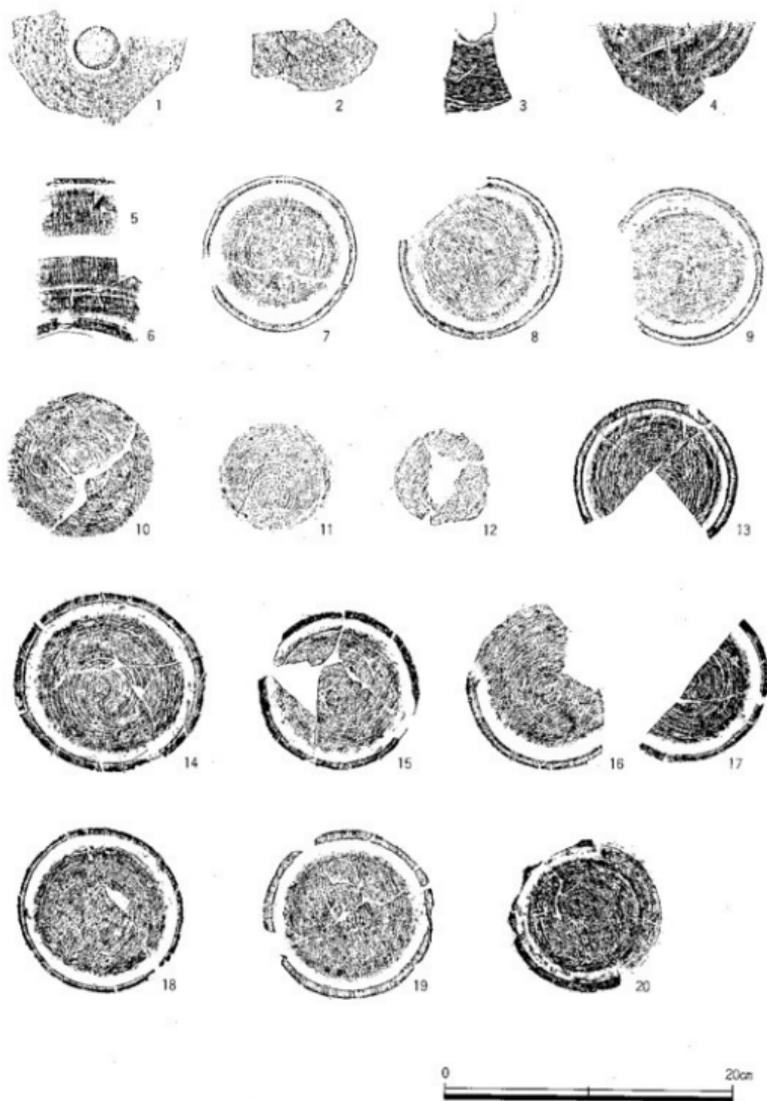
第49回 第3・4土坑出土遺物実測図・1



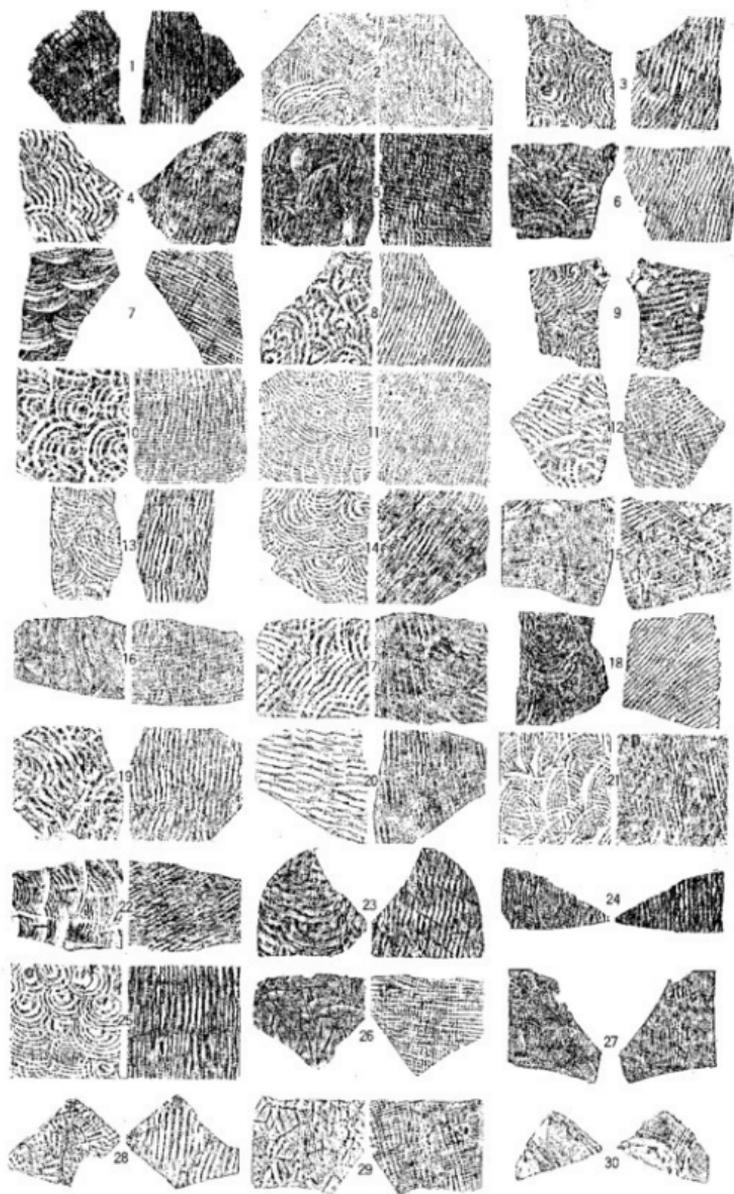
第50图 第3・4土坑出土遺物実測図・2



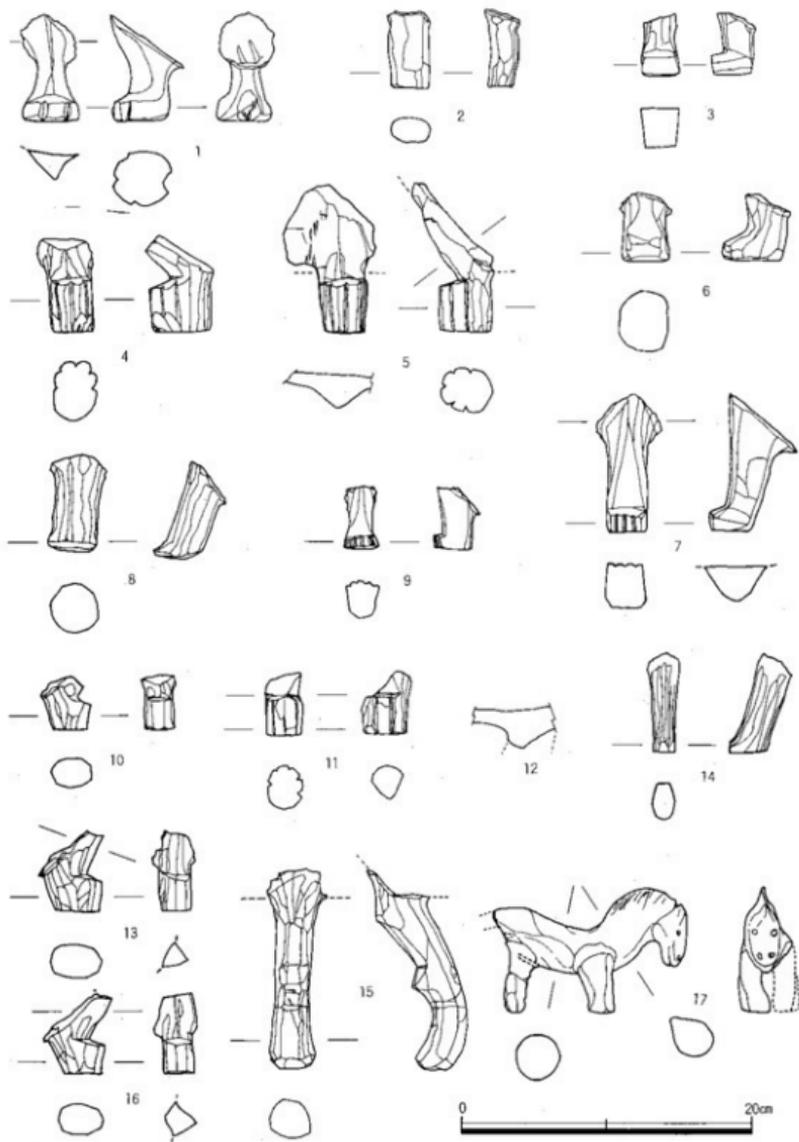
第51図 掘立柱建物跡、表探、試掘トレンチ出土遺物実測図



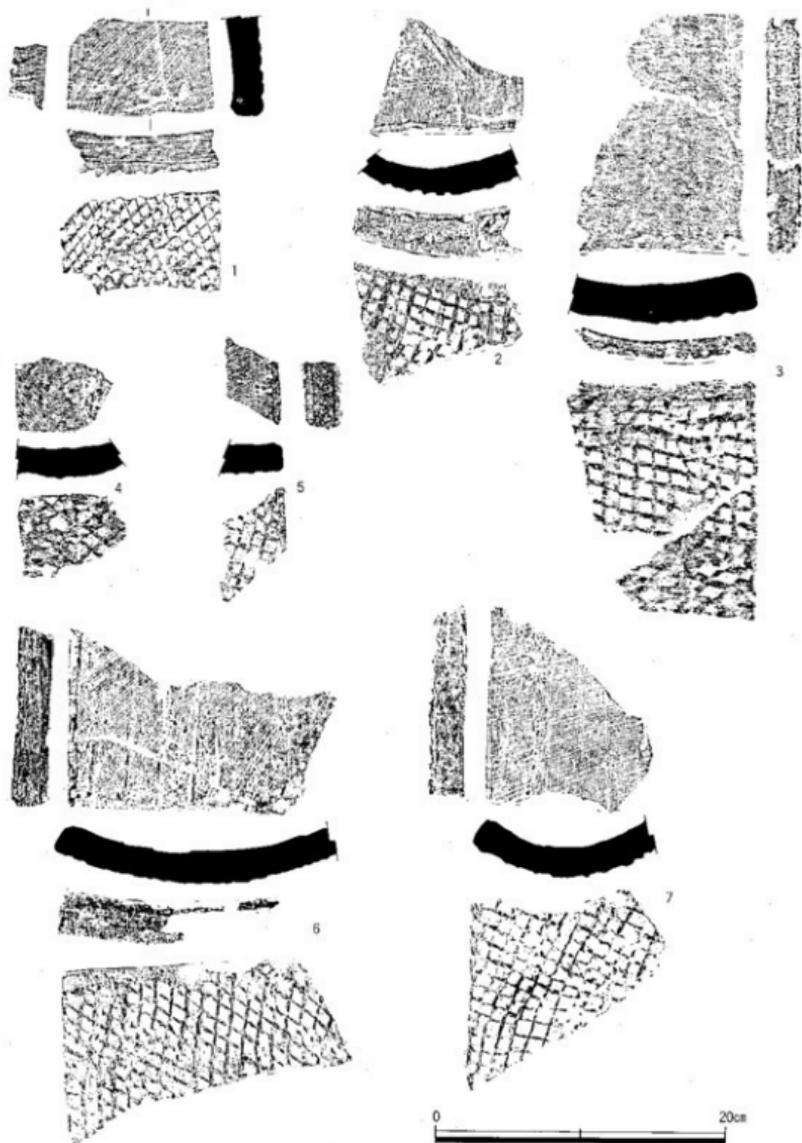
第52図 下板蓋跡群出土、ヘラ記号・糸切り底拓影図



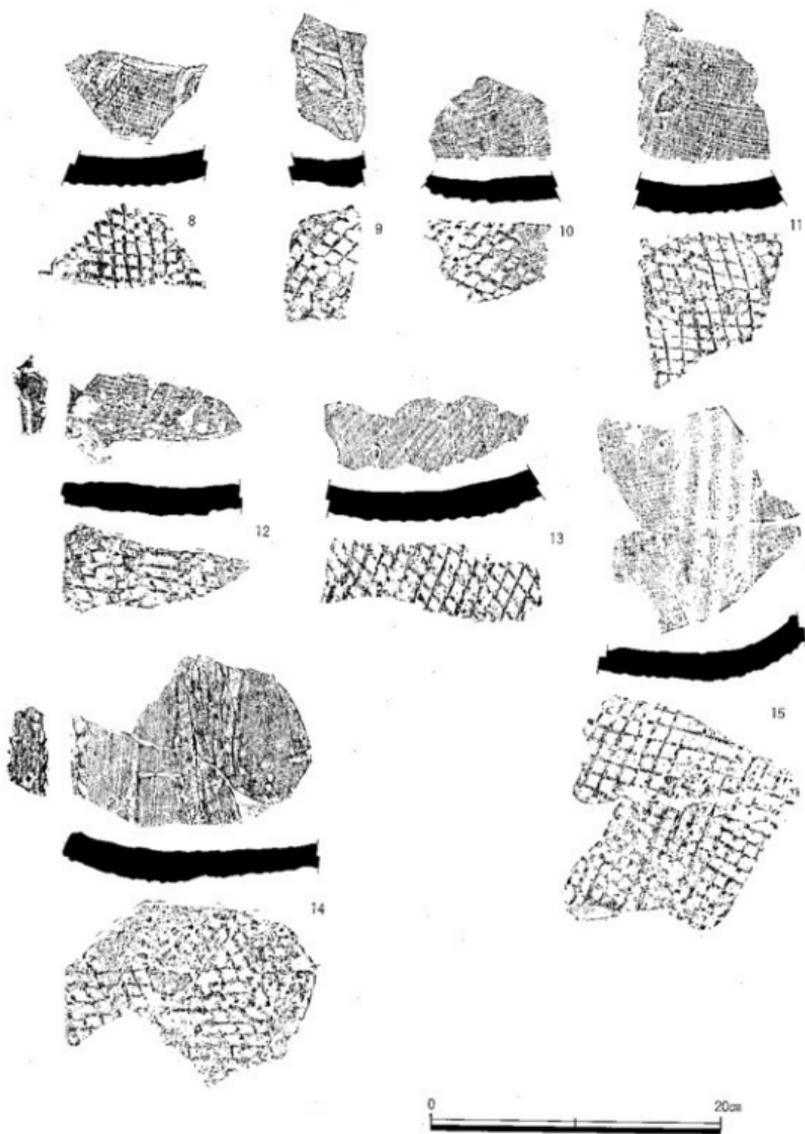
第53圖 下坂遺跡出土、タタキ文様拓影圖



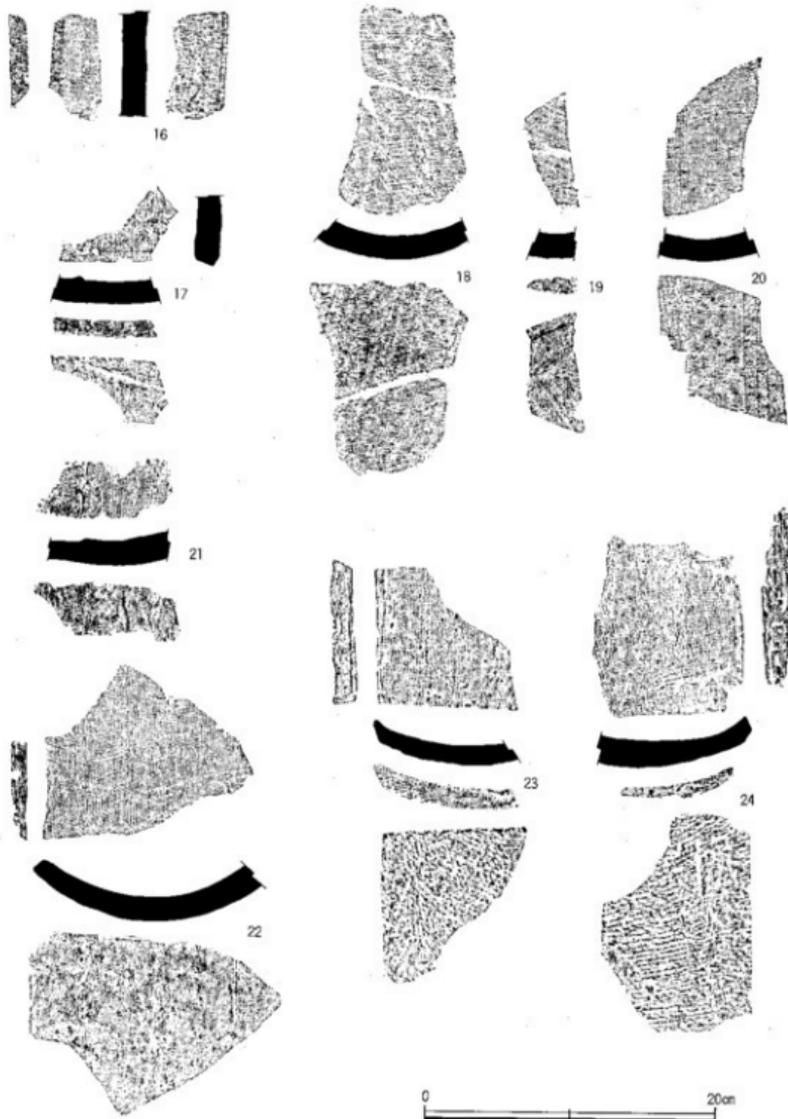
第54图 下坂家跡群出土、獸脚・土馬実測図



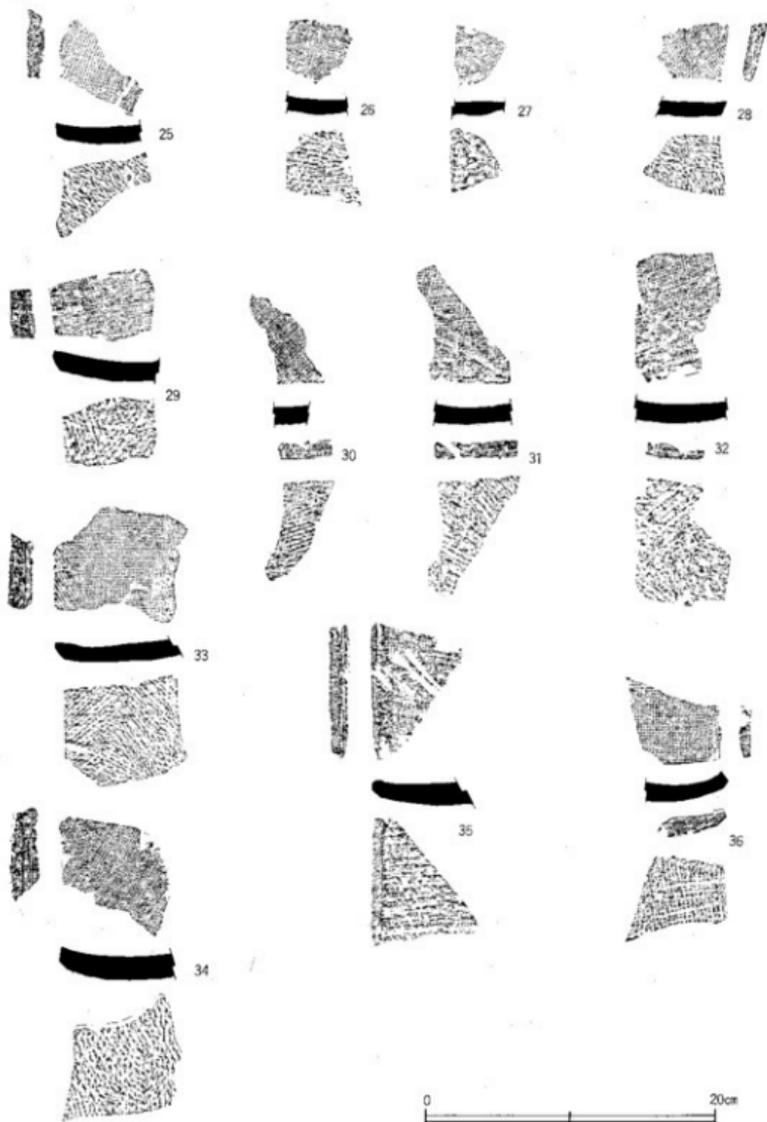
第55圖 下坂窯跡群出土、瓦拓影圖・1



第56图 下坂窯跡群出土、瓦拓影圖・2



第57図 下坂窯跡群出土、瓦拓影図・3



第58圖 下板家群出土、瓦拓影圖・4

表6 下坂1号竪出土遺物観察表

検出番号	器種	法量(m)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	高さ						
22-1	蓋 B	16.5	2.3	○口縁水平気味。つまみ短気味。 ○縁部は実部よりゆるく屈曲した の丸縁部欠おさめる。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	砂粒を 含む	堅緻	灰褐色	204
22-2	蓋 B	15.4	2.9	○口縁水平気味。中央に扁平なつま みを貼り付ける。 ○縁部は実部よりゆるく屈曲した の丸縁部欠おさめる。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。外面ヘラケズリの後ナダ。 つまみ部ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ	砂粒を 含む	堅緻	淡灰褐色	322
22-3	蓋 B	15.7	3.9	○口縁やや水平気味。中央部に扁平 なつまみを貼り付ける。縁部に向 かってやや膨脹を呈す。 ○縁部は実部よりゆるく屈曲した の丸縁部欠おさめる。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。外面ヘラケズリの後ナダ。 つまみ部ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ	砂粒を 含む	堅緻	灰褐色	342
22-4	蓋 A	16.6	1.9	○口縁やや水平気味。 ○縁部は実部よりゆるく屈曲した の丸縁部欠おさめる。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ	砂粒を 含む	堅緻	灰褐色	235
22-5	蓋 B		1.3	○口縁やや水平気味。 ○縁部欠陥。中央につまみを貼り付 ける。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。一部ヘラケズリの後ナダ。 つまみ部ナダ。	細砂を 含む	やや軟	灰色	133
22-6	蓋 B	19.5	6.3	○口縁やや水平気味。中央部に扁平 なつまみをつける。	○天井部内外面口ロナダの後不整 ナダ。つまみ部ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ	砂粒を 含む	堅緻	灰褐色	383
22-7	鉢 A b	10.6	4.9	○平坦な底部より斜め上方に立ち上 がる口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。	精練立 粒土	やや軟	灰褐色	115
22-8	鉢 A c	15.6	3.6	○底部欠陥。内面しながら斜めに立 ち上がる口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰褐色	245
22-9	鉢 A c	12.6	3.5	○平坦な底部より斜め上方に立ち上 がる口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面ナダ。外面踏転角切りが おすかに見られる。	細砂を 含む	堅緻	灰色	333
22-10	鉢 C	12.6	4.1	○やや膨脹した底部より斜め上方に立 ち上がる口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダナ。外面ヘラケ ズリの様でいいナダナ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	512 517 573
22-11	鉢 B b	12.4	3.6	○底部平坦でやや内面気味の口縁部 へ続く。高曲部に高台を貼り付け る。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダナ。外面ヘラケ ズリの様でいいナダナ。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰褐色	166
22-12	鉢 B b	17.0	5.8	○底部平坦でやや外反する口縁部へ 続く。高曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。高台ナ ダ。	砂粒を 含む	堅緻	淡灰褐色	232 222
22-13	鉢 B b	15.4	4.3	○底部平坦で斜め上方に外反する口 縁部へ続く。高曲部に高台を貼り 付ける。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。高台ナ ダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	154
22-14	鉢 B c	15.0	3.9	○底部平坦で斜め上方に立ち上がる 口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面踏転角切り。高台ナダ。	細砂を 含む	堅緻	淡灰褐色	205
22-15	鉢 B b		3.3	○底部平坦で斜め上方に立ち上がる口 縁部へ続く。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。高台ナ ダ。	細砂を 含む	堅緻	暗褐色	612 624
22-16	鉢 B b	14.8	3.7	○底部平坦でやや内面しながら斜め に立ち上がる口縁部へ続く。高曲 部に高台を貼り付ける。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。高台ナ ダ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰褐色	235
22-17	鉢 B b	16.0	3.2	○底部平坦で斜め上方に外反する口 縁部へ続く。高曲部に高台を貼り 付ける。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面ヘラケズリの後ナダ。高台ナ ダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	166
22-18	蓋 A	21.0	2.0	○平坦な底部より内面気味に粗かく 立ち上がる口縁部へ続く。 ○口縁部鋭角をもつ。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ。 外面踏転角切り。高台ナダ。	細砂を 含む	軟	淡褐色～灰 色	501 506 509
23-19	鉢	27.8	9.0	○縁部は内面気味に立ち上がり口縁 部で多反する。 ○口縁部鋭角の角ばる。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	堅緻	内～暗灰色 外～淡灰色	061
23-20	甕	24.4	10.9	○口縁部上方に立ち上がる口縁部。両 縁部気味。 ○口縁部特別に肥厚し重をもつ。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	225 239 241
23-21	鉢鉢形 土器	20.1	6.4	○やや内面気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁部鋭角。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○下部外面ヘラケズリ。	精練立 粒土	堅緻	灰褐色	235
23-22	鉢鉢形 土器	4.9		○口縁部。底部欠陥。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	堅緻	灰褐色	151
23-23	鉢鉢形 土器	19.2	5.2	○内面気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁部鋭角をもつ。	○口縁部内外面口ロナダナ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	234
23-24	鉢鉢形 土器	4.4		○口縁部鋭角をもつ。	○内面口ロナダ。外面ヘラケズリ の後ナダ。	細砂を 含む	軟	灰色	379

表7 下坂1号竪原出土遺物観察表

検出番号	器種	法量(m)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	高さ						
24-1	蓋 B	10.4	3.7	○平坦な中央に扁平なつまみを貼り付 ける。 ○口縁部よりゆるやかに屈曲したの 丸縁部鋭角をもつ。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ。外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダナ。	細砂を 含む	堅緻	内～緑灰色	620

棟号番号	仕様	法 量(m)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	給土	焼成	色 調	建物番号
		口 径	貯 高						
24-2	置B II	16.2	2.8	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。 ○口縁部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	315
24-3	置C II	16.4	2.0	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	163
24-4	置	1.2		○つまみ部、口縁部無欠損。 ○天井部下位にへら記号有す。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	精製土 粘土	堅緻	内-灰色 外-乳白色 -灰色	312
24-5	置B I	17.5	4.5	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。	○天井部内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	細砂を 含む	堅緻	内-灰色 外-灰色 -赤灰色	506
24-6	置A	16.2	2.9	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。 ○口縁部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰褐色	165
24-7	置B I	17.5	3.2	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○頂部より口縁部に向かって急形を呈し、裾部欠くおきめる。	○天井部内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰褐色	630
24-8	置A	16.5	2.6	○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○口縁部よりゆるやかに内曲したものを貼り付ける。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	砂粒を 含む	堅緻	内-灰色 外-淡灰色	500 593
24-9	置A	2.0		○水平気味の頂部中央につまみを貼りつける。 ○口縁部無欠損。	○天井部内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。 ○口縁部と天井部の間にへら記号有す。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	593
24-10	置C	2.5		○頂部中央に扁平なつまみを貼りつける。 ○水平の天井部よりゆるやかなカーブをもつ口縁部に続く。 ○口縁部無欠損。	○天井部内面ロクロナダ、外面カーブ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ。	細砂を 含む	堅緻	黄緑灰色	210
24-11	焼A b	15.2	3.0	○平坦な底面より内周しなから立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ。	砂粒を 含む	軟	緑褐色	520
24-12	焼A a	13.8	4.0	○やや平坦な底面より内周気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	512
24-13	焼C a	14.3	4.6	○底面はやや平坦で斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面下位に2条の凹線を残す。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ。	精製土 粘土	堅緻	黄灰褐色	056
24-14	焼A I a	15.6	3.6	○底面より斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	923
24-15	焼A a	14.2	3.6	○平坦な底面から内周気味に斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	325
24-16	焼A II a	10.6	2.1	○平坦な底面から斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ、内面中央位置に1条の凹線を残す。 ○底面内面ヘラケズリ。	やや軟 粘土	やや軟	内-乳白色 外-淡灰色	084
24-17	焼A II a	9.4	3.2	○底面はやや平坦、口縁部中央より外側に強く内曲する縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ナダ、外面ヘラケズリ。	やや軟 粘土	やや軟	黄褐色	517
24-18	皿A II b	15.9	2.2	○平坦な底面より斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ヘラケズリの後ナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	086
24-19	皿A II b	16.4	1.7	○平坦な底面より外反する口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	592
24-20	皿A I b	22.7	3.5	○平坦な底面より斜め上方に立ち上がる口縁部。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。	精製土 粘土	堅緻	淡灰色	537
24-21	杯B II a	15.0	3.4	○底面は平坦で斜め上方に立ち上がる口縁部、裾部縁に高台を貼り付ける。 ○口縁部無欠損。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ、高付ナダ。	精製土 粘土	やや軟	内-灰白色 外-灰色	066
24-22	杯B II a	15.1	3.7	○底面はやや平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり縁部欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ、高付ナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	030
24-23	杯B II a	15.6	3.7	○底面は平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり縁部欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリ、高付ナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰褐色	062 064
24-24	杯B II b	14.6	5.0	○底面は平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり縁部で外反し欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面中央位置に強い1条の凹線を残す。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ。	精製土 粘土	堅緻	内-黄灰色 外-赤灰色	091
24-25	杯B II b	14.0	3.6	○底面は平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり縁部欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダの後不整ナダ、外面ヘラケズリの後ナダ、高付ナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	126
24-26	杯B II b	16.0	3.6	○底面は平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり縁部欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ、高付ナダ。	細砂を 含む	堅緻	青灰色	504
24-27	杯B II b	13.2	3.4	○底面は平坦で頂部部に高台を貼り付ける。 ○口縁部内周気味に立ち上がり縁部で外反し欠くおきめる。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底面内面ロクロナダ、外面ヘラケズリの後ナダ、高付ナダ。	精製土 粘土	堅緻	灰色	284

探出番号	器種	法量(m)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	高さ						
25-28	杯 B目 b	15.0	4.2	○底部は平皿や唇部に高白を施す。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり唇部 先くさめる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外周へう切 りの後ナデ、高台ナデ。	精練 胎土	堅緻	淡褐色	503
25-29	杯 B目 b	16.0	4.0	○底部は平皿や唇部に高白を施す。 ○口縁部内面滑し端部でわずかに外反 し先い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外周へう切 りの後ナデ、底部外周にへう記号 をナ。高台ナデ。	精練 胎土	堅緻	灰色	499 501
25-30	杯 B目 b	16.0	3.7	○底部は平皿で唇部に高白を施す。 ○口縁部内面滑しながら斜め上方に立 ち上がり唇部先い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ 外周へう切りの後ナデ、高台ナデ。	精練 胎土	やや軟	明褐色	321
25-31	杯	23.8	5.4	○やや高め上方に立ち上がる口縁部 唇部内反り先い。	○口縁部内外面ロクロナデ、唇部内 面ロクロナデ、外周をナ。	精練 胎土	堅緻	灰色	327
25-32	短頸壺	14.4	7.1	○頸部短く直立気味に立ち上がる 口縁部、立ちあがる唇部をもつ頸 部へ短く。	○口縁部内外面ロクロナデ、唇部ナデ。 ○底部内面滑し同心印文の後工具 によるナデ陶し、外周ナデ。	精練 胎土	堅緻	黄褐色	085
25-33	壺	21.2	3.6	○頸部短くやや直立気味に立ち上 がる口縁部、唇部なだらか。 ○口縁部先い。	○口縁部、唇部内外面ロクロナデ。	精練 胎土	堅緻	灰白色	086
25-34	香 (直口壺)	31.0	11.0	○口縁部直立気味に立ち上がり唇部 先い。 ○唇部滑り気味で胴部へ短く。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○唇部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	610
25-35	長頸壺	11.3	22.2	○頸部は長く口縁部やや外反する。 唇部はよりゆるやかな唇部へ短く 高台ナデ。	○口縁部、唇部、唇部内外面ロクロ ナデ。	精練 胎土	堅緻	淡灰色	103 099 334 327 321
26-36	壺		9.5	○平坦な底部より斜め上方に立ち上 がる口縁部。 ○底部と頸部の唇部に高白を施す。 ○口縁部先い。	○唇部内外面ロクロナデ。 ○唇部へう切りの後ナデ、高台ナデ。	精練 胎土	堅緻	灰白色 外-灰色	066 575 506
26-37	高杯	16.3	9.6	○内面滑する唇部と縁部から低いと この中へハの字状に開く唇部を もつ唇部。 ○口縁部先い。脚部カット別。	○唇部、唇部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	内-黄灰色 外-灰色	197 539 327
26-38	高杯	17.0	10.4	○平坦な底部から内面滑し縁部と 縁部と縁部からゆるくハの字 状に開く唇部。 ○口縁部先い。	○唇部、唇部内外面ロクロナデ。	精練 胎土	堅緻	青灰色	321
26-39	低脚杯	15.8	6.8	○内面滑しながら立ち上がる低い唇部 とハの字状に開く唇部。 ○口縁部厚み気味をもつ。脚部厚み 気味の上のハカット別。	○唇部、唇部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	青灰色	525
26-40	低脚杯	18.0	5.8	○平坦な底部から内面滑し縁部と 縁部とハの字状に開く唇部。 ○口縁部先い。	○唇部、唇部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	青灰色	512 516
26-41	低杯	9.5	5.8	○直立気味に立ち上がる口縁部と ハの字状に開く唇部。 ○口縁部先い。	○口縁部、唇部内外面ロクロナデ。	精練 胎土	堅緻	内-灰色 外-灰色 茶褐色	021 143 154 157
26-42	高杯	10.0	4.3	○平坦な上方に立ち上がるやや高め の口縁部、唇部欠損。 ○口縁部先い。	○口縁部内外面ロクロナデ。	胎土	堅緻	内-灰褐色 外-灰色	506
26-43	瓶	台径 33.5	5.3	○頸部短くハ字状に開く口縁部を もち、台部に「ナ」字の透しを つける。 ○頸部やや肥厚させる。	○口縁部内外面ロクロナデ。	精練 胎土	堅緻	灰色	384
26-44	瓶	台径 32.0	8.9	○頸部短く。台部には(43)と共通。 透しは4ヶ所と思われる。外壁に 縦線で口縁部をつける。胎部は中 空を呈し、底状の溝部を設ける。 ○頸部厚み気味、ふんばる。	○台部内外面ロクロナデ。 ○口縁部ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	427 615

表 8 下坂 2号窯出土土物観察表

探出番号	器種	法量(m)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	高さ						
27-1	蓋 C目	15.7	2.4	○底部やや水平気味。中央に扁平な つまみを取り付ける。 ○縁部は天弁部よりゆるく弧曲した もの縁部先い。	○天弁部内面ロクロナデの後不整ナ デ。外周へう切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	やや軟	内-淡灰色 外-淡灰色 ~灰色	365
27-2	蓋 C目	15.8	1.9	○底部水平気味。 ○縁部は天弁部よりゆるく弧曲した もの縁部先い。	○天弁部内面不整ナデ、外周へう切 りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	296
27-3	蓋 C目	17.0	1.9	○底部やや水平気味。中央に扁平な つまみを取り付ける。 ○縁部は天弁部よりゆるく弧曲した もの縁部先い。	○天弁部内面不整ナデ、外周へう切 りの後ナデ。天弁部にはへう記号 をナ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	136
27-4	蓋 C目	17.1	2.0	○底部やや水平気味。中央に扁平な つまみを取り付ける。 ○縁部は天弁部よりゆるく弧曲した もの縁部先い。	○天弁部内面不整ナデ、外周へう切 りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	293
27-5	蓋 C目	16.0	1.8	○底部やや水平気味。つまみ欠損。 ○縁部は天弁部よりゆるく弧曲した もの縁部先い。	○天弁部内面不整ナデ、外周へう切 りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	217

探窟番号	器種	法量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口徑	高さ						
28-11	杯 B II b	14.6	3.4	○底部は平直で斜め上方に立ち上がる縁部、底部と縁部の断面縁に高台を貼り付ける。 ○口縁部突起気味。 ○口縁部突起気味。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰褐色	590
28-12	杯 B II a	15.1	3.9	○底部は平直で斜め上方に立ち上がる縁部、底部と縁部の断面縁に高台を貼り付ける。 ○口縁部突起気味、縁部丸い。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰褐色	547
28-13	盃 A I b	20.9	2.3	○底部丸縁のある平直。 ○口縁部突起気味に斜め上方に立ち上がる、縁部突起気味。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰色	435
28-14	盃 A II a	15.0	2.4	○底部は平直で斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁部突起気味。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	内-灰白色 外-灰色	439
28-15	盃 A II b	17.2	1.7	○底部平直。 ○口縁部突起気味に斜め上方に立ち上がる、縁部突起気味。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰色	435
28-16	盃	22.5	10.5	○斜めに立ち上がる口縁部、縁部やや外側に厚し角張る。 ○肩厚張る。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面同心円文、外周ケタキ、オキタ。	細砂を含む	硬軟	灰褐色	493 494 495 496 497
28-17	盃	21.7	35.3	○張りがあり斜直、頸部より斜め上方に屈曲する縁部。 ○口縁部突起気味の肉をもち丸く終わる。底部欠損。	○口縁部内外面ナデ。 ○頸部内面同心円文、外周上部オキタ、下部ケタキオキタの後オキタを繋ぐ返す。	細砂を含む	やや軟	灰色	056 555 556 880 886 888
29-18	盃	7.6		○肩部角張る。1条の沈線を残す。	○内外面クロコナデ。	細砂を含む	硬軟	灰白色	162 553 563
29-19	盃	15.1	14.8	○口縁部は内縁で立ち上がり縁部つまみ上げれる。肩部短かくやや張り気味の肩帯から頸部に続く。 ○底部平直。	○口縁部、肩部内外面クロコナデ、頸部内面同心円文、外周へタ切りの後ナデ。 ○底部内面クロコナデ、外周ナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色-灰褐色	268 432 433 434 550 553 560 566 586 588
29-20	盃 (足重)	10.1	15.6	○底部やや角張る。肩、縁部に4ヶ所の穴。口縁部短かくつまみ上げ、肩部は小さな窪みをもつ。肩部中央下位に1条の沈線を残す。 ○底部丸直。	○口縁部、肩部、頸部内外面クロコナデのみ。頸部下位に一部斜めの高台のナデ(脚取付機)。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰色	553

表10 整地面覆土出土遺物観察表

探窟番号	器種	法量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口徑	高さ						
30-1	盃 B II	15.8	3.1	○頸部中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○頸部より縁部に向かって笠形を呈する。縁部で直線し縁部丸い。	○天骨部内面不整ナデ、外周へタケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	甘い	内-灰白色 外-灰褐色	263
30-2	盃 B II	16.5	3.1	○頸部中央に扁平なつまみを貼り付ける。 ○頸部より縁部に向かって笠形を呈する。縁部で直線し縁部丸い。	○天骨部内面不整ナデ、外周へタケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	甘い	内-灰白色 外-灰褐色	262
30-3	盃 C II	16.0	2.0	○頸部中央欠損。 ○縁部は直線し縁部丸い。	○天骨部内面不整ナデ、外周へタケズリ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色	261
30-4	盃 A	14.9	2.0	○底部平直気味。山外側に扁平なつまみを貼り付ける。 ○縁部は直線し縁部丸い。	○天骨部内外面クロコナデ、外周へタケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色	307
30-5	盃 A	16.5	1.5	○頸部やや水平、中央部に扁平なつまみを貼り付ける。 ○縁部は強く傾直し縁部丸い。	○天骨部内面不整ナデ、外周へタケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色	223
30-6	盃 A	14.9	1.6	○底部やや、中央部欠損。 ○縁部で直線し縁部丸い。	○天骨部内面不整ナデ、外周へタケズリの後ナデ。 ○口縁部内外面クロコナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色	612
30-7	杯 A I	13.3	3.6	○平坦な底部より内周気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部突起気味に丸く終わる。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	軟	灰白色	310
30-8	盃 A b	13.4	4.2	○やや平直な底部より内周気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部突起気味。	○口縁部内外面クロコナデ、一部外周へタケズリ後ナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	硬軟	灰色	261
30-9	杯 B I b	18.5	6.6	○底部は平直で縁部との断面縁に高台を貼り付ける。 ○口縁部突起気味に斜め上方に立ち上がり、縁部突起気味に丸い。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰褐色	178 197 248 252
30-10	杯 B I b	19.5	5.7	○底部大きく平直で縁部との断面縁に高台を貼り付ける。 ○口縁部突起気味に斜め上方に立ち上がり、縁部突起気味に丸い。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周へタ切りの後ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰褐色	176 234 262
30-11	杯 B I b	18.5	6.2	○底部平直で縁部との断面縁に高台を貼り付ける。底部中央欠損。 ○口縁部突起気味に斜め上方に立ち上がり、縁部突起気味をもち丸く終わる。	○口縁部内外面クロコナデ。 ○底部内面不整ナデ、外周ナデ。	細砂を含む	やや軟	灰色	173

邦試番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	胎高						
30-12	杯 B I b	19.0	7.1	○底部は平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部外反気味に丸い。	○口縁内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰褐色	178 209
30-13	杯 B I b	19.8	7.3	○底部は平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部外反気味に丸い。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面ヘラ切りの後ナダ、高台ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰褐色	178
30-14	杯 B II b	15.6	3.4	○底部平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部外反気味に丸い。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面ヘラ切りの後ナダ、高台ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	313
30-15	杯 B II c	15.9	4.2	○底部やや平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部外反気味に丸い。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面回転糸切り、高台ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	264
30-16	杯 B II c	15.0	4.0	○底部平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方外反気味に立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面回転糸切り。	細砂を 含む	やや軟	灰白色	295
30-17	杯 B II b	14.0	4.4	○底部やや平坦で縁部との間隙部に高台を貼り付ける。 ○口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部外反気味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○底部内面不整ナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	264
30-18	瓶 A I b	24.5	1.7	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	細砂を 含む	やや軟	灰褐色	247
30-19	壺	20.0	6.0	○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部丸い。 ○口縁部丸い。	○口縁部、体部内外面ロクロナダ。	細砂を 含む	堅硬	灰色	173
30-20	壺	19.5	4.4	○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部丸い。 ○口縁部丸い。	○口縁部、体部内外面ロクロナダ。	細砂を 含む	堅硬	灰色	171

表11 下坂3号窯出土遺物観察表

邦試番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	胎高						
31-1	壺 B I	17.4	1.9	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	砂粒を 含む	軟	灰白色	487
31-2	壺 C II	16.4	1.9	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	298
31-3	壺 C II	18.0	2.3	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ。	細砂を 含む	軟	灰褐色	607
31-4	壺 C II	17.9	1.4	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	細砂を 含む	軟	灰白色-灰褐色	422 408
31-5	瓶 A b	24.1	4.2	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	細砂を 含む	やや軟	青灰色	296
31-6	瓶 A b	14.7	3.9	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	砂粒を 含む	堅硬	緑褐色	483
31-7	瓶 A b	13.6	4.1	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	細砂を 含む	堅硬	灰褐色	298
31-8	瓶 A I c	15.2	4.2	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面回転糸切り。	細砂を 含む	やや軟	灰褐色-緑褐色	451 408
31-9	瓶 A b	12.5	3.5	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面ヘラ切りの後ナダ。	砂粒を 含む	堅硬	灰色	296 313
31-10	杯 B II c	15.0	4.2	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面回転糸切り。	砂粒を 含む	軟	灰白色	483
31-11	杯 B II c	14.9	3.9	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面不整ナダ、外面回転糸切り、高台ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	422 481 467 486
31-12	杯 B II c	16.3	3.7	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面不整ナダ、外面回転糸切り。	細砂を 含む	やや軟	灰色	422
31-13	杯 B II c	15.9	3.4	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面ロクロナダ、外面回転糸切り、高台ナダ。	砂粒を 含む	軟	灰色-灰白色	422 475 472 481
31-14	杯 B II c	15.3	4.4	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面不整ナダ、外面回転糸切り、高台ナダ。	砂粒を 含む	軟	灰白色	422 473
31-15	杯 B II	16.2	3.6	○口縁部丸く平直。 ○口縁部は直出し短かく立ち上がり、端部外反し丸く平直。	○口縁部内外面ロクロナダ。 ○口縁部内外面不整ナダ、外面ヘラ切り、高台ナダ。	砂粒を 含む	やや軟	灰色	417

検出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
31-16	杯 B II b	17.3	3.0	○底部平直で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-灰白色 外-灰白	299
31-17	杯 B II e	15.1	4.4	○底部平直で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切り。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	灰白色	338 422 482 483 488
31-18	杯 B II e	15.9	4.4	○底部平直で屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切り。	細砂を 含む	堅軟	灰色	413 422 432 482 483 488
31-19	杯 B II e	15.6	3.8	○底部中央で盛り上がり差入っている。屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色	420 440
31-20	杯 B II e	14.7	4.1	○底部平直で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-灰色 外-灰白色 灰白	472 481 483
31-21	杯 B I b	20.3	4.6	○底部中央で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅軟	内-地灰色 外-灰色	481
32-22	杯 B II a	14.4	3.9	○底部平直で屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切り。高台ナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色	298
32-23	杯 B II e	16.6	4.3	○底部平直で屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-灰色 外-灰白色	413 468 475 481 488
32-24	杯 B II b	14.6	3.2	○底部平直で屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	灰白色	299
32-25	杯 B II e	14.8	4.0	○底部平直で縁部の屈曲部よりおそく内側に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がる。瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-灰色 外-灰色 灰白色	482
32-26	杯 B II b	16.1	4.0	○底部平直で縁部の屈曲部よりおそく内側に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	甘い	内-灰白色 外-灰色	472
32-27	杯 B II b	14.5	4.0	○底部中央で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	やや軟	灰白色-灰 白色	440
32-28	杯 B II e	15.5	4.1	○底部平直で屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面直転未切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	軟	灰白色	481 488 490
32-29	甗 A I b	18.6	2.2	○底部やや平直。 ○口縁部斜め上方に短かく立ち上がる。瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色	299
32-30	甗 A I b	18.6	1.9	○底部平直。中央部欠損。 ○口縁部斜め上方に短かく立ち上がる。瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅軟	暗灰色	421
32-31	甗 A II b	16.0	2.5	○底部やや丸味をもつ平直。 ○口縁部斜め上方に短かく立ち上がる。瘤部が丸味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色	299
32-32	甗	14.0		○底部上縁部の屈曲部に高台を貼り付ける。底部中央部欠損。 ○口縁部外反し瘤部ナデによる凹線状にくぼんでいる。肩部角ばる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○角部、胴部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色-黄灰 褐色	407 472 473 483 487
32-33	鉢	25.4	5.6	○底部内湾気味。 ○口縁部短かく外反し、瘤部をもつ。	○口縁部、体部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅軟	内-灰白色 外-灰褐色	441
32-34	甗	18.2	5.6	○底部よく「く」の字に屈曲し口縁部で欠損する。瘤部が丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅軟	灰色	489
32-35	甗 割部最大径 9.5	10.9	5.7	○底部平直で高台を貼り付ける。 ○胴部上縁に最大径。胴部より「く」の字に屈曲し外湾気味にのびる。口縁部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外面へつ切りの後ナデ。 ○口縁部下反に凹線状の欠陥が見られる。	細砂を 含む	堅軟	黒褐色	573
32-36	甗 A e	15.2	4.2	○底部中央より内湾気味に立ち上がる。口縁部短かく外反し、瘤部が丸味をもつ。 ○口縁部内面にやや肥厚し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面直転未切り。	細砂を 含む	堅軟	青灰色	576 587

表12 下坂2・3号窯北側盛土出土遺物観察表

検出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
33-1	甗 C II	10.9	2.0	○底部平直気味。中央部につまみを貼り付ける。 ○口縁部ゆるやかに屈曲し、瘤部が丸味をもつ。	○天骨部内面ロクロナデ、外面へつ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅軟	黄灰色	285 286

種別番号	原種	法 尺(㎝)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	通物番号
		口径	高さ						
33-2	蓋 C II	16.8	1.7	○頂部の中水平。中央部につまみを ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し、端部丸く 終わる。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	黄褐色	285
33-3	蓋 A	16.0	2.3	○頂部中央部分欠損。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲したのち丸い。	○天井部下位内面口ロナダの後不 整ナダ、外面口ロナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・黄褐色 外・灰色	415
33-4	蓋 C II	16.2	2.5	○頂部中央部欠損。中央部につまみを 貼り付ける。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し、端部丸 くおさまる。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	黄褐色	447
33-5	蓋 A	16.6	2.5	○頂部中央部欠損。中央部に扁平なつ まみを貼り付ける。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し丸く終わ る。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	黄褐色	285
33-6	蓋 C II	15.7	2.2	○頂部中央部。中央部につまみを 貼り付ける。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し丸い。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	591
33-7	蓋 B II	17.2	2.5	○頂部欠損。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲したのち丸い。	○口縁部内面口ロナダの後不整ナ ダ、外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	216 217 218
33-8	蓋 B II	13.0	2.4	○底面水平。 ○底部より強く隆起する口縁部、端 部内面に肥厚した線をなす。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・灰色 外・黄褐色	548
33-9	蓋 B II	13.4	2.4	○底面水平。 ○底部より強く隆起する口縁部、端 部内面に肥厚した線をなす。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	灰色	558
33-10	蓋 B II	11.4	3.8	○頂部中央につまみを貼り付け る。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し丸い。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰褐色	428
33-11	蓋 C II	8.5	2.6	○頂部中央につまみを貼り付け る。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し丸い。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ、外面口ロナダ。 ○口縁部内外面口ロナダの後不整 ナダ、外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	灰褐色	407
33-12	蓋 B II	6.4	2.1	○頂部水平、中央部分欠損。 ○頂部より強く隆起する口縁部、端 部より丸い。	○口縁部内外面口ロナダ。	精緻な 胎土	堅緻	灰褐色	206
33-13	蓋 C I	23.8	1.7	○底面水平。 ○口縁部域かく内湾する。端部丸い。	○天井部内面口ロナダの後不整ナ ダ、外面へうたずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	黄褐色	445
33-14	蓋 C I	24.8	2.3	○底面水平。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。 ○口縁部ゆるやかな凹曲し丸い。	○天井部内面口ロナダ、外面へう たずりの後ナダ。 ○口縁部内外面口ロナダ。	細砂を 含む	堅緻	黄褐色	416
33-15	杯 A I b	15.0	3.4	○平坦な底面より斜め上方に立ち 上がる縁部。 ○口縁部丸い。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ。	精緻な 胎土	やや軟	内・灰白色 外・黄褐色	279
33-16	杯 A I c	15.4	3.4	○やや平坦な底面から内湾状に立 ち上がる縁部。 ○口縁部域外反し丸く終わる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面圓転 し切り。	細砂を 含む	堅緻	淡灰色	534 535 536
33-17	杯 A	13.0	3.7	○やや平坦な底面より内湾状に立 ち上がる縁部。 ○口縁部域外反し丸く終わる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色～黄 褐色	566
33-18	杯 A	13.4	3.5	○底部平坦で内湾状に立ち上がる 縁部。 ○口縁部域外反し丸く終わる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	灰色 (自然 土質)	596
33-19	杯 B II b	15.0	3.8	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部域外反し丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダの後不整ナダ、 外面へう切りの後ナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	276
33-20	杯 B II b	15.1	3.3	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部内外面口ロナダに立ち上 がる。端部丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・黄褐色 外・淡黄色 ～緑褐色	410 411
33-21	杯 B II a	15.4	4.2	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部域外反し丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	精緻な 胎土	やや軟	灰白色	282
33-22	杯 B II b	15.3	3.9	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部域外反し丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・灰色 外・灰白色 ～灰色	568
33-23	杯 B II b	11.0	4.9	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部域外反し丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	細砂を 含む	堅緻	淡灰色	570 580 590
33-24	杯 B II a	15.2	3.9	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部内外面口ロナダに立ち上 がる。端部丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	562 565
33-25	杯 A I b	13.6	3.2	○平坦な底面から内湾する縁部。 ○口縁部域外反し丸く終わる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・灰色 外・灰色～ 褐色	413
33-26	杯 B II b	15.3	2.9	○底部平坦で縁部との接合部に高台 を貼り付ける。 ○口縁部域外反し丸くおさまる。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ、高台ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	内・黄褐色 外・淡黄色 ～緑褐色	415
34-27	蓋 A II	16.6	2.3	○底面平坦。 ○口縁部域外反し丸く立ち上 がる。端部丸い。	○口縁部内外面口ロナダ。 ○底部内面口ロナダ、外面へう切 りの後ナダ。	精緻な 胎土	堅緻	灰色	415

標記番号	器種	度量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高						
34-28	皿 AⅡb	14.6	2.5	○底部平坦 ○口縁部の上方に短かく立ち上がる、縁部角ばる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面へラ切り後の後ナデ。	練土	堅緻	青灰色	408
34-29	皿 AⅡb	16.2	2.1	○底部平坦。 ○口縁部斜め上方に短かく立ち上がる、縁部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面へラ切りの後ナデ。	練土	堅緻	灰褐色	416
34-30	皿 AⅡb	16.2	2.1	○底部平坦。 ○口縁部斜め上方に短かく立ち上がる、縁部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面へラ切りの後ナデ。	練土	堅緻	灰色	206
34-31	碗	23.0	3.2	○脛足部欠損、平坦な底面から斜めに立ち上がる外縁部をもつ。 ○縁部は外方に厚みを減して終わる。脛足角解と見られる。	○内外面ロクロナデ。	練土	堅緻	灰褐色	410 411 438 549
34-32	壺	30.9	8.8	○口縁部短かく斜めに立ち上がる、器内側にやや肥厚し丸くおさまる。 ○肩部大きく張り出す。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内外面タタキメ。	練土	堅緻	青灰色	410 389
34-33	鉢	29.0	17.0	○底部欠損、体部内湾する。 ○口縁部短かく斜めに立ち上がる、底部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○器部外面に1条の筋を施す。	練土	やや軟	淡赤褐色	423 436
34-34	鉢	30.6	10.0	○腹部短かく外反する口縁部、底部丸い。 ○立たらぬ肩をもつ脚部へ続く。底部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○体部内面不定向へラケズリ、外面タテ方向ハナメ。(土師群の手法で作成したもの)。	砂粒を含む	堅緻	灰色	414
34-35	高杯 杯身	2.8		○やや平坦な杯部、縁部、脚部欠損。	○内外面ロクロナデ。	練土	堅緻	青灰色	596
34-36	高杯 脚部	脚径 13.0	8.7	○丸い柱部から「ハ」の字状に開く脚部。3方透し有り。 ○脚端部湾曲し丸く終わる。	○内外面ロクロナデ。	練土	堅緻	灰色～灰白色	436
35-27	壺	14.2	17.2	○肉立った腹部、口縁部大きく外反し縁部丸い。 ○底部欠損。	○内外面透しのないロクロナデ。	練土	やや軟	淡赤褐色	169 282 286 379 594
35-28	壺	15.4	9.1	○腹部より大きく外反する口縁部。 ○肩部に1条の沈線を通し角ばる。	○口縁部、肩部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	褐色	566
35-39	高脚壺	11.2	19.8	○腹部より外反しながら立ち上がる縁部、底部丸く終わる。 ○やや丸味をおびる肩部より脚部に続く。底部部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ、外面上位ロクロナデ、下位へラケズリの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	青灰色	561 562 587
35-40	壺	最大径 23.4	15.5	○やや丸味をもつ肩部より体部に続く口縁部、底部中央欠損。	○肩部内面透しのある後ロクロナデ。 ○底部内面透しのない後ロクロナデ。	練土	堅緻	灰色～青灰色	099 575
35-41	壺	8.5	7.1	○腹部短かく斜めに立ち上がる口縁部、底部丸い。 ○肩部は張り気味に脚部へ続く。	○口縁部、肩部、脚部内外面ロクロナデ。	練土	堅緻	淡灰褐色	435
35-42	小盃	6.7	5.9	○外反する口縁部、底部丸い。 ○胴部最大径は中位にある。	○口縁部内面ロクロナデ、外縁2半位の透状文を施す。 ○底部外面へラ切りの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	淡灰褐色	282
35-43	小盃	8.4	8.1	○外反する口縁部、底部角ばり気味。 ○底部やや平坦。	○口縁部内面ロクロナデ、外縁2半位を施す透状文。 ○肩部内面透しロクロナデ、底部内面ロクロナデ、外面へラ切り。	細砂を含む	堅緻	灰色	547
35-44	小盃	10.0	4.5	○短かく腹部より強く膨出し横にのびる口縁部、底部上方につまみ上げられ丸くおさまる。 ○器部やや扁平気味。	○口縁部、脚部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面面転角切り。	練土	堅緻	灰色	588 596 598
35-45	壺	11.0	14.4	○腹部短かく直立する口縁部、底部丸くおさまる。 ○丸味をもつ肩部より脚部に続く。底部中央欠損。	○口縁部、脚部内外面ロクロナデ。 ○底部内面一番薄気味の後ロクロナデ。	練土	堅緻	内～灰色 外～灰褐色	514
36-46	横瓶	21.4		○口縁部、底部欠損。	○内面青褐色文、外面赤子文タタキ一部タタキメ。	練土	堅緻	内～淡灰色 外～灰色	437
36-47	壺	21.7	28.7	○腹部短かく斜めに立ち上がる口縁部、肩部やや外方に肥厚し角ばる。 ○肩部で斜より脚部へ続く。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面青褐色文、外面タタキメ。	練土	堅緻	灰色	431
37-46	壺	20.3	33.1	○腹部短かく斜めに立ち上がる口縁部、肩部内面にやや肥厚し面をもつ。 ○脚部球状に張る。底部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面同心四文、外面赤子文タタキ。	砂粒を含む	やや軟	灰色	353 563 564 595
37-48	瓶			○瓶の底部、中央四角の穴を穿ち、周囲に横の孔を4ヶ設ける。	○内外面ナデ。	練土	堅緻	灰色	081
37-50	瓶			○(4)と同様。	○内外面ナデ。	練土	やや軟	淡灰色～黄灰色	449
37-51	鉄製品	全長 16.8	全幅 15.3	○黒錆層を呈する鐵片、刃部は丸い。刃部内側面ツケット状を呈する。					518

表13 下坂2・3号窯南側盛土出土遺物観察表

標記番号	器種	度量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高						
38-1	甕 煎釜	13.6	2.2	○水平気味の縁部。 ○縁部は中央部よりゆるく開曲し、底部丸い。	○中央部内面ロクロナデ、外面へラ切り。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を含む	堅緻	内～灰色 外～淡赤褐色	444

探区番号	器種	法量 (cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高						
38-2	覆A	16.2	1.9	○底部平直。 ○縁部ゆるやかなカーブをもつ、端部で鋭く屈曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	559
38-3	覆A	17.0	1.8	○肩部欠損。 ○縁部ゆるやかなカーブをもつ、端部で鋭く屈曲し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	461
38-4	覆CⅡ	18.8	2.2	○口部や中央部、中央部に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部鋭く鋭く屈曲した丸い。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	淡灰褐色	432
38-5	覆BⅡ	16.6	2.6	○肩部欠損。 ○縁部ゆるやかなカーブをもつ、端部で鋭く屈曲し丸い。	○口縁部内面ロクロナデ、唇ロクロナデの後不整ナデ、外側ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	228 229
38-6	胸A b	13.0	2.9	○平坦な底部より内湾気味に立ち上がる。 ○口縁部内側に肥厚し丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰色	590
38-7	杯AⅠc	12.6	4.0	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面回転し切り。	細砂を含む	堅緻	灰褐色	228
38-8	杯AⅠb	14.3	3.3	○平坦な底部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ナデ。	細砂を含む	びい	灰白色	609
38-9	杯C b	13.9	5.0	○やや平坦な底部より内湾する縁部。 ○口縁部鋭く終わる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰褐色	444
38-10	胸C a	14.1	4.3	○平坦な底部より内湾する縁部。 ○口縁部鋭く終わる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリ。	砂粒を含む	軟	淡灰褐色	216 219
38-11	杯AⅠc	13.2	4.2	○平坦な底部より内湾する縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側回転し切り。	砂粒を含む	軟	淡灰褐色	216
38-12	杯BⅡa	15.0	3.5	○底部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	緑灰色	445
38-13	杯BⅡa	15.2	4.2	○縁部平坦で縁部より内湾する高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	細砂を含む	中々軟	内・緑褐色 外・灰褐色	121
38-14	杯BⅡb	14.4	4.4	○底部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	461
38-15	杯BⅡb	15.4	5.0	○縁部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	細砂を含む	堅緻	灰褐色	378
38-16	杯BⅡa	14.8	4.3	○底部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	細砂を含む	軟	暗褐色	216
38-17	杯BⅡa	14.6	4.1	○縁部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ、高台ナデ。	砂粒を含む	中々軟	淡灰褐色	460
38-18	杯BⅡc	15.4	4.3	○底部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側回転し切り、高台ナデ。	細砂を含む	中々軟	緑灰褐色	461
38-19	杯BⅡa	14.8	3.5	○縁部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ヘラツズリ、高台ナデ。	砂粒を含む	堅緻	淡紫灰色	218 219
38-20	蓋AⅠb	18.2	1.5	○底面平坦。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	砂粒を含む	堅緻	淡灰色	447
38-21	杯AⅡb	16.4	2.2	○底部平坦。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰褐色	445
38-22	皿AⅡb	16.6	2.1	○底部平坦。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外側ヘラツズリの後ナデ。	砂粒を含む	堅緻	灰褐色	445
38-23	蓋	7.0	15.7	○口縁部やや直立気味、端部丸い。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部、胴部内外面ロクロナデ。	精緻な胎土	堅緻	淡灰褐色	443
38-24	蓋	12.5	4.5	○口縁部外反し丸い。 ○口縁部外側に肥厚し小さい蓋をもつ。 ○蓋部鋭くゆるやかに胴部へ続く。	○口縁部、胴部内外面ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	灰色	268 461
38-25	蓋	8.0	4.3	○口縁部直立気味に立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内面ロクロナデ、外側波状文をもつ。	細砂を含む	堅緻	灰色	123
38-26	壺	14.4	9.5	○口縁部外反し、唇部左右に肥厚し蓋をもつ。 ○底部平直。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○胴部内面内面ロクロナデ、外側ロクロナデ。	細砂を含む	堅緻	暗灰褐色	569 579

表14 整地面及び盛土出土遺物観察表

探区番号	器種	法量 (cm)		形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高						
40-1	蓋CⅡ	18.9	3.8	○中や水平気味な唇部、中央部に扁平なつまみを貼り付ける。 ○口縁部外反し丸い。 ○口縁部外側に鋭く屈曲し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデの後不整ナデ、外側回転し切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を含む	堅緻	内・灰白色 外・灰色	398 611

検出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
40-2	蓋 B I	17.9	2.8	○底部中央欠損。 ○縁部天弁部よりゆるやかなカーブをもつ。肩部で強く屈曲し丸い。	○天弁部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	614
40-3	蓋 C II	15.4	1.9	○底部中央欠損。 ○縁部天弁部よりゆるやかなカーブをもつ。肩部で強く屈曲し丸い。	○天弁部内面ロクロナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	613 613
40-4	蓋 B II	15.0	2.0	○底部欠損。 ○口縁部から強く屈曲したのち縁部尖り丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・緑灰色 外・灰色	247 250
40-5	蓋 B I	19.5	2.6	○底部中央欠損。 ○口縁部は天弁部より強く屈曲し外方に際。肩部鋭角になる。	○天弁部内面不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	205
40-6	蓋 B II	15.3	2.3	○底部欠損。 ○口縁部は天弁部より強く屈曲する肩部内に鋭角し丸くなる。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・明青灰色 外・灰色	261
40-7	蓋 B II	15.2	2.6	○底部欠損。 ○口縁部は天弁部より強く屈曲する肩部内に鋭角し丸くなる。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	301
40-8	杯 A I b	13.6	4.8	○やや平坦な底部より鋭めに立ち上がる縁部。 ○口縁部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・灰白色 外・灰色	612
40-9	杯 B II a	16.6	4.2	○底部のやや平坦な縁部との屈曲部に唇状を盛り付ける。 ○口縁部の上の方に立ち上がる。肩部は鋭角し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	613
40-10	杯 B I a	19.5	6.7	○底部のやや平坦な縁部との屈曲部に高台を盛り付ける。 ○口縁部の上の方に立ち上がる。肩部は外反気味に丸くなる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・黄灰色 外・緑灰色	164 255
40-11	皿 C I a	20.1	4.4	○底部にゆるやかなカーブの丸味をもつ。 ○縁部は内湾気味に立ち上がる。肩部は外方に丸くなり上がる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後直日状気味。	砂粒を 含む	甘い	灰白色	504
40-12	皿 A II b	16.6	3.5	○平坦な底部より鋭めに立ち上がる縁部。 ○口縁部丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	甘い	灰色	405
40-13	皿 A II b	14.7	2.8	○やや平坦な底部より外反気味に短く立ち上がる。 ○口縁部丸くなる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	301
40-14	皿 A II c	13.0	2.0	○底部平坦。中央部欠損。 ○口縁部内湾気味に短く立ち上がり。肩部外反気味に丸くなる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面不整ナデ、外蓋直日状気味。	焼成土 胎土	やや軟	灰色	220
40-15	蓋	7.7	5.6	○やや平坦な底部より口縁部に向い丸味をもつ。 ○底部最大径は7.5cmにあり、底部は平坦。全体に扁平。	○口縁部、胴部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	やや軟	灰白色	015 143 154 593
40-16	蓋	14.0	27.3	○やや黄味に立ち上がる口縁部、肩部は鋭角。 ○胴部は初期。底部欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○胴部内面に土質薄皮文の後ナデ、下位斜角状に平行文タテキ。下位斜角状に平行文タテキ。	砂粒を 含む	甘い	灰色	063 526 530
40-17	鉢	34.5	7.9	○底部より外反する鋭い口縁部、底部内湾し丸い。	○口縁部、胴部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	394

表15 下坂4号窯出土遺物観察表

検出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
41-1	蓋 B II	15.8	1.7	○底部欠損。 ○ゆるやかなカーブをもつ口縁部、肩部内湾にかえりをもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	灰色	627
41-2	蓋 B II	18.9	1.5	○底部欠損。 ○ゆるやかなカーブをもつ口縁部、肩部内湾にかえりをもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	軟	灰白色	598
41-3	蓋 B II	17.4	2.4	○底部欠損。 ○ゆるやかなカーブをもつ口縁部、肩部内湾にかえりをもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	焼成土 胎土	甘い	灰白色	599
41-4	蓋 B II	18.0	2.6	○底部欠損。 ○ゆるやかなカーブをもつ口縁部、肩部内湾にかえりをもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	焼成土 胎土	やや軟	灰白色	589
41-5	蓋 B II	15.7	2.0	○底部よりゆるやかなカーブをもつ口縁部。 ○口縁部強く屈曲し丸味をもつ。	○天弁部内面ロクロナデの襷不整ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・灰オリ 外・緑灰色	634
41-6	蓋 B II	15.8	3.1	○底部欠損。 ○口縁部は天弁部にかけて歪形を呈する。肩部鋭角し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・灰オリ 外・黄灰色	626
41-7	蓋 B II	18.6	1.9	○底部中央に扁平な高台を盛り付ける。肩部より縁部に向かって歪形を呈する。 ○口縁部強く屈曲し丸味をもつ。	○天弁部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・灰色 外・緑灰色	571 582
41-8	蓋 B I	17.4	2.2	○底部中央に扁平な高台を盛り付ける。肩部より縁部に向かって歪形を呈する。 ○口縁部強く屈曲し丸味をもつ。	○口縁部内外面ロクロナデ。	焼成土 胎土	堅緻	灰色	596
41-9	蓋 B II	15.6	2.9	○底部中央に扁平な高台を盛り付ける。肩部より縁部に向かって歪形を呈する。 ○口縁部強く屈曲し丸味をもつ。	○天弁部内面ロクロナデの襷不整ナデ、外蓋ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	砂粒を 含む	堅緻	内・灰色 外・灰色 灰白色	635

標記番号	品種	法 量 (mm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	濃 薄 番 号
41-10	蓋 B II	14.8	3.2	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	精緻な胎土	灰色	604 584
41-11	蓋 B II	15.2	2.9	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○天骨部内外面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	602 605
41-12	蓋 B II	15.9	1.9	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。端部強く屈曲したのち裏面丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内面ロクロナガ。外底よりの沈没を呈する。	精緻な胎土	内・灰色 外・暗灰色	602 606
41-13	蓋 B II	18.6	1.9	○頂部中央、中央部欠損。 ○口縁部ゆるやかなカーブをもつ。端部強く屈曲したのち裏面丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	内・灰色 外・暗灰色	571 582
41-14	蓋 B II	15.4	2.0	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	暗灰色	582
41-15	蓋 A	15.3	2.4	○口縁部より口縁部にかけてゆるやかなカーブをもつ。端部強く屈曲したのち裏面丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	605
41-16	蓋 A	15.6	1.6	○水平な頂部から外縁部にかけて凹形を呈する。端部強く屈曲し丸く終わる。 ○つまみ部欠損。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	599
41-17	蓋 B II	16.3	2.0	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	582
41-18	蓋 B II	15.7	2.6	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。端部強く屈曲し丸く終わる。	○天骨部内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。 ○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	内・灰白色 外・灰色	605
41-19	蓋 B II	15.2	2.0	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	571
41-20	蓋 A	15.9	2.4	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部強く屈曲し丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。	細砂を含む	灰色	576
41-21	杯 C a	12.0	3.6	○やや平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。	細砂を含む	青灰色	575 576
41-22	杯 A b	13.8	3.7	○平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。	細砂を含む	灰色	600
41-23	杯 A	12.6	3.5	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。	精緻な胎土	暗灰色	582
41-24	杯 A b	13.2	3.4	○平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。	細砂を含む	青灰色	598
41-25	杯 A b	13.6	4.2	○やや平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。	精緻な胎土	灰色	634
41-26	杯 C b	13.7	3.4	○やや平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。	細砂を含む	暗灰色	239 593 628
41-27	杯 A b	13.5	3.8	○平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。	精緻な胎土	暗灰色	589
41-28	杯 A b	12.2	4.3	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。	細砂を含む	紫色	565 589
41-29	杯 B II a	7.0	3.2	○平坦な底面より内湾する縁部。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。	精緻な胎土	青灰色	603
41-30	杯 B II b	15.0	4.2	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。	精緻な胎土	灰白色	635
41-31	杯 B II b	15.8	4.6	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。高台ナゲ。	細砂を含む	青灰色	573
41-32	杯 B II b	15.0	3.7	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガ。外底へラケツリの手ナゲ。高台ナゲ。	細砂を含む	暗灰色	532
41-33	杯 B II b	14.6	3.7	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。高台ナゲ。	精緻な胎土	灰色	583
41-34	杯 B II b	14.6	3.5	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。高台ナゲ。	細砂を含む	内・灰色 外・青灰色	598 599 603
41-35	杯 B II a	14.8	3.8	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付ける。頂部より縁部に向かつて凹形を呈する。 ○口縁部縁部直立気味に立ち上がり丸く終わる。	○口縁部内外面ロクロナガ。 ○底面内面ロクロナガの残不整ナゲ。外底へラケツリの手ナゲ。高台ナゲ。	細砂を含む	青灰色	584

標図番号	器種	法 量(m)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
42-36	杯 B Ⅲ b	15.8	3.5	○底面は平坦で唇部に高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がる。端部丸くおさめる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	内・灰白色 外・灰色一 黄灰色	587
42-27	杯 B Ⅲ b	13.8	4.3	○底面は平坦で唇部との接合部に高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰白色一暗 灰色	604 605
42-38	杯 B Ⅲ b	13.8	3.8	○底面平坦で唇部との接合部に高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰白色一暗 灰色	603
42-39	杯 B Ⅲ b	13.4	3.2	○底面平坦で唇部との接合部に高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	内・暗灰色 外・灰白色	584 604
42-40	杯 B Ⅲ b	13.0	3.8	○底面と唇部との接合部に三角高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸い。底面欠損。	○口縁部内外面ロクロナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰褐色	599
42-41	皿 A Ⅲ b	16.0	2.3	○平坦な底面より斜めに短く立ち上がる。 ○口縁部端部より先味に終わる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	内・灰白色 外・灰白色一 灰白色	583
42-42	椀 (口縁部)	12.3	5.5	○口縁部の中や外反し先味に立ち上がる。 ○端部やや内反り先味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面同心円文、外面タタキ。	細砂を 含む	堅緻	淡黄灰色	585
42-43	高脚盃 (底面)	10.5	18.7	○底面外反先味。口縁部欠損。 ○底面外反り。底面に高台を築り付ける。	○底面内外面ロクロナデ。 ○底面外面ヘラ切りの後ナデ、底部外反不整ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	587
42-44	盃	12.0	12.2	○底面短く斜めに立ち上がる唇部。口縁部丸い。 ○なで付を並する前後へ続く。	○口縁部、胴部内外面ロクロナデ。	精砂を 胎土	堅緻	内・黄灰色 外・灰白色	603
42-45	平瓶	□□	□□	○唇部破片。	○内面ロクロナデ、外面に1本の沈線を通す。	精砂を 胎土	堅緻	灰色	266
42-46	盃 (口縁)	7.2	5.2	○外反する細く小さな口縁部。端部丸くおさめる。	○口縁部内外面ロクロナデ。	精砂を 胎土	堅緻	黄灰色	604
42-47	盃 (口縁)	11.0	3.1	○中央を直立先味に立ち上がる口縁部。端部丸くおさめる。	○口縁部内外面ロクロナデ。	精砂を 含む	堅緻	灰褐色	604
43-48	壺	50.0	10.1	○大きく外反する口縁部。底部外面に内段より内側にやや肥厚し差をもつ。	○口縁部半分位下で、内面ココ、不整な内面ロクロナデ、外面ナデ。胴部内面同心円文。	精砂を 含む	堅緻	灰色	574 590

表16 下坂第2土坑出土遺物観察表

標図番号	器種	法 量(m)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
44-1	盃 C Ⅲ	15.1	1.5	○頂部やや水平気味。中央部に扁平なつまみ部を施す。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸くおさめる。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色一暗色	313
44-2	盃 C Ⅲ	16.6	2.0	○頂部水平気味。つまみ部欠損。 ○口縁部ゆるやかに傾斜し、端部丸くおさめる。	○天井部内面ロクロナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	457
44-3	盃 C Ⅲ	16.6	2.4	○頂部水平気味。つまみ部欠損。 ○口縁部ゆるやかにカーブをもつ。端部丸くおさめる。	○天井部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	やや軟	灰色	470
44-4	瓶 A b	12.9	3.7	○平坦な底面より内湾する唇部。 ○口縁部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後不整ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰褐色	453
44-5	杯 B Ⅲ a	13.6	4.1	○底面平坦で唇部との接合部に三角高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	内・黄灰色 外・灰白色	236
44-6	杯 B Ⅲ b	13.8	3.2	○底面平坦で唇部との接合部に高台を築り付ける。 ○口縁部斜め上方に立ち上がり、端部丸くおさめる。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	392 396 457
44-7	皿 A Ⅲ b	16.2	2.5	○平坦な底面から斜めに立ち上がる。 ○口縁部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの後不整ナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	灰褐色	138
44-8	鉢 B Ⅲ	30.4	6.9	○内面気味に立ち上がる口縁部。 ○口縁部端部外反り。	○口縁部内面ロクロナデ、一部ヘラ切りの後ナデ、外面ロクロナデ。	細砂を 含む	やや軟	内・灰白色 外・灰白色	160
44-9	覆鉢 (底部)	8.6	8.6	○底面の底面からほぼ直立先味に立ち上がり唇部へ続く。口縁部欠損。	○内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	暗褐色	186
44-10	盃	19.9	4.4	○底に立ち上がる口縁部。端部面をも角ばり先味。 ○唇部傾り先味。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面黄褐色文、外面タタキ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	302
44-11	高脚盃	11.0	19.2	○底面長く大きく外反する口縁部。端部丸くおさめる。	○口縁部、胴部、頸部内外面ロクロナデ。 ○底部外面ヘラ切りの後ナデ。	精砂を 含む	軟	淡黄褐色	455
44-12	壺	10.4 (底面径)	5.3	○口縁部欠損。 ○底部やや平坦。胴部最大径上位にある。	○胴部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ、外面ヘラ切りの後ナデ。	精砂を 含む	堅緻	淡灰色	297

表17 下坂第3・4土坑出土遺物観察表

種別番号	器種	径 (cm)	高さ (cm)	形状の特徵	手法の特徵	胎土	顔色	色調	遺物番号
45-1	蓋B II	16.1	2.7	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	240 245
45-2	蓋A	16.6	2.4	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	黄灰色	469 546
45-3	蓋B II	16.5	2.7	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	307 241
45-4	蓋A	15.6	2.3	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	225
45-5	蓋A	18.7	2.9	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-淡褐色 外-淡灰色	534
45-6	蓋A	16.8	1.3	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部は外反より蓋形を呈する。肩部強く反曲し丸い。	○天井部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	内-淡灰色 外-灰色	546
45-7	蓋	5.3	1.7	○頂部中央部に、輪状つまみをつける。	○ロクロナデにより仕上げ。 ○肩部内面ロクロナデの残不整ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	534
45-8	碗A c	14.4	4.5	○平口で肩部より内面気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	淡灰褐色	540
45-9	碗A c	14.7	4.1	○平口で肩部より内面気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰褐色	555
45-10	杯A c	13.5	3.4	○平口で肩部よりやや内面気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰褐色	542
45-11	碗A b	14.4	3.7	○平口で肩部より内面気味に立ち上がる縁部。 ○口縁部外反し丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰褐色	546
45-12	杯A I b	15.0	3.6	○平口で肩部より斜め上方に外反する縁部。 ○口縁部外丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	軟	淡灰色	223
45-13	碗A b	15.3	3.2	○平口で肩部より斜め上方に立ち上がる縁部。 ○口縁部外丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外反ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	305
45-14	杯B II b	15.4	3.5	○肩部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	307 310
45-15	杯B II c	15.7	4.2	○肩部平直で縁部との屈曲部に二角高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	軟	淡灰褐色	334 544
45-16	杯B II b	14.5	3.6	○肩部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	淡灰色	334 544
45-17	蓋A II b	16.5	2.2	○頂部中央より外反し短かく立ち上がる口縁部。 ○口縁部外丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	307
45-18	杯B II b	15.0	4.2	○底部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。高台ナデ。	細砂を 含む	堅緻	淡褐色	540
45-19	杯B II b	14.5	4.4	○肩部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	406
45-20	杯B II b	15.1	3.6	○肩部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	軟	淡灰褐色	540
45-21	蓋C II	16.3	1.7	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部より強く反曲し、肩部丸い。	○天井部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	554
45-22	蓋A	17.6	1.8	○頂部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○ゆるやかな縁部より強く反曲し、肩部外反し丸い。	○天井部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。 ○口縁部内外面ロクロナデ。	細砂を 含む	やや軟	内-淡褐色 外-灰色	504
45-23	杯B II a	16.1	5.4	○肩部平直で縁部との屈曲部に高台を起り付ける。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○底部内面ロクロナデの残不整ナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	554
46-24	雙	19.8	8.0	○口縁部中央より外反し、肩部丸い。 ○肩部平直。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデ。外反ヘタ切りの後ナデ。	細砂を 含む	堅緻	内-赤褐色 外-黄褐色	541
46-25	横瓶	12.0	6.9	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデ。外反ナデナリ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	543 611 613
46-26	蓋	12.2	7.0	○口縁部中央に扁平なつまみを起り付く。 ○口縁部外反し丸い。肩部丸い。	○口縁部、肩部内外面ロクロナデ。 ○肩部内面ロクロナデ。	細砂を 含む	堅緻	灰色	546

採出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
46-27	甕	12.0	17.4	○口縁部斜めに上方に立ち上がり、 端部丸い。 ○唇部張り気味の断面へ続く。	○口縁部、肩部、胴部内外面クロコナダ。	砂粒を 含む	堅緻	内-灰色 外-褐色	541 544 591
46-28	甕	□□	6.8	○胴部の最大径中位にある。 ○口縁部短。短唇欠損。	○内外面クロコナダ。	細砂を 含む	やや軟	淡灰色	243
46-29	甕	20.0	5.4	○口縁部外反り、端部を左右に肥厚し 直をもつ。 ○肩部張り気味。	○口縁部内外面クロコナダ。 ○肩部内面ナダ、外面チタキ目。	砂粒を 含む	軟	内-淡褐色 外-褐色	554
46-30	甕	15.6	4.3	○唇部平直。唇の口縁部上面を覆って 転したものである。平坦な地面 を洗い出す。外反りは大なり気 味。	○唇部平直。表面はクロコナダ。 ○唇部平直。表面はヘラケツリの後 反りナダを施す。	細砂を 含む	甘い	灰白色	244
46-31	甕	14.5	17.3	○口縁部大きく外反りする。端部上 方につまみ上げ丸い。 ○唇部内張り。底部欠損。	○口縁部、肩部、胴部内外面クロコ ナダ。	砂粒を 含む	堅緻	内-淡灰色 外-灰色	242

表18 掘立柱建物跡、表採、試掘トレンチ出土遺物観察表

採出番号	器種	法 量 (cm)		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
		口径	器高						
47-1	甕 CⅡ	13.6	2.1	○断面水平気味。中央部に定規形つ まみを取り付ける。 ○口縁部短ゆかりに基曲し、端部 丸い。	○天井部内面不整ナダ、外面回転未 切りナダ。 ○口縁部内外面クロコナダ。	精練な 胎土	堅緻	内-灰色 外-灰白色	349
47-2	甕 CⅡ	13.8	2.1	○断面水平気味。中央部に定規形つ まみを取り付ける。 ○口縁部短ゆかりに基曲し、端部 丸い。	○天井部内面不整ナダ、外面回転未 切り。 ○口縁部内外面クロコナダ。	精練な 胎土	軟	灰白色	192
47-3	鉢 BⅡc	13.6	3.5	○断面平直で縁部との断面部に高台 を取り付ける。 ○口縁部斜めに上方に立ち上がり、端 部張り気味。	○口縁部内外面クロコナダ。 ○断面内面不整ナダ、外面回転未切 りナダ。高台ナダ。	精練な 胎土	やや軟	灰白色	192
47-4	鉢 BⅡc	14.8	5.0	○断面平直で縁部との断面部に高台 を取り付ける。 ○口縁部内外面クロコナダ。	○口縁部内外面クロコナダ。 ○断面内面不整ナダ、外面回転未切 りナダ。高台ナダ。	精練な 胎土	やや軟	内-灰色 外-淡灰色	183 190
47-5	甕	29.3	8.7	○断面平直で縁部との断面部に高台 を取り付ける。 ○口縁部内外面クロコナダ。	○口縁部内外面クロコナダ。 ○唇部内面クロコナダの横一部ナキ メ。外面クロコナダ。	砂粒を 含む	堅緻	赤褐色-暗 赤褐色	059
47-6	甕	20.4	3.8	○口縁部外反り気味。端部丸い。	○口縁部内外面横ナダ。(土師器)	精練な 胎土	やや軟	暗褐色	460
47-7	甕	15.2	4.2	○唇部平直で縁部との断面部に高台 を取り付ける。 ○口縁部内外面横ナダ。	○口縁部内外面横ナダ。(土師器)	精練な 胎土	やや軟	淡褐色	344
47-8	甕	10.8	10.2	○口縁部短く斜めに立ち上がる。 端部丸い。 ○断面丸部。	○口縁部内外面横ナダ。 ○唇部内面有方向ヘラケツリ、外 面了具による深いハケツメ。断面内 面片々気味の横ナダ。	砂粒を 含む	良好	淡茶褐色	093

表19 下坂窯跡群出土瓦観察表

採出番号	器種	出土地点 (構築名)	形 態 の 特 徴	分類	手 法 の 特 徴	胎土	焼成	色 調	遺物番号
51-1	平瓦	4号窯	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	精練な 胎土	堅緻	緑灰色	598
51-2	平瓦	1号窯灰床	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	精練な 胎土	堅緻	灰色	526
51-3	平瓦	2号窯北側 基土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	軟	内-淡褐色 外-淡茶褐 色	570 573
51-4	平瓦	4号窯	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	596
51-5	平瓦	1号窯灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	126
51-6	平瓦	1号窯北側 灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	125
51-7	平瓦	1号窯北側 灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	327
52-8	平瓦	1号窯灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	500
52-9	平瓦	1号窯灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	620
52-10	瓦	1号窯北側	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	210
52-11	瓦	1号窯北側 灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	110
52-12	瓦	1号窯灰土	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	427
52-13	瓦	C地正南側 表採	○横巻作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	砂粒を 含む	堅緻	暗灰色	587

神田番号	部材	出土地点 (遺跡名)	形 態 の 特 徴	分類	手 法 の 特 徴	胎土	施 成	色 調	透物番号
52-14	瓦	4号溝	○横脊作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	緑灰色	592
52-15	瓦	1号溝灰層	○横脊作りによる。	A類	○凸面格子目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	緑灰色	502 592 624
53-16	瓦	1号溝北側灰層	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	緑灰褐色	110
53-17	瓦	1号溝灰層	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-灰褐色 外-緑灰色	580
53-18	瓦	3号溝北側盛土	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	軟	暗褐色	570 573
53-19	瓦	2号溝北側盛土	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-灰褐色 外-灰色	149
53-20	瓦	4号溝	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	緑灰色	606
53-21	瓦	1号溝北側盛土	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-灰褐色 外-緑灰色	112
53-22	瓦	3号溝北側盛土	○横脊作りによる。	B類	○凸面ナデ、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	青灰色	564
53-23	瓦	3号溝北側盛土	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	緑灰色	565
53-24	瓦	3号溝北側盛土	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-灰褐色 外-緑灰色 一層色	149
54-25	溝切り瓦	3号溝盛土	○横脊作りによる、薄子。 ○溝切り瓦。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	灰色	133
54-26	平瓦	1号溝北側灰層	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	灰色	628
54-27	平瓦	4号溝	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	精緻な胎土	堅緻	黄灰色	598
54-28	平瓦	2号溝北側盛土	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	灰色	157
54-29	平瓦	第3土坑	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	中々軟	内-青灰色 外-灰白色	479
54-30	平瓦	1号溝北側灰層	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	灰色	154
54-31	平瓦	1号溝盛土	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-灰白色 外-青灰色	141
54-32	平瓦	1号溝灰層	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	中々軟	内-灰褐色 外-乳白色	102
54-33	平瓦	1号溝灰層	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	砂粒を含む	堅緻	青灰色	692
54-34	平瓦	1号溝盛土	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	砂粒を含む	堅緻	黄灰色	235
54-35	平瓦	1号溝北側灰層	○横脊作りによる。	C類	○凸面純目、凹面布目。	砂粒を含む	軟	黄褐色	154
54-36	溝切り瓦	1号溝灰層	○横脊作りによる。 ○溝切り瓦。	C類	○凸面純目、凹面布目。	細砂を含む	堅緻	内-青灰色 外-灰褐色	163

圖 版

(遺 構 編)



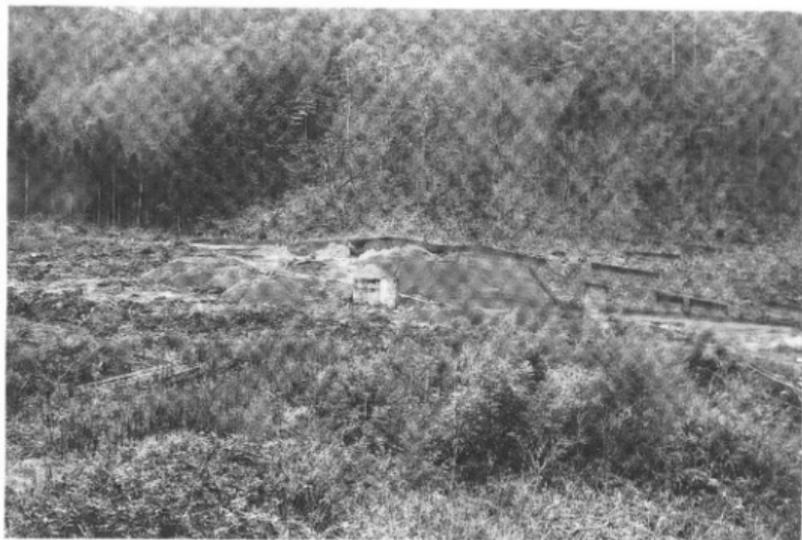
〔1〕下坂窯跡群遠景



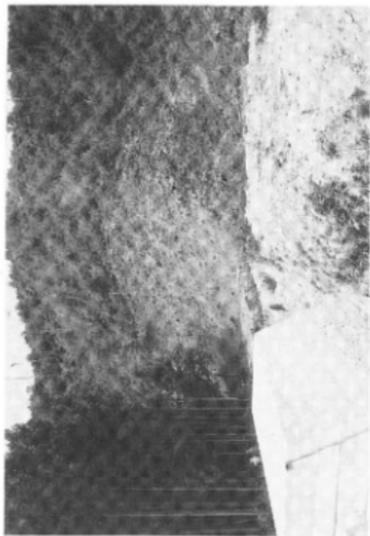
〔2〕下坂窯跡群遠景



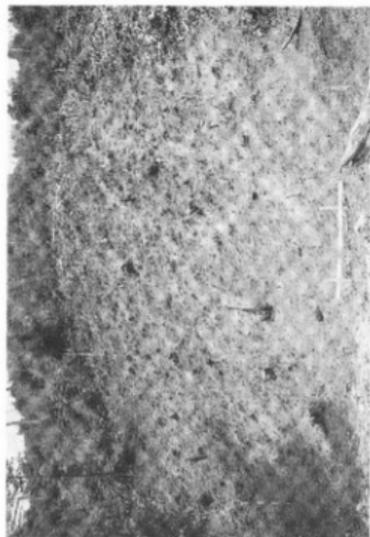
〔1〕下坂窯跡群調査前全景（東より）



〔2〕下坂窯跡群調査後全景（東より）



〔1〕下坂東地区 OR-6 遠景 (西より)



〔2〕下坂東地区 OR-6 近景 (西より)



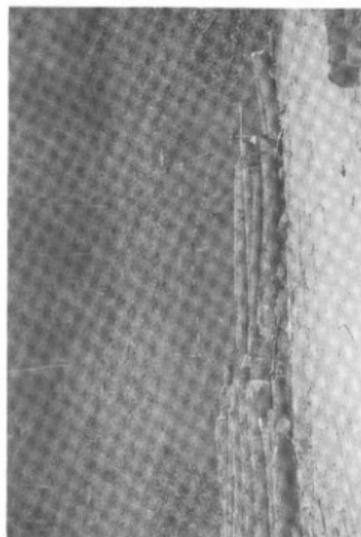
〔3〕下坂東地区 OR-6 トレンチ状況 (西より)



〔4〕下坂東地区 OR-7 トレンチ設定状況 (西より)



〔1〕下坂西地区 OR-3 近景 (東より)



〔2〕下坂西地区 OR-3 トレンチ設定状況 (東より)



〔3〕下坂西地区 OR-4 トレンチ状況 (南より)



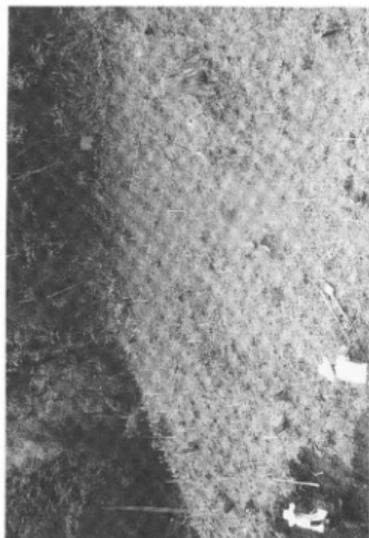
〔4〕下坂西地区 OR-5 トレンチ状況 (北より)



〔1〕 OR-2、第7トレンチ設定状況（南東より）



〔2〕 OR-2、第8トレンチ設定状況（北東より）



〔3〕 OR-2、第9トレンチ設定状況（北東より）



〔4〕 OR-2調査風景



〔1〕 林道崖面状况 (H地区、第3土坑)



〔2〕 林道崖面状况 (G地区南端)



〔3〕 林道崖面状况 (G地区、4号窑灰面)



〔4〕 林道崖面状况 (G地区)



〔1〕 林道崖面状况 (G地区、1号采集原) · 1



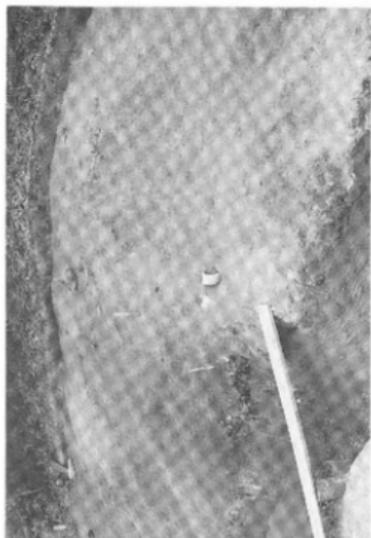
〔2〕 林道崖面状况 (G地区、1号采集原) · 2



〔3〕 林道崖面状况 (G地区、1号采集原) · 3



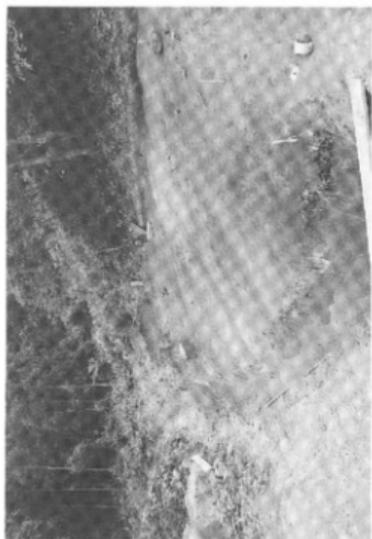
〔4〕 林道崖面状况 (G地区、1号采集原) · 4



〔2〕 G 地区 2 号窑附近表土除去状况



〔4〕 F 地区南側表土除去状况



〔1〕 G 地区南側表土除去状况



〔3〕 G 地区 1 号窑附近表土除去状况



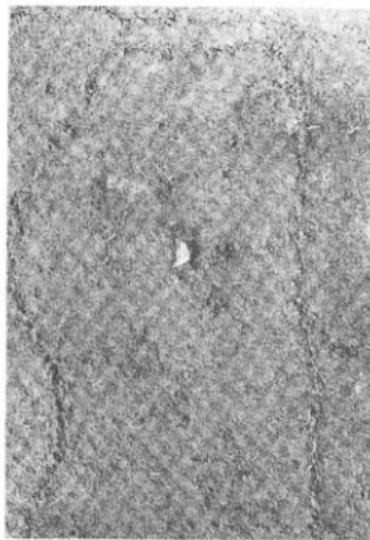
〔1〕D地区森林遗构远景



〔2〕D地区森林遗构露呈状况



〔3〕D地区森林遗构断面



〔4〕D地区森林遗构出土状况



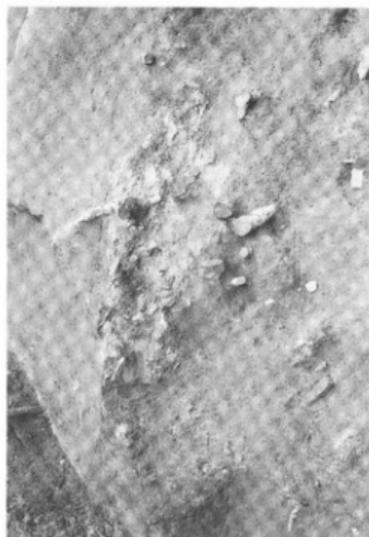
〔1〕下坂1号窯窯体検出状況（西より）



〔2〕下坂1号窯窯体検出状況（東より）



〔1〕下坂1号窯壁遺存状況（北より）



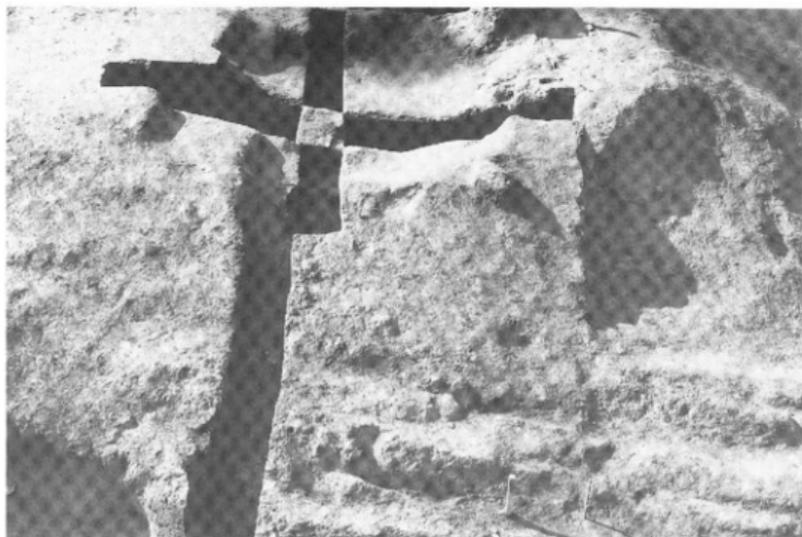
〔2〕下坂1号窯壁遺存状況（南より）



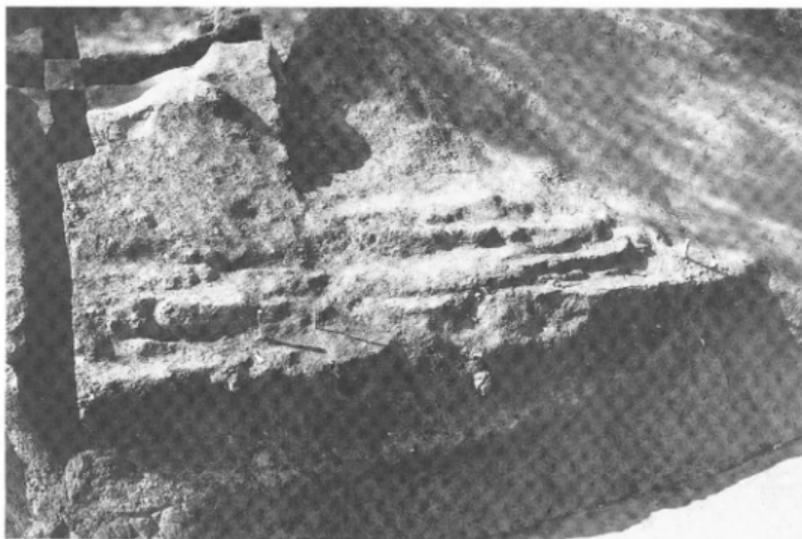
〔3〕下坂1号窯体床面遺存状況（東より）



〔4〕下坂1号窯遺物出土状況（北より）



〔1〕下坂1号窯階段状遺構検出状況（東より）



〔2〕下坂1号窯階段状遺構、道状遺構検出状況（東より）



〔1〕 F 地区調査前全景 (南東より)



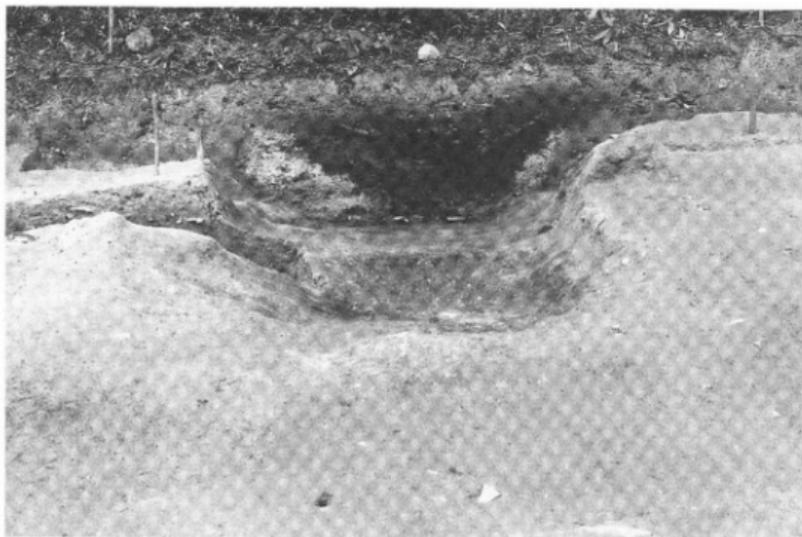
〔2〕 F 地区調査後全景 (南東より)



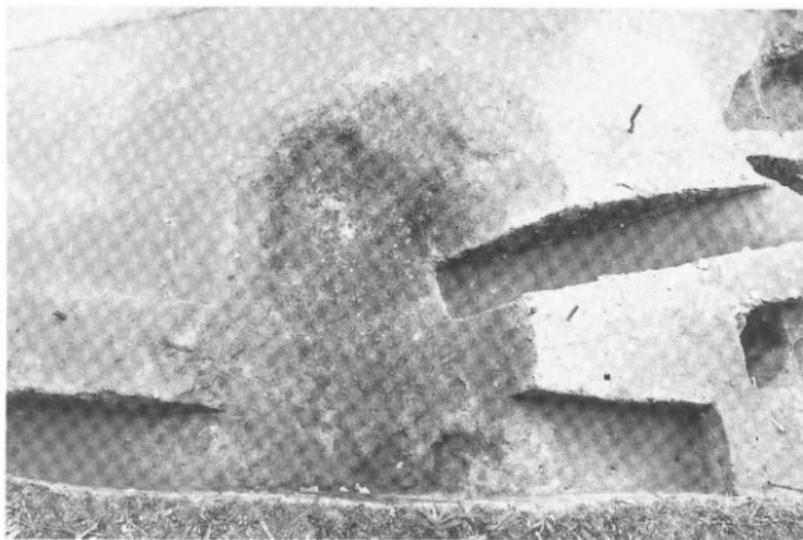
〔3〕 F 地区、階段遺構検出状況 (東より)



〔4〕 F 地区、階段遺構検出状況



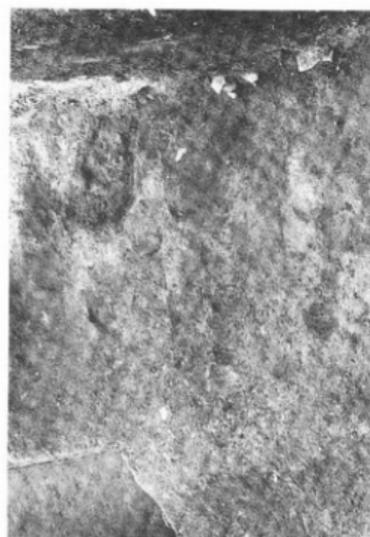
〔1〕下坂2号窯窯体検出状況（東より）



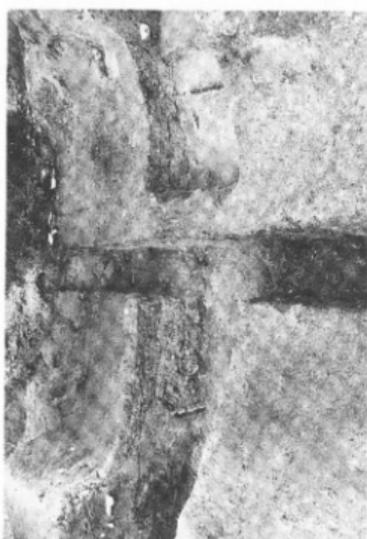
〔2〕下坂2号窯窯体検出状況（西より）



〔1〕 下坂2号窯体床面遺存状況（東より）



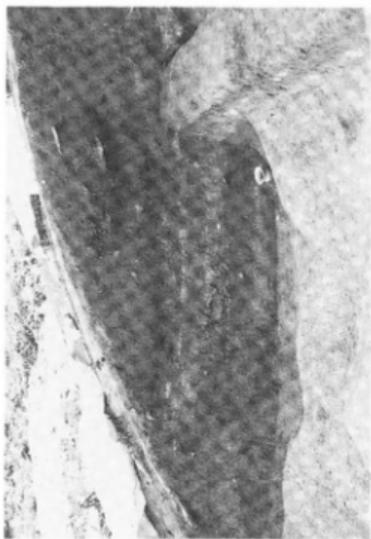
〔2〕 下坂2号窯体床面遺存状況（北より）



〔3〕 下坂2号窯体断面状況（東より）



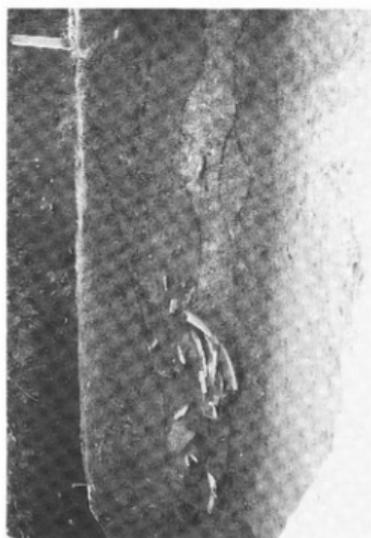
〔4〕 下坂2号窯体断面状況（南より）



〔1〕下坂2、3号窯北側盛土層断面（北より）



〔3〕下坂2、3号窯北側盛土層断面（G地区西側土層）



〔2〕下坂2号窯北側盛土層断面（東より）



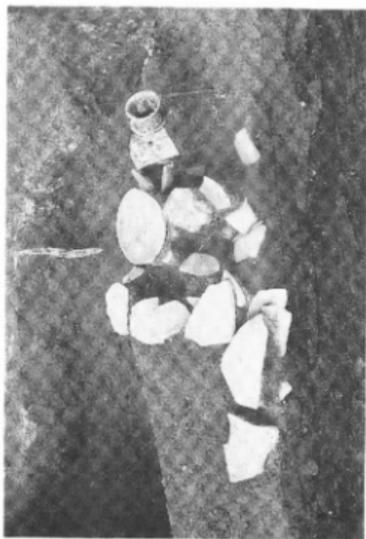
〔4〕下坂2、3号窯北側盛土層断面（G地区西側土層）



〔1〕下坂2号窯灰原検出状況（南東より）



〔2〕下坂2号窯灰原遺物検出状況（東より）



〔3〕下坂2号窯南側盛土中土器群（東より）



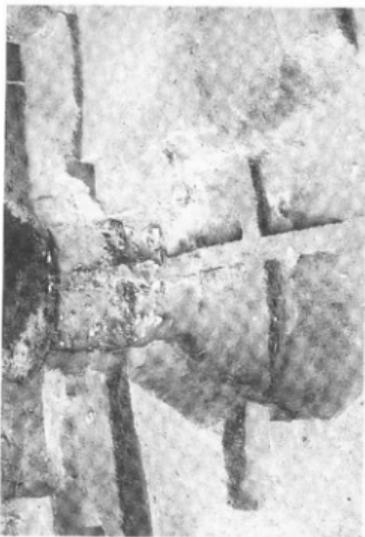
〔4〕下坂2号窯北側盛土中土器群（東より）



【1】下坂3号窯窯体内埋土状況（東より）



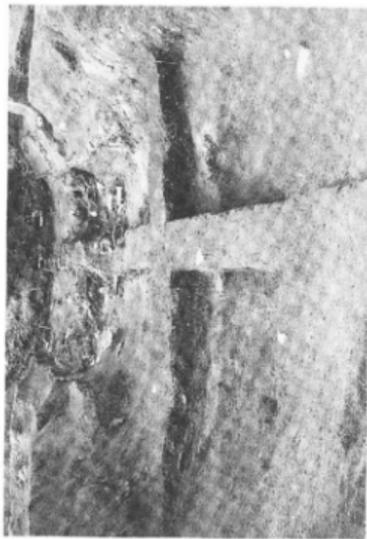
【2】下坂3号窯窯体検出状況（東より）



〔1〕下坂3号窯体内遺物出土状況（東より）



〔2〕下坂3号窯前庭部遺物出土状況（東より）



〔3〕下坂3号窯窯体内埋土断面（東より）



〔4〕下坂3号窯窯体内埋土断面（南より）



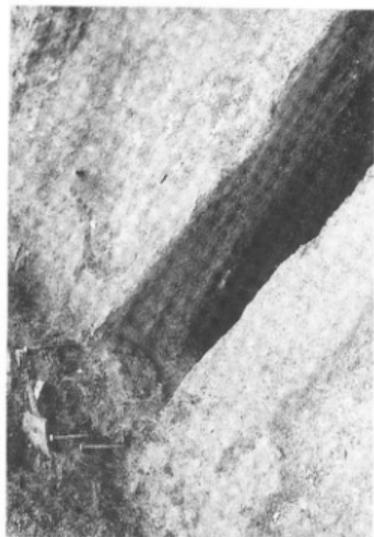
〔1〕下坂3号窯窯体断面(東より)



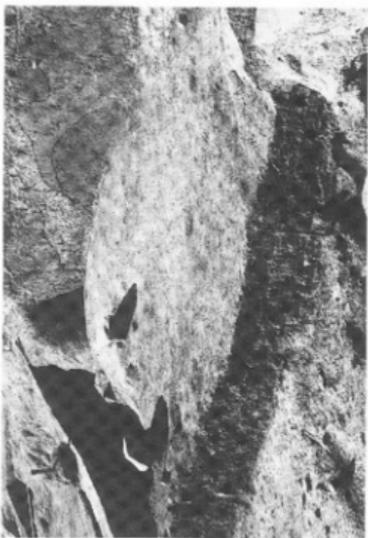
〔2〕下坂3号窯横裂口断面(東より)



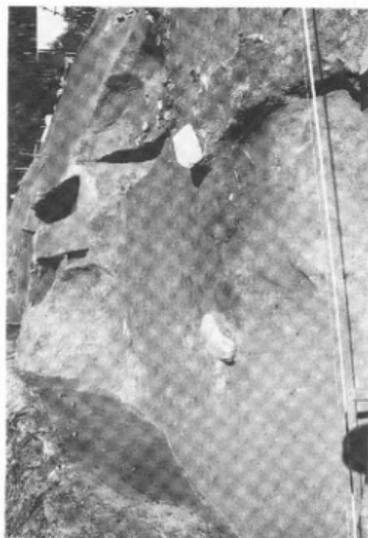
〔3〕下坂3号窯窯体断面(北側、東より)



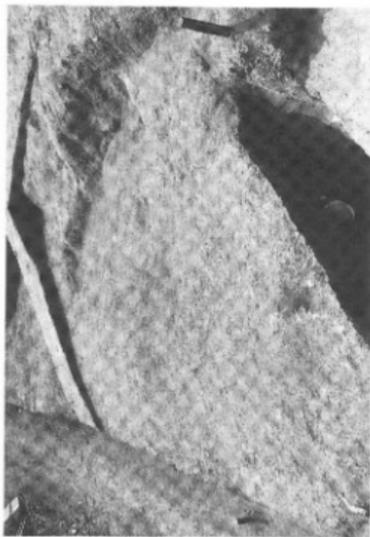
〔4〕下坂3号窯窯体断面(烧成部、南より)



〔1〕 整地面検出状況（北側、北東より）



〔2〕 整地面検出状況（北側、南より）



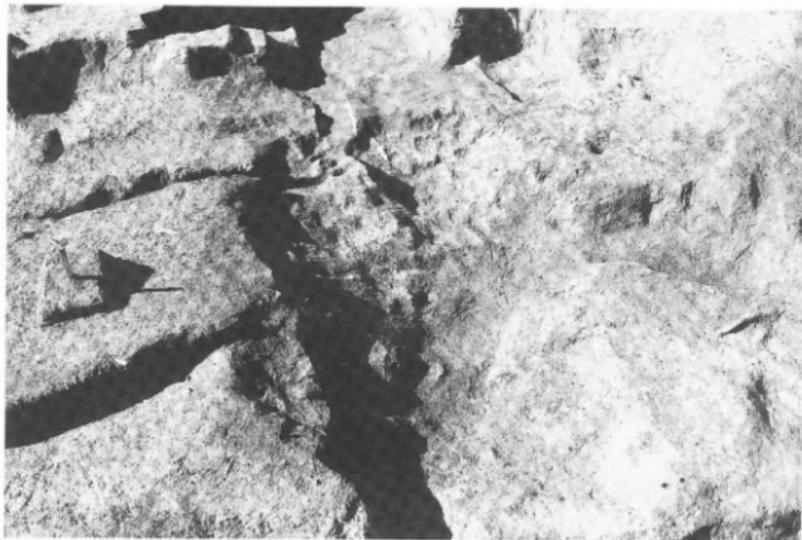
〔3〕 整地面検出状況（南側、北より）



〔4〕 整地面検出状況（南側、東より）



〔1〕下坂4号室検出状況（第2次作業面、東より）



〔2〕下坂4号室灰原検出状況（東より）



〔1〕下坂4号窯窯体内遺物出土状況（東より）



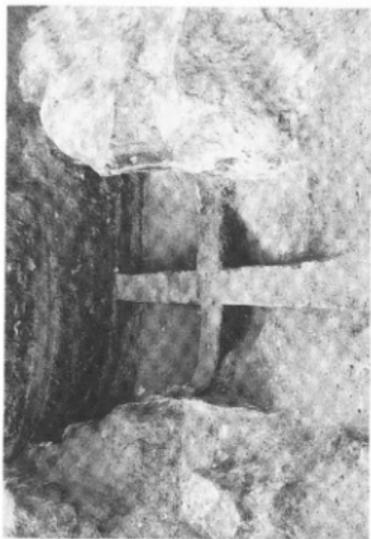
〔2〕下坂4号窯窯体内遺物出土状況（東より）



〔3〕下坂4号窯北側作業場検出状況（東より）



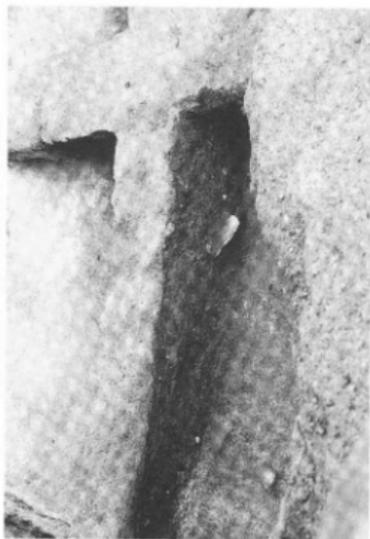
〔4〕下坂4号窯北側作業場検出状況（東より）



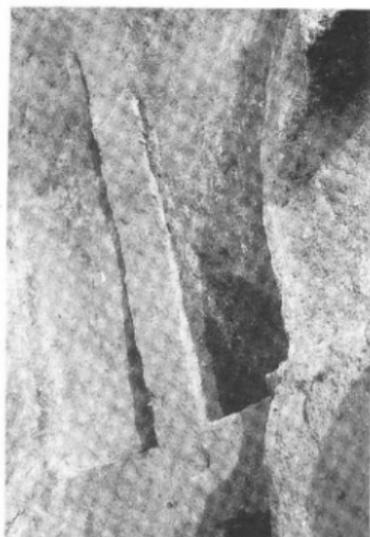
〔1〕下坂4号窯体断面(第2次操業面、東より)



〔2〕下坂4号窯体断面(第2次操業面、東より)



〔3〕下坂4号窯体断面(第2次操業面、南より)



〔4〕下坂4号窯体断面(第2次操業面、南より)



〔1〕下坂4号窯南側窯壁遺存状況・1



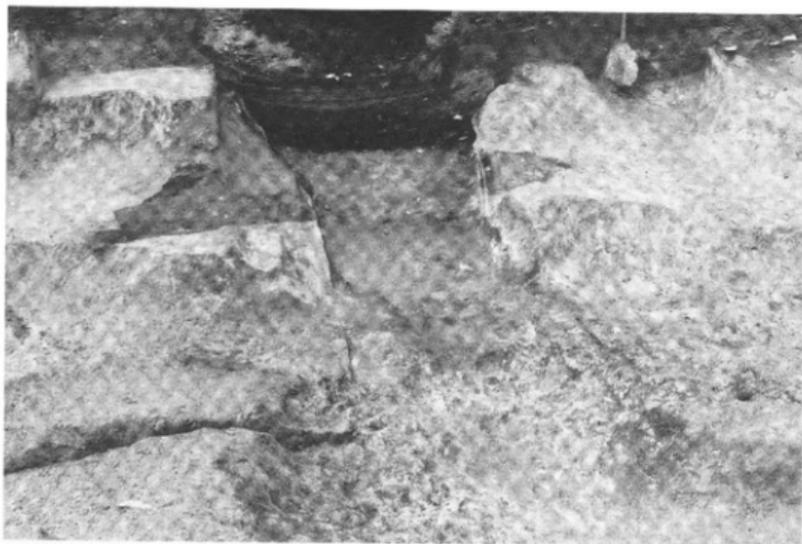
〔2〕下坂4号窯南側窯壁遺存状況・2



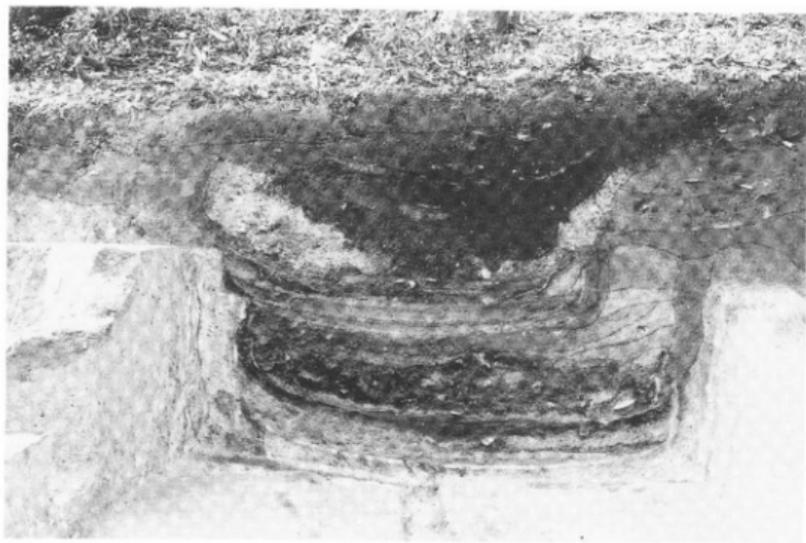
〔3〕下坂4号窯北側窯壁遺存状況・1



〔4〕下坂4号窯北側窯壁遺存状況・2



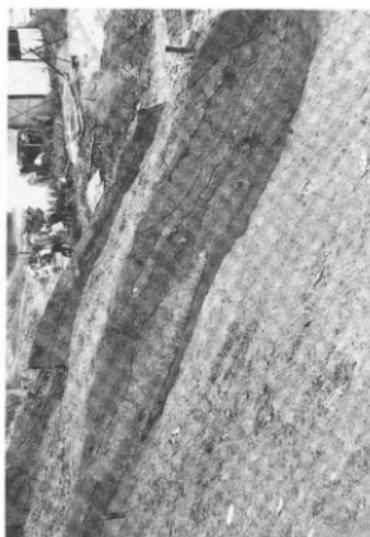
【1】下坂4号窯窯体検出状況（第2次作業面、東より）



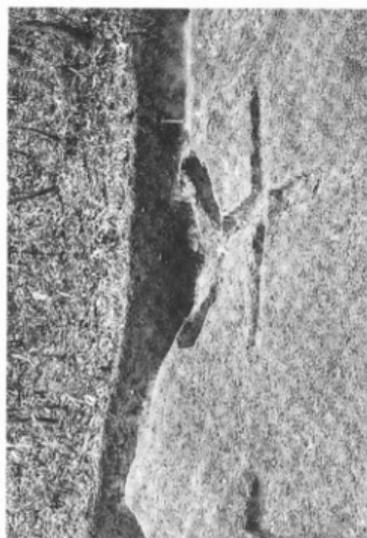
【2】下坂2・3・4号窯窯体重複状況（東より）



〔1〕下坂1号窯灰原土層断面(1号窯下部、南より)



〔3〕下坂1号窯灰原土層断面(南側、南より)



〔2〕G地区西側土層断面(1号窯上部、東より)



〔4〕作業風景



〔1〕 第2土坑遺構面検出状況（南東より）



〔2〕 第2土坑検出状況（西より）



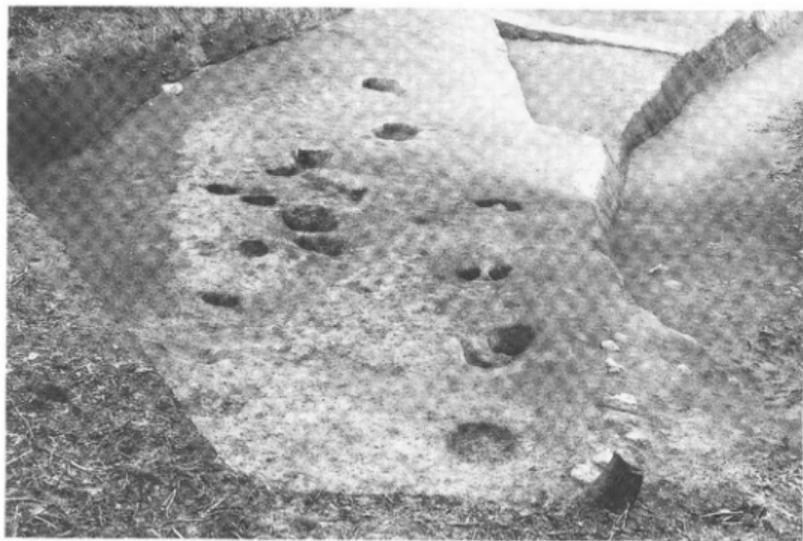
〔3〕 第3土坑検出状況（東より）



〔4〕 第3土坑検出状況（西より）



〔1〕H地区、掘立柱建物跡検出状況（東より）



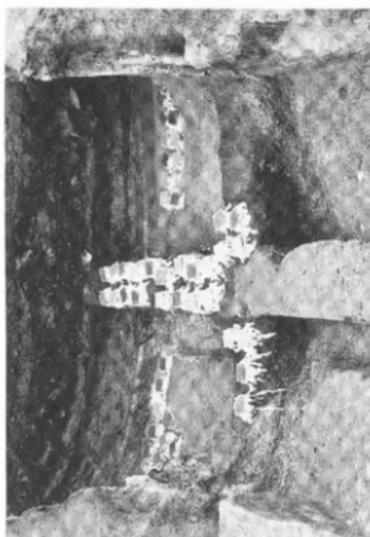
〔2〕H地区、掘立柱建物跡検出状況（南より）



〔1〕 磁気探査風景・1



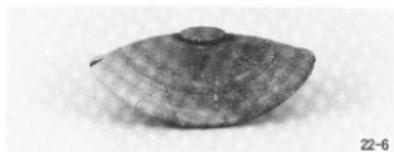
〔2〕 磁気探査風景・2



〔3〕 熱残留磁気測定サンプリング状況



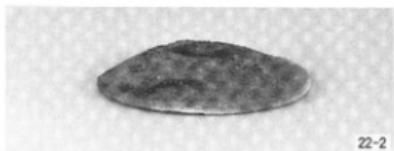
〔4〕 調査参加者



22-6



22-3



22-2



22-7



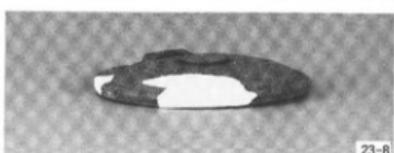
22-17



22-10



22-18



23-8



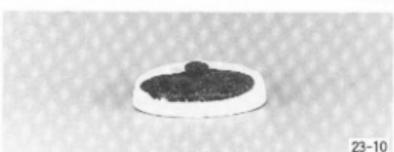
23-6



23-7



23-5



23-10



33-1



25-22

下板窯跡群出土遺物 (下坂1号窯、1号窯灰原)



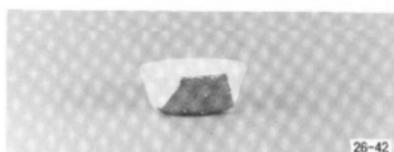
25-29



25-23



25-24



26-42



24-17



24-20



26-41



26-39



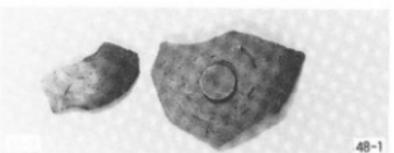
26-37



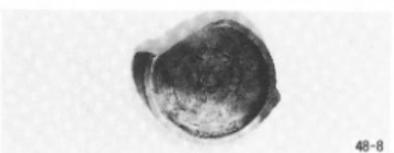
26-40



26-38



48-1



48-8

下坂窯跡群出土遺物 (下坂1号窯灰原)



35-37



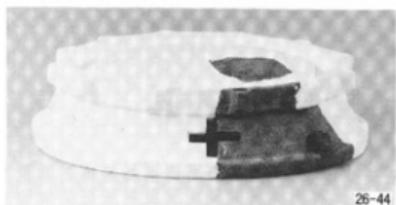
40-16



円面視外堤外面



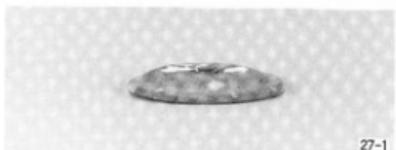
26-43



26-44



27-4



27-1



27-6



27-5



27-10



27-3



ヘラ記号
27-10



48-4

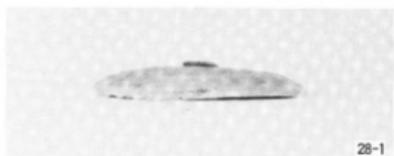
下坂窯跡群出土遺物 (下坂1号窯灰原、下坂2号窯)



27-9



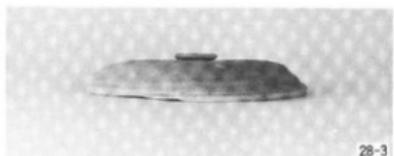
27-14



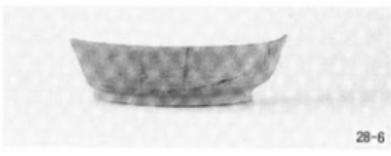
28-1



27-17



28-3



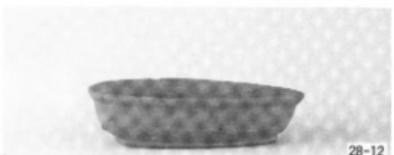
28-6



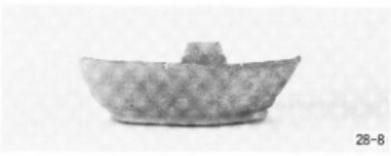
28-10



28-7



28-12



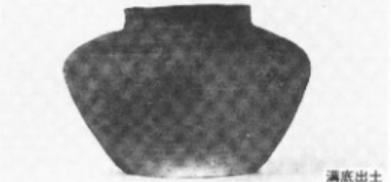
28-8



29-17



28-11

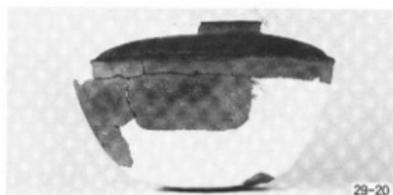


溝底出土

下坂窯跡群出土遺物 (下坂2号窯、2号窯灰原)



29-19



29-20



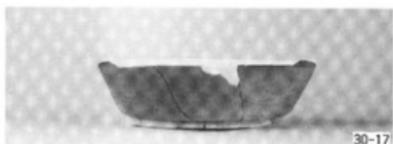
30-2



30-1



31-8



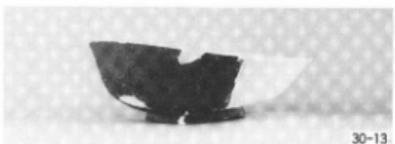
30-17



30-12



30-10



30-13



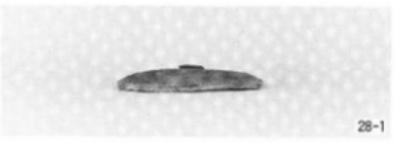
30-9



33-10



28-3

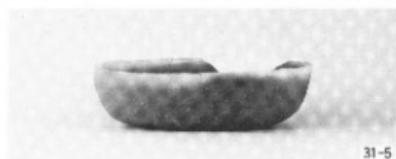


28-1



28-2

下坂窯跡群出土遺物（下坂2号窯灰原、整地面覆土、下坂3号窯）



31-5



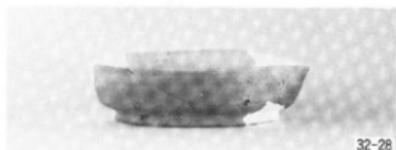
32-36



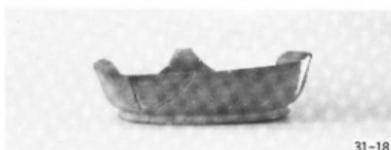
31-6



31-8



32-28



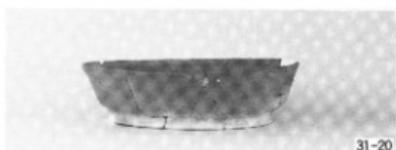
31-18



32-23



32-24



31-20



41-4

31-3



31-13

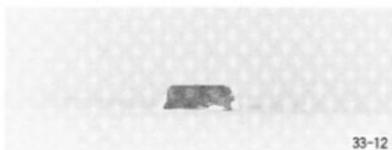
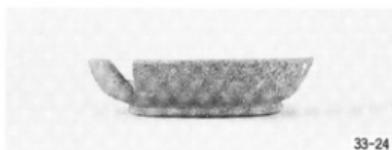
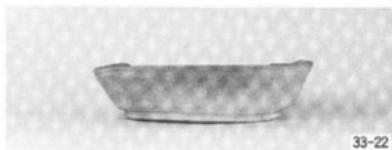
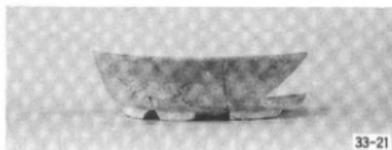
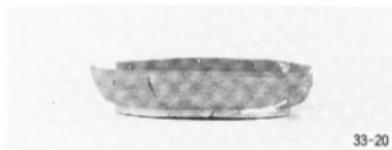


33-4



33-3

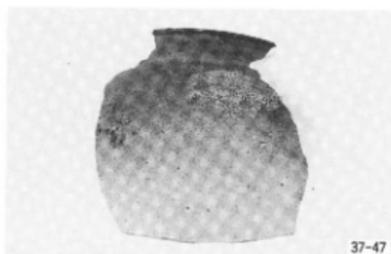
下坂窯跡群出土遺物（下坂3号窯、下坂2・3号窯北側盛土）



下坂窯跡群出土遺物 (下坂2・3号窯北側盛土)



37-48



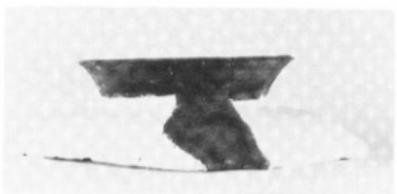
37-47



34-33



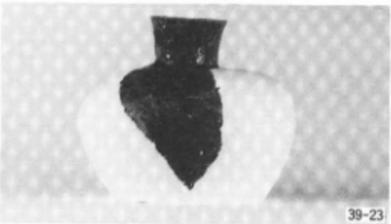
35-39



35-38



34-34



39-23

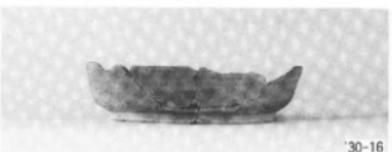
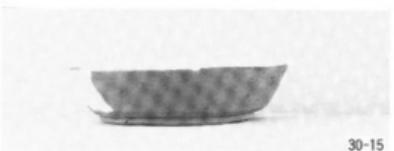
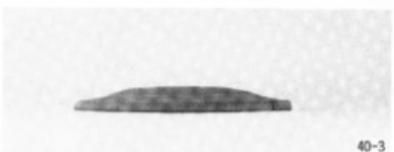
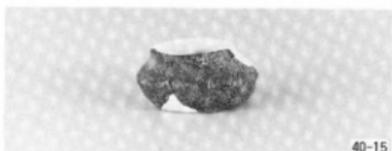
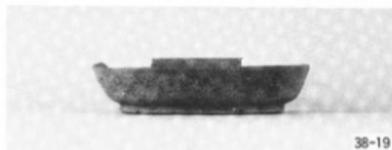


38-1

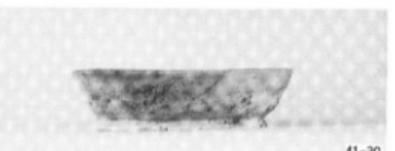
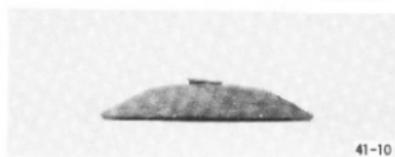
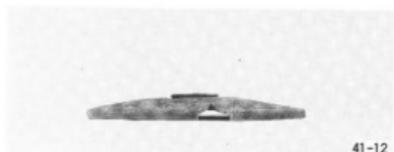


38-5

下坂窯跡群出土遺物 (下坂2・3号窯北・南側盛土)



下坂窯跡群出土遺物 (下坂2号窯南側盛土、整地面)



下板窟跡群出土遺物 (下坂4号竈)



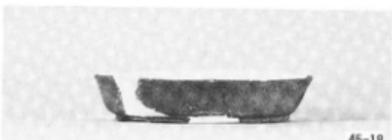
44-1



44-3



44-4



45-18



44-6



44-7



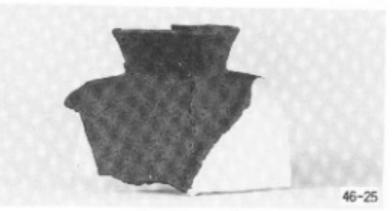
44-11



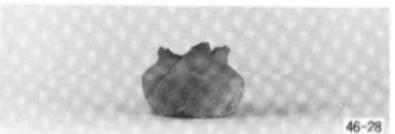
46-27



46-31



46-25



46-28



46-30

下坂窯跡群出土遺物 (第2・3土坑)



45-3



45-1



45-4



45-2



45-8



44-4



45-19



45-9



45-18



45-15



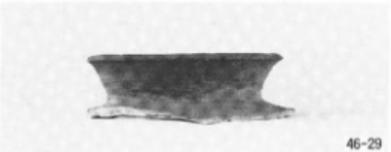
45-21



45-20



45-23



46-29



47-1



47-2



47-3



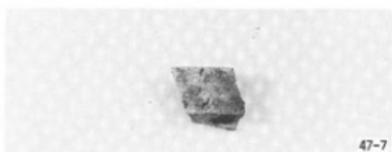
47-8



47-6



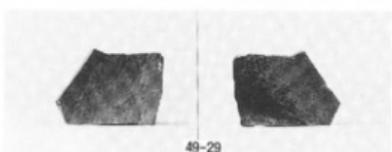
47-5



47-7



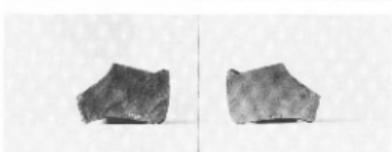
47-5



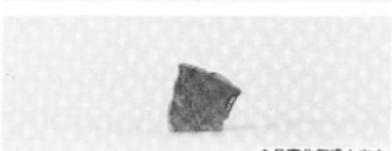
49-29



49-27

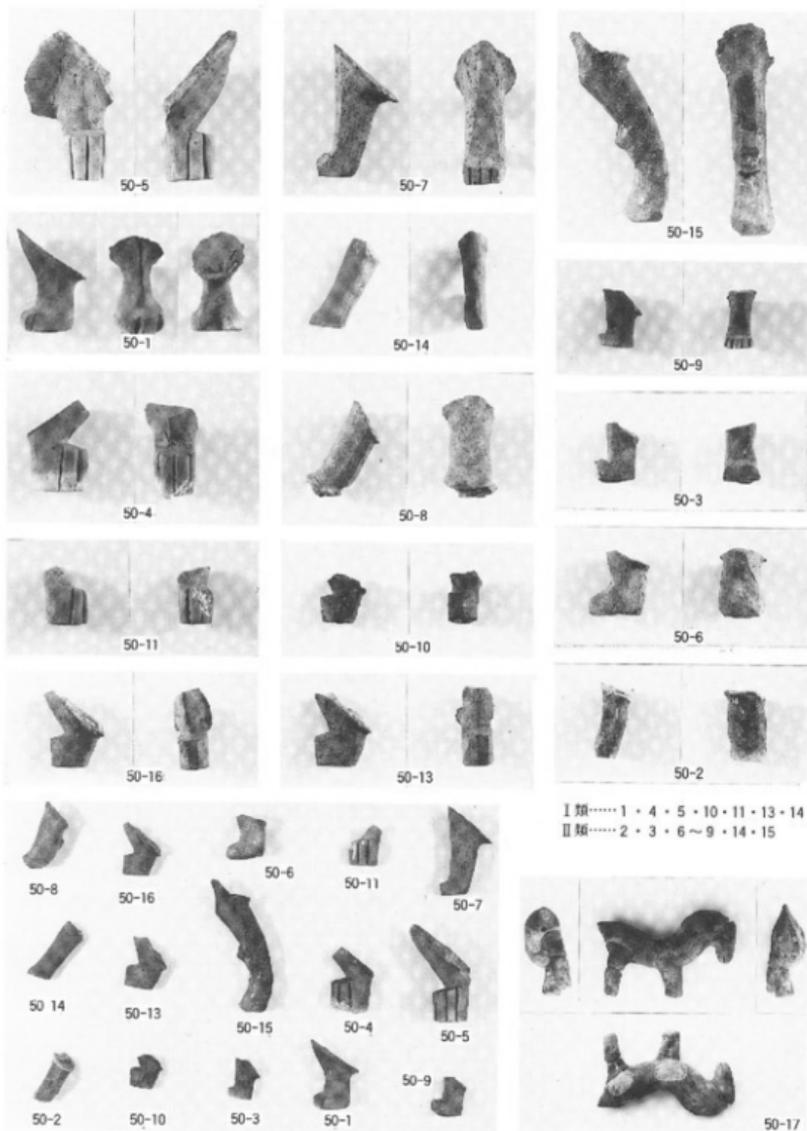


第4土坑

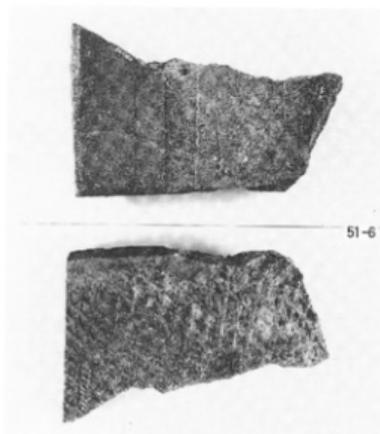


3号窟北側盛土出土

下坂窯跡群出土遺物（孤立柱建物跡、表探、試掘トレンチ他）、下段は叩き目文様

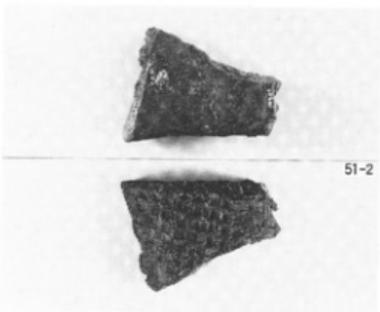


下板黨跡群出土遺物 (獸脚・土馬)

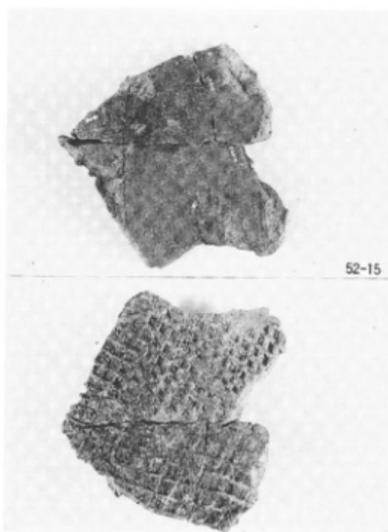
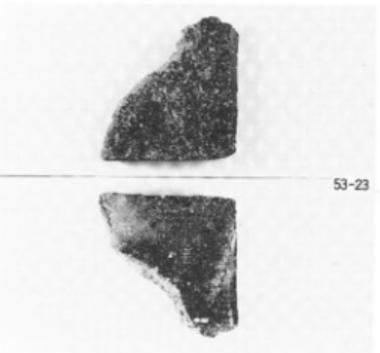


51-6

51-2

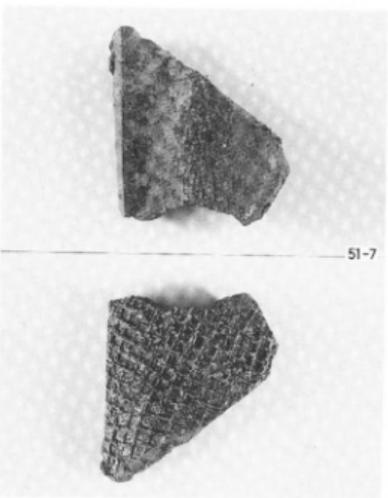


53-23



52-15

51-7



- 1号窯灰原……………2、15、33、36
 1号窯北側灰原……………6、7
 2・3号窯北側盛土……………22、23、24
 4号窯……………1



郡家町教育委員会刊行報告書一覽

1. 米調2号古墳(裝飾古墳)調査概報 1968.10
2. 山路遺跡発掘調査報告書 1974
3. 土師百井庵寺発掘調査報告書Ⅰ 1979.3.20
4. 土師百井庵寺発掘調査報告書Ⅱ 1980.3.20
5. 稲荷古墳群発掘調査報告書 1980.9
6. 万代寺遺跡発掘調査報告書 1982.3.20
7. 万代寺遺跡発掘調査報告書 1983.3
8. 天寺遺跡発掘調査報告書 1983.3
9. 山田窯跡群 1987.3
10. 下坂窯跡群 1988.3

郡家町文化財報告書10

下坂窯跡群

発行 1988・3

発行者 郡家町教育委員会

〒680-04

鳥取県八頭郡郡家町郡家

TEL.(0858)72-0201(代表)

印刷 綜合印刷出版株式会社